

都城市所在

かみたか
上高遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 3

2020

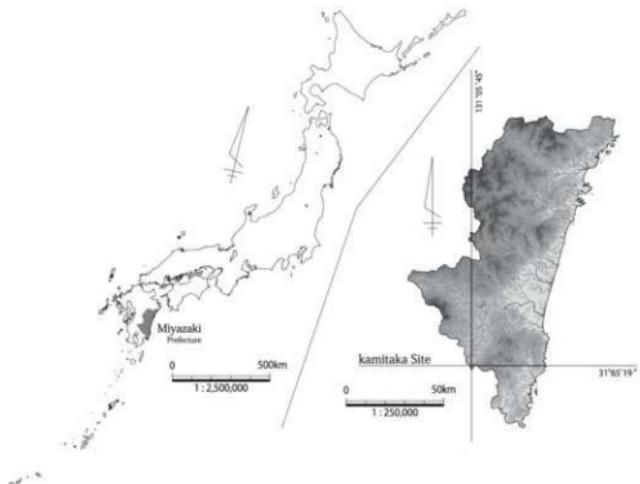
宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

かみ たか
上高遺跡

kamitaka Site

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書3



2020

序

宮崎県教育委員会では、地域高規格道路「都城志布志道路」の一部となる県道飯野松山都城線金御岳工区道路改良工事に伴い、平成29年度から平成30年度にかけて都城市梅北町に所在する上高遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

上高遺跡では、縄文時代早期の数多くの集石遺構をはじめ、縄文時代前期～中期の陥し穴状遺構や竪穴建物跡、縄文時代後期～晩期の遺構や遺物、中世の道路状遺構など、様々な時代の遺構・遺物が検出され、この地において連綿として続いてきた人々の営みを明らかにすることができました。それらは、梅北地区をはじめとする都城盆地南部の歴史を解明する上で、重要な位置を占めるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 山元高光

例 言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町に所在する上高遺跡の発掘報告書である。
- 2 発掘調査は都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。第1次調査は平成29年5月8日から平成30年2月28日までの178日間、第2次調査は平成30年4月16日から平成30年7月4日までの44日間の2カ年度にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、平井祥蔵、和田理啓、高村哲、徳田尚文、下田代清海が担当した。現地調査における図面作成及び写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 調査に際しては、世界測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、平井祥蔵が整理作業員の補助を得て行った。
- 6 グリッド坑設置に伴う測量業務、空中写真撮影、自然科学分析（放射性炭素年代測定、樹種同定）、石器実測は、次の業者に委託した。
 - ・ 测量業務委託 株式会社 南日本総合コンサルタント
 - ・ 空中写真撮影 株式会社 ふじた・有限会社 スカイサーべイ九州
 - ・ 自然科学分析 株式会社 古環境研究センター
 - ・ 石器実測委託 株式会社 島田組
- 7 本書で使用した第2図「上高遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図」は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1『都城』『末吉』をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』を参考にした。
- 9 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海拔絶対高である。また、全体図で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第II系に準拠している。
- 10 本書の執筆は、平井祥蔵が行い、今塩屋毅行がこれを補助した。なお、第IV章の報告記載内容は、古環境研究センターへの委託成果品を平井が整理・編集したものである。
- 11 石材・テフラの同定については、当埋蔵文化財センター職員である赤崎広志の協力を得た。
- 12 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

SA：堅穴建物跡

SC：土坑

SI：集石遺構

SG：道路状遺構

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の方法と経過	2
第4節 整理作業及び報告書作成	4

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序	8
第2節 繩文時代早期の遺構と遺物	12
第3節 繩文時代前期～中期の遺構と遺物	26
第4節 繩文時代後期～晩期の遺構と遺物	34
第5節 古代の遺物	73
第6節 中世の遺構	74

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要	85
第2節 放射性炭素年代測定	85
第3節 樹種同定	85

第Ⅴ章 総括

第1節 繩文時代早期	89
第2節 繩文時代前期～中期	89
第3節 繩文時代後期の遺物	90
第4節 繩文時代晩期の遺構と遺物	90
第5節 古代の遺物	91
第6節 中世の遺構	91
第7節 結語	92

挿 図 目 次

第1図 調査区及びグリッド配置図	2	第30図 23・24・34・36号土坑出土遺物実測図	42
第2図 上高遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図	7	第31図 36・40・41・43号土坑実測図	44
第3図 上高遺跡周辺地形図	9	第32図 40・41号土坑出土遺物実測図	45
第4図 調査区内の堆積層残存状況	9	第33図 41号土坑出土遺物実測図(1)	46
第5~1図 土層断面図	10	第34図 41号土坑出土遺物実測図(2)	47
第5~2図 土層断面図	11	第35図 41・43号土坑出土遺物実測図	48
第6図 散縫平面分布図	12	第36図 52~55・57・58号土坑実測図	50
第7図 縄文時代早期遺構分布図	13	第37図 59~61・65号土坑実測図	52
第8図 1~3・5~7号集石遺構実測図	16	第38図 55・57・59・60号土坑出土遺物実測図	53
第9図 4・8~11号集石遺構実測図	17	第39図 61・65号土坑出土遺物実測図	54
第10図 12~17号集石遺構実測図	18	第40図 66・67・71号土坑及び66号土坑 出土遺物実測図	55
第11図 18~19号集石遺構実測図	19	第41図 66・67・71号土坑出土遺物実測図	56
第12図 20~21号集石遺構実測図	20	第42図 縄文時代後期土器実測図	59
第13図 22~23号集石遺構実測図	21	第43図 縄文時代晚期土器実測図(1)	60
第14図 24号集石遺構実測図	22	第44図 縄文時代中期土器実測図(2)	61
第15図 25~76号土坑実測図	22	第45図 縄文時代中期土器実測図(3)	62
第16図 25号土坑出土遺物実測図	23	第46図 縄文時代晚期土器実測図(4)	63
第17図 縄文時代早期土器実測図	24	第47図 縄文時代中期土器実測図(5)	64
第18図 縄文時代早期土器及び石器実測図	25	第48図 縄文時代晚期土器実測図(6)	65
第19図 縄文時代前期~中期遺構分布図	27	第49図 縄文時代晚期土器実測図(7)	66
第20図 1・2号堅穴建物跡及び出土遺物実測図	29	第50図 縄文時代晚期土器実測図(8)	67
第21図 26・29~30・42・73・74号土坑実測図	30	第51図 縄文時代晚期土器実測図(9)	68
第22図 75~77号土坑及び 27~28号土坑(陥し穴状遺構)実測図	32	第52図 縄文時代後期~晚期土器実測図(1)	70
第23図 68~70・72号土坑(陥し穴状遺構)実測図	33	第53図 縄文時代後期~晚期土器実測図(2)	71
第24図 縄文時代後期~晚期遺構分布図	35	第54図 縄文時代後期~晚期土器実測図(3)	72
第25図 1・4・6・9・11~15号土坑実測図	36	第55図 縄文時代後期~晚期土器実測図(4)	73
第26図 1~11号土坑出土遺物実測図	37	第56図 古代の土器類実測図	74
第27図 11号土坑出土遺物実測図	38	第57図 道路状遺構分布図	75
第28図 17~19・21~23・24~31・34~35号土坑実測図	40	第58図 道路状遺構土層断面実測図	77
第29図 23号土坑出土遺物実測図	41	第59図 屢年較正結果	87

表 目 次

第1表 土器観察表(1) ······	78	第8表 石器計測表 ······	84
第2表 土器観察表(2) ······	79	第9表 測定試料の詳細と方法 ······	87
第3表 土器観察表(3) ······	80	第10表 放射性炭素年代測定結果 ······	87
第4表 土器観察表(4) ······	81	第11表 樹種同定結果 ······	88
第5表 土器観察表(5) ······	82	第12表 各土坑における入佐式・黒川式土器 の細分型式 ······	91
第6表 土器観察表(6) ······	83		
第7表 土器観察表(7) ······	84		

写 真 目 次

写真1 タール状物質・炭化材写真 ······	88
-------------------------	----

図 版 目 次

図版1		図版7	
上高遺跡から霧島山を望む 上高遺跡周辺地形		2号堅穴建物跡 柱穴	2号堅穴建物跡 貼床除去
		27号土坑土層断面	27号土坑完掘状況
図版2		68号土坑検出状況	68号土坑完掘状況
調査区から鹿児島市街地を望む		調査区基本層序	樹根除去作業の様子
調査区から鹿児島県志布志市方面を望む			
図版3		図版8	
上高遺跡全景(縄文時代早期遺構)		72号土坑土層断面	72号土坑完掘状況
		72号土坑精査の様子	
		75号土坑と風倒木痕の検出状況	
図版4		75号土坑土層断面	
25号土坑遺物出土状況	10号集石遺構検出状況	74・75・77号土坑完掘状況	発掘作業の様子
12号集石遺構検出状況	16号集石遺構検出状況		
21号集石遺構検出状況	23号集石遺構検出状況	図版9	
24号集石遺構検出状況	集石遺構検出作業の様子	上高遺跡全景(縄文時代晚期遺構)	
図版5		図版10	
縄文時代前期～中期の遺構群		縄文時代晚期の土坑群	
		1号土坑検出状況	1号土坑完掘状況
図版6		11号土坑遺物出土状況	11号土坑土層断面
1号堅穴建物跡検出状況	1号堅穴建物跡完掘状況		
2号堅穴建物跡検出状況	2号堅穴建物跡土層断面		
2号堅穴建物跡全景			

図版11

23号土坑遺物出土状況	23号土坑完掘状況
40号土坑遺物出土状況	40号土坑完掘状況
41号土坑遺物出土状況	41号土坑完掘状況
65号土坑遺物出土状況	66号土坑遺物出土状況

図版12

中世の道路状造構全景	
道路状造構から調査区南方向を望む	
道路状造構検出状況	道路状造構土層断面 1
道路状造構土層断面 2	波板凹凸面検出状況

図版13 繩文時代早期・前期～中期の遺物

SC25出土土器(縄文時代早期)	
縄文時代早期 包含層出土土器(1)～(3)	
縄文時代早期・前期～中期の石器	

図版14 繩文時代晩期の遺構出土遺物

SC1出土土器	SC11出土土器(1)(2)
SC23出土土器(1)(2)	
SC23出土石器	SC24・34・36出土土器・石器
SC40出土土器・石器	

図版15 繩文時代晩期の遺構出土土器

SC41出土土器(1)～(7)

図版16 繩文時代晩期の遺構出土土器

SC43出土土器	SC55・57出土土器
SC59出土石器	SC60出土土器
SC61・65出土土器	SC65出土土器
SC66出土土器・石器	

図版17 繩文時代後期～晩期の土器

縄文時代後期 包含層出土土器
縄文時代晩期 包含層出土土器(1)～(5)

図版18 縄文時代晩期の土器

縄文時代晩期 包含層出土土器(6)～(11)

図版19 縄文時代晩期の土器

縄文時代晩期 包含層出土土器(12)～(19)

図版20 縄文時代後期～晩期の石器・古代の遺物

縄文時代後期～晩期 包含層出土石器(1)～(5)
古代の遺物

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

地域高規格道路「都城志布志道路」は、宮崎県都城市を起点に鹿児島県曾於市を経由して志布志市に至る、総延長約44kmの自動車専用道路である。この道路は、都城・大隅定住自立圏の地域振興や防災・経済・医療対策の機能強化を図るため、九州縦貫自動車道宮崎線（都城I.C）と東九州自動車道（志布志I.C）および物流拠点である中核国際港湾の志布志港を結ぶ路線であり、平成6年12月に計画路線に指定された。

都城志布志道路のうち、宮崎県側では約22kmが工事施工区間であり、その路線構成は都城I.C－五十町I.C間（約13.4km）が一般国道10号都城道路（国土交通省事業）、五十町I.C－県境（約8.5km）が県道12号都城東環状線および県道109号飯野松山都城線のバイパス（県事業）である。

当該路線内の埋蔵文化財については、25遺跡393,700m²の存在が把握されており、平成9年度以降、宮崎県教育庁文化財課による試掘・確認調査の結果をもとに、工事計画と遺跡の保護に関する協議調整が重ねられてきた。今回、発掘調査を実施した上高遺跡は、金御岳I.C－県境区間（金御岳工区）内に位置する。同工区では計5箇所の遺跡が把握されており、これまでに保木島遺跡（平成27・29～30年度）、嫁坂遺跡（平成28～29年度）、大浦遺跡（平成30年度）、小迫遺跡（平成30年度）の発掘調査が行われている。上高遺跡では平成28年度実施の確認調査結果をもとに、遺跡の取り扱いに関する協議を進めた結果、遺構や遺物の存在が確認された5,400m²は現状保存が困難であることから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

これを受けて、平成29（2017）年3月、県道飯野松山都城線（金御岳工区）地域連携推進事業の一環として、県都城土木事務所より発掘調査の依頼がなされ、平成29年5月、県埋蔵文化財センターを調査機関とする発掘調査の着手へと至ったものである。

第2節 調査の組織

上高遺跡における発掘調査組織は下記の体制で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー（主幹） 飯田 博之 （平成29～令和元年度）

埋蔵文化財担当主查 松本 茂 （平成29～30年度）

藤木 智 （令和元年度）

発掘調査・整理作業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター

所長 菅付 和樹 （平成29年度）

長峯 勝志 （平成30年度）

山元 高光 （令和元年度）

副所長 甲斐 久志 （平成29年度：兼 総務課長）

田中 礼子 （平成30年度：兼 総務課長）

内野 真由美 （令和元年度：兼 総務課長）

総務課長 甲斐 久志 （平成29年度）

田中 礼子 （平成30年度）

内野 真由美 （令和元年度）

副主幹兼総務担当リーダー	寺原 真由美	(平成 29 年度～平成 30 年度)
主幹兼総務担当リーダー	寺原 真由美	(令和元年度)
調査課長	吉本 正典	(平成 29 年度～平成 30 年度)
	赤崎 広志	(令和元年度)
調査課調査第一担当リーダー（主幹）	松林 豊樹	(平成 29 年度～平成 30 年度)
調査課調査第一担当リーダー（副主幹）	和田 理啓	(令和元年度)
調査課調査第一担当主査	平井 梓藏	(平成 29・30 年度 調査担当 令和元年度 整理・報告書作成)
調査課調査第一担当主査	和田 理啓	(平成 29 年度 調査担当)
調査課調査第一担当主査	徳田 尚文	(平成 29 年度 調査担当)
調査課調査第一担当主査	高村 哲	(平成 30 年度 調査担当)
埋蔵文化財調査員	下田代清海	(平成 29 年度 調査員)

第3節 発掘調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

調査区の設定

上高遺跡の発掘調査は、調査対象面積 5,400 m²を 2 箇年度に渡り実施した。調査対象範囲内には市道があり、排土置き場の確保の面などから、便宜上 A1 区 (1,200 m²)、A2 区 (1,600 m²)、B1 区 (900 m²)、B2 区 (1,200 m²)、C 区 (500 m²) の 5 地方に設定した。



第1図 調査区及びグリッド配置図

グリッドの設定

調査対象地域全域に対して、国土座標に（世界地図）に基づいた 10m × 10m のグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。

作図記録

遺構の作図に関しては、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本とし、平面図については(株)CBIC製の「遺構くん」で実測・作図・記録したが、一部の竪穴建物跡や集石遺構等、遺物出土状況を詳しく記録したものについては調査員が実測・作図を行った。

写真記録

全調査区ともに、35mm白黒ネガ・リバーサルフィルムを基本として、一部中判カメラによる白黒ネガ・カラーリバーサルフィルム撮影を行った。また、メモ記録として、デジタルカメラを併用した。なお、各調査区のV層、X層のそれぞれ上面において、業者委託による空中写真撮影を行った。

遺構番号

遺構番号は、検出された遺構別にA区～C区を通しての連番で振った。ただし、土坑(SC)については、遺構の形態や埋土の状況といった調査時の所見や報告書作成段階での検討により、擾乱や樹根等と判断したもののが存在するため、正式報告にあたっては、下記の土坑番号についてはこれを除外する。

SC2・SC3・SC5・SC7・SC8・SC10・SC12～14・SC16・SC18・SC20・SC22・SC32・SC33・SC37～39・SC44～51 SC56・SC62～64・SC69・SC76
--

2 発掘調査の経過

第1次調査は、A1区～B2区(4,900m²)を対象に平成29年5月8日～平成30年2月28日まで実施した。

第2次調査は、市道部分のC区を平成30年4月16日～平成30年7月4日まで実施した。

なお、5つの調査区は互いに隣接しているため、区ごとではなく、調査区全体の調査成果として報告する。各調査区における発掘調査経過の概要については、下記の通りである。

A1区

H29.5.8～18	重機による表土除去
5.23～26	樹根等の除去作業
6.5～9	縄文時代後期・晩期の遺物包含層(IV層)掘削
6.5～13	道路状遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
6.13～29	縄文時代後期・晩期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
6.16～7.21	V層上面にて空中写真撮影・V層～IX層掘削
7.18～8.1	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
7.26	X層上面にて空中写真撮影
7.28～8.1	埋め戻し、調査終了

A2区

H29.8.2～10	重機による表土除去
8.16～25	樹根等の除去作業
9.4～13	縄文時代後期・晩期の遺物包含層(IV層)掘削
9.7～26	A1区より続く道路状遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
9.11～10.4	縄文時代後期・晩期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
9.26	V層上面にて空中写真撮影
10.10～25	IX層掘削
10.26	X層上面にて空中写真撮影
10.23～11.13	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の土坑・集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
11.13～14	埋め戻し、調査終了

B1 区

H29.11.14～20	重機による表土除去
11.15～29	縄文時代後期・晚期の遺物包含層（IV層）掘削
12.4～12.15	縄文時代後期・晚期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
12.12	V層上面にて空中写真撮影
12.14～25	IX層掘削
12.21～12.20	縄文時代早期の遺構掘削及び実測
12.26	X層上面にて空中写真撮影
12.15～H30.1.30	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 埋め戻し、調査終了

B2 区

H30.1.9～12	重機による表土除去
1.12～25	縄文時代後期・晚期の遺物包含層（IV層）掘削
1.19～2.7	縄文時代後期・晚期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
2.5	V層上面にて空中写真撮影
2.8～16	IX層掘削
2.9～22	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
2.26	X層上面にて空中写真撮影
2.27～28	埋め戻し、調査終了

C 区

H30.4.25～26	重機による表土除去
5.1～16	縄文時代後期・晚期の遺物包含層（IV層）掘削
5.17～28	縄文時代後期・晚期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
5.28	V層上面にて空中写真撮影
5.29～6.15	IX層掘削
6.4～7.2	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
6.27	X層上面にて空中写真撮影
7.2～4	埋め戻し、調査終了

第4節 整理作業及び報告書作成

出土品及び記録物を宮崎県埋蔵文化財センターへ持ち帰り、遺物洗浄及び注記作業を平成30年4月～8月まで行った。注記作業終了後は、接合作業を平成30年9月～平成31年3月まで行った後、平成31年4月～令和元年7月まで実測作業を行った。

このほか業務委託として、石器の実測を令和元年5月より、炭化樹種同定・放射性炭素年代測定ための蛍光X線分析を6月より行った。そして報告書刊行に係る製図及び執筆編集作業の全てを同年12月までに完了させ、1月から3月にかけて印刷・製本作業を行った。

また、報告書作成期間中の平成30年9月2日に遺跡発掘速報会（於宮崎県立図書館）を行った。



【速報会の様子】

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

上高遺跡は宮崎県都城市梅北町に所在する。都城市は、宮崎県の南西端に位置する人口約17万人を擁する県内第2の都市である。また、宮崎市、日南市、串間市、三股町、高原町、鹿児島県曾於市・霧島市の5市2町に隣接している南九州第3の中核的な拠点都市である。市域は約650 km²と広く、東に鰐塚山系、西に霧島山系の山々に囲まれた盆地となっており、盆地底には一級河川の大淀川が北流している。また、盆地の東側には大淀川の支流によって開拓された扇状地が発達しており、西側では広大な成層シラス台地が広がっている。

盆地周辺には、活火山が多く存在し、平成23年に噴火した新燃岳が、本調査期間において6年ぶりに再噴火しており、霧島火山群や姶良カルデラを中心とする南九州の火山活動は、都城盆地に住む人々の活動に大きな影響を今も与え続けている。

今回、調査を実施した上高遺跡は、都城市の中心部から南に約8kmの梅北町に位置し、鰐塚山系南端部の金御岳から派生する丘陵の裾部に立地し、標高200mのシラス台地上位面に立地する。(図版1・第2・3図)

第2節 歴史的環境

旧石器時代

宮崎県内では、宮崎平野や県北の五ヶ瀬川流域を中心に300箇所を超える旧石器時代の遺跡が確認されているが、都城盆地一帯では、シラスをはじめとする厚い火山灰に覆われているため、当該期の発掘調査事例は数少ない。そのなかでも、大岩田上村遺跡、中床丸遺跡、池増遺跡、雀ヶ野遺跡等では、細石刃石器群の存在が確認されている。

縄文時代

草創期の遺跡としては、県内最古級の土器片と細石刃が共伴して出土した軍人原遺跡がある。また、王子山遺跡では、竪穴状造構・炉穴・集石造構等や隆帶文土器が検出された。また、本遺跡の周辺には、隆帶文土器が出土した川原谷出水遺跡や、桜島薩摩テフラを含む層の下部から集石造構が検出された笹ヶ崎遺跡もある。

早期の遺跡としては、都城志布志道路建設に伴って発掘調査を行った笹ヶ崎遺跡、中床丸遺跡、高橋遺跡、2019年報告分の綿坂遺跡（以下、嫁坂遺跡と略す）において集石造構等が検出された事例がある。また、これらの遺跡では貝殻文円筒形土器（前平式・加栗山式・石坂式・下剥峰式、桑ノ丸式）、押型文土器の他、塞ノ神式土器なども出土している。

前期は、鬼界アカホヤ火山灰による影響のためか、遺跡数は少なくなる。加治屋A遺跡では陥し穴造構が検出されており、王子原遺跡で轟B式と曾畠式、笹ヶ崎遺跡で曾畠式土器が出土している。

中期も前期同様に遺跡数は少ないが、伊勢谷第1遺跡、田谷、尻枝遺跡では陥し穴造構が検出されている。また、笹ヶ崎遺跡と高橋遺跡において、比較的まとまった量の深浦式土器が出土しており、高橋遺跡では集石造構と土坑が検出されている。

なお、前期～中期の所産と考えられている陥し穴状造構が梅北佐土原遺跡で検出されている。

後期になると遺跡の数が増加し、都城盆地全体、特に丘陵の尾根部や裾部、台地の縁辺さらには扇状地上に立地するようになる。また、竪穴建物跡や土坑といった集落そのものの様相が読みとれる発掘調査事例も多くなる。本遺跡周辺では、中床丸遺跡で市来式土器や草野式土器、磨消縄文土器などが多数出土している。また、

嫁坂遺跡では、堅穴建物跡から中岳II式土器、宮之迫式土器が出土しており、他にも三万田式土器、御領式土器、鳥居原式土器などが包含層より出土している。

晩期では、本遺跡周辺においては、高樋遺跡、笛ヶ崎遺跡、大年遺跡、嫁坂遺跡など黒川式土器の時期を中心とする遺跡が数多く調査されている。同じく嫁坂遺跡でも、堅穴建物跡から入佐式土器が出土している。

弥生時代

都城盆地では、坂元A遺跡において、弥生時代の早い段階から古代・中世までの水田の移り変わりを見ることができる。また、中期後半の水田跡からは、木製品や丸杭などがまとまって出土している。黒土遺跡では擦り切り孔を有する石庖丁や楋圧痕を有する土器片などが出土している。集落跡としては、筆無遺跡や備女木遺跡、大岩田村ノ前遺跡、大浦遺跡があげられ、中期後半以降の集落が多くみられる。本遺跡周辺では、大年遺跡から刻目突帯文土器や表面に赤色顔料を塗布した壺の破片が出土しており、後期後半から古墳時代初頭の集落が確認されている。

古墳時代

都城盆地は、南部九州特有の墓制である地下式横穴墓の一大分布圏であるが、盆地の北縁部には高城牧ノ原古墳群、志和池古墳群、高崎古墳群に代表される高塚墳が集中する。また、野添遺跡、平峰遺跡、笛ヶ崎遺跡、高樋遺跡、大年遺跡では中期頃の集落跡が確認され、なかでも平峰遺跡は、多角形建物を含む大規模な集落であり、鉄挺をはじめ多くの鍛冶関連遺物や陶質土器、仕切付角鉢などの特殊な遺物が出土している。また、大年遺跡、高樋遺跡でも鍛冶関連遺物が多く出土している。

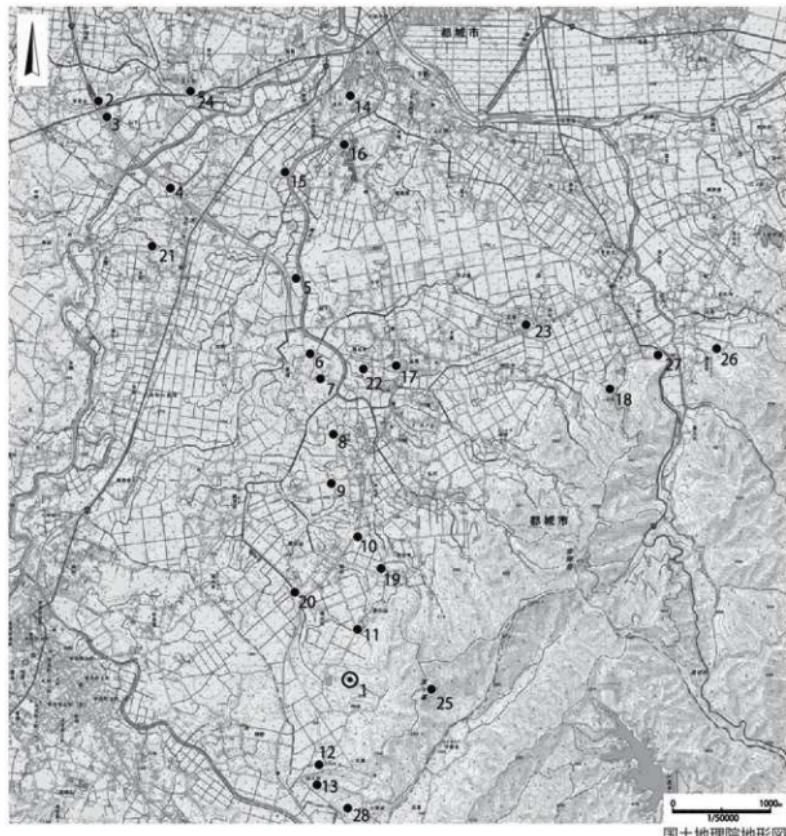
古代～中世

本遺跡が所在する梅北地区には古代から中世の遺跡が数多く調査されている。梅北針谷遺跡では、古代を中心とする掘立柱建物跡に加え、焼土を伴う多数の土坑から、多くの鍛冶関連遺物が出土している。筆無遺跡では、溝状造構に囲まれた掘立柱建物跡や周溝墓、土坑墓などが確認され、文明年間に降下した松島起源の白ボラによって埋没、復旧した畠跡とみられる畠間状造構も検出されている。同様の遺構は、大年遺跡、笛ヶ崎遺跡でも確認されており、笛ヶ崎遺跡では、掘立柱建物跡や溝状造構とともに犬走状造構や堀切、土壘といった遺構が検出され、防衛施設を備えた中世居館であった可能性が高い。

梅北地区は、島津荘の祖とされる平季基開連の史跡などが多く分布されることも特徴の一つである。季基は万寿3（1026）年頃に当地に下向し、三保院の主として益貫に居住したとされている。また、梅北川東岸の丘陵地に立地し、四つの曲輪からなる群郭式城館跡と知られる梅北城は、平季基の築城と伝えられている。現在は、城の中央部を残すのみであるが、その北側と東側には土壘が現存し、空堀もほぼ原形をとどめている。

近世

中世以降の梅北地区周辺には寺院などの宗教施設が存在していたようであるが、廃仏毀釈などの影響により現存するものは少ない。発掘調査された遺跡としては、尾崎第一遺跡（貴船寺跡）において中世末から近世に及ぶ土壙墓が数多く検出されている。また、遺跡の北西には近世の道標である今町一里塚があり、国の史跡に指定されている。



国土地理院地形図

1 上高遺跡	2 平峰遺跡	3 僧女木遺跡	4 筆無遺跡
5 梅北針谷遺跡	6 高樋遺跡	7 笹ヶ崎遺跡	8 大年遺跡
9 中床丸遺跡	10 保木島遺跡	11 嫁坂遺跡(2019)	12 大浦遺跡
13 小迫遺跡	14 大岩田前ノ村遺跡	15 大岩田上村遺跡	16 黒土遺跡
17 尾崎第一遺跡	18 王子原遺跡	19 梅北佐土原遺跡	20 嫁坂遺跡(2002)
21 上針谷・下針谷遺跡	22 梅北城跡	23 梅北北原遺跡	24 油田遺跡
25 天ヶ峰陣跡	26 野添遺跡	27 上安久遺跡	28 川原谷出水遺跡

[1～13は都城志布志道路建設関連に伴って発掘調査を行った遺跡]

第2図 上高遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序

主な基本層序は下記に示すとおりである。

I層	表土（耕作土）
II層	黒褐色土に桜島文明軽石（SZ-3、AD1471）を30%程度含む
III層	黒褐色土【古代～中世の遺物包含層】
IV層	暗褐色土に黄褐色軽石を1～2%程度含む【縄文時代後期～晩期の遺物包含層】
V層	褐色土に霧島御池軽石（Kr-M、約4,600年前）を5%程度含む【縄文時代晩期の遺構検出面】
VI層	霧島御池軽石（Kr-M、約4,600年前）
VII層	褐色土
VIII層	鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）
IX層	黒褐色土 霧島牛のすね火山灰（Kr-US、約7,600年前）に 桜島11テフラ（Sz-11、約8,000年前）を30%程度含む【縄文時代早期の遺物包含層】
X層	黒色土【縄文時代早期の遺物包含層及び集石遺構検出面】
XI層	明黄褐色土
XII層	黄褐色粘質土
XIII層	にぶい黄色粘質土
XIV層	灰白色砂質土
XV層	オリーブ褐色粘質土
XVI層	浅黄色粘質土

※ I層～IX層の堆積状況（第5図）

※ IX層～XIV層の堆積状況（第23図）

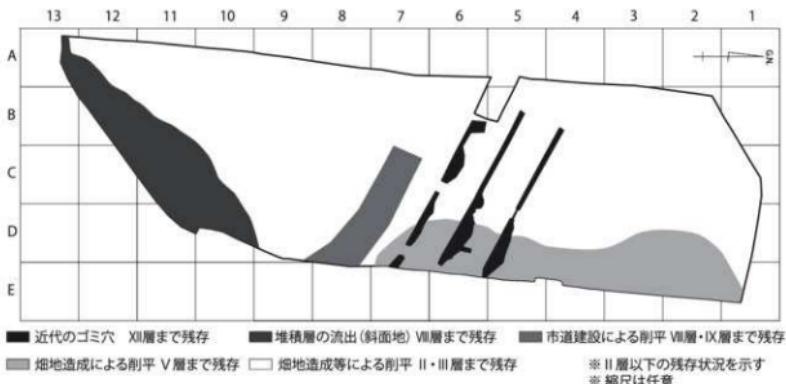
上高遺跡は、天ヶ峯の山塊から、シラス台地に向けて舌状に張り出す丘陵尾根上に立地する。遺跡の西側には数筋の谷があり、現在は谷を塞き止めた灌漑用のため池もある。今回は上高遺跡の範囲のうち、丘陵尾根から谷部にかけての部分を調査した。（第3図）

I層は表土で、層厚は約0.3～0.7mである。II層は桜島文明軽石を含む層であるが、層厚約0.05mと堆積状況は良好とはいえない。III層は古代～中世の遺物包含層であり、しまりがあり粒子が細かい。造成による削平のため、調査区の西側に層厚約0.1mを残すのみである。IV層は縄文時代後期～晩期の遺物包含層で層厚が約0.1～0.2mであり、しまりがあり粘性が弱く粒子は細かい。調査区北東側はIV層まで削平されている。V層は縄文時代後期～晩期の遺構検出面で、やや粘性があり層厚が約0.1m、VI層の漸移層とみられる。VI層は霧島御池軽石層で、層厚約0.1～0.2mである。VII層はしまっており粒子が細かく、層厚は約0.3～0.5mである。VIII層は鬼界アカホヤ火山灰層で、層厚が厚い所で0.3m程度堆積しているが、全体的に堆積状況が悪く、ブロック状で堆積している箇所も多い。IX層は縄文時代早期の遺物包含層で、硬くしまった粘質土であり、粒子が細かい。層厚は約0.4～0.6mである。X層は縄文時代早期の遺物包含層及び集石遺構検出面で、しまりがあり粘性が強く粒子は細かい。

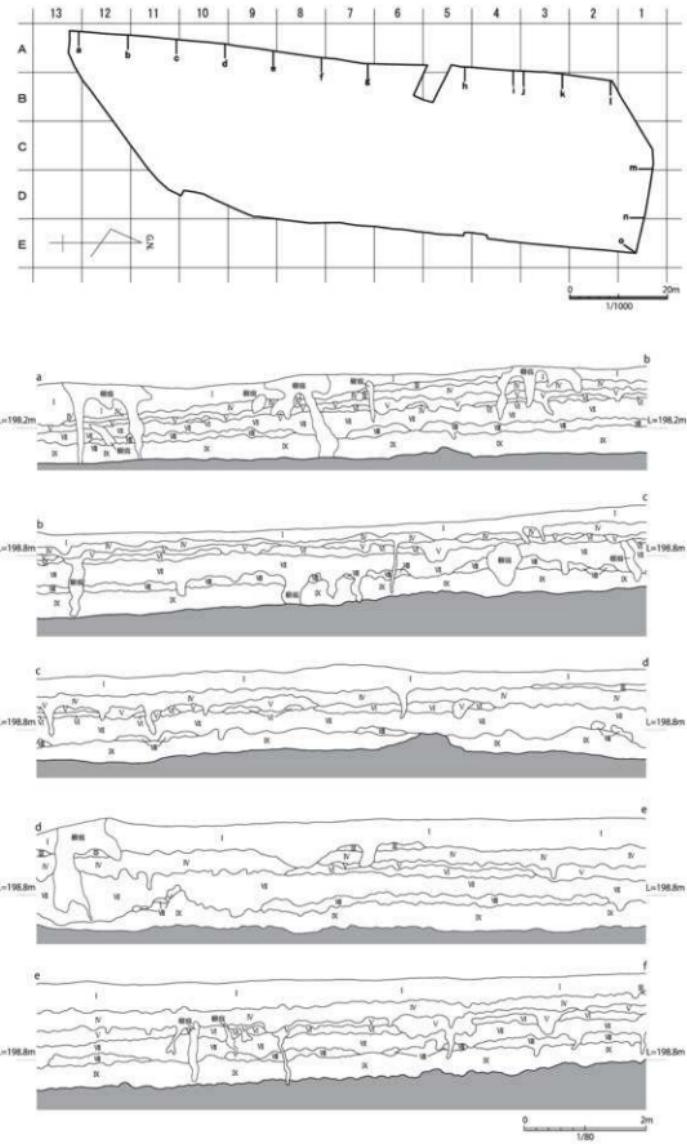
このように丘陵尾根部という遺跡立地による自然堆積層の流出に加えて、本調査区は過去の造成や市道建設時による削平によって、旧地形もかなり変更されている。第4図は、調査区内の自然堆積層（基本土層）の残存状況を示したものである。



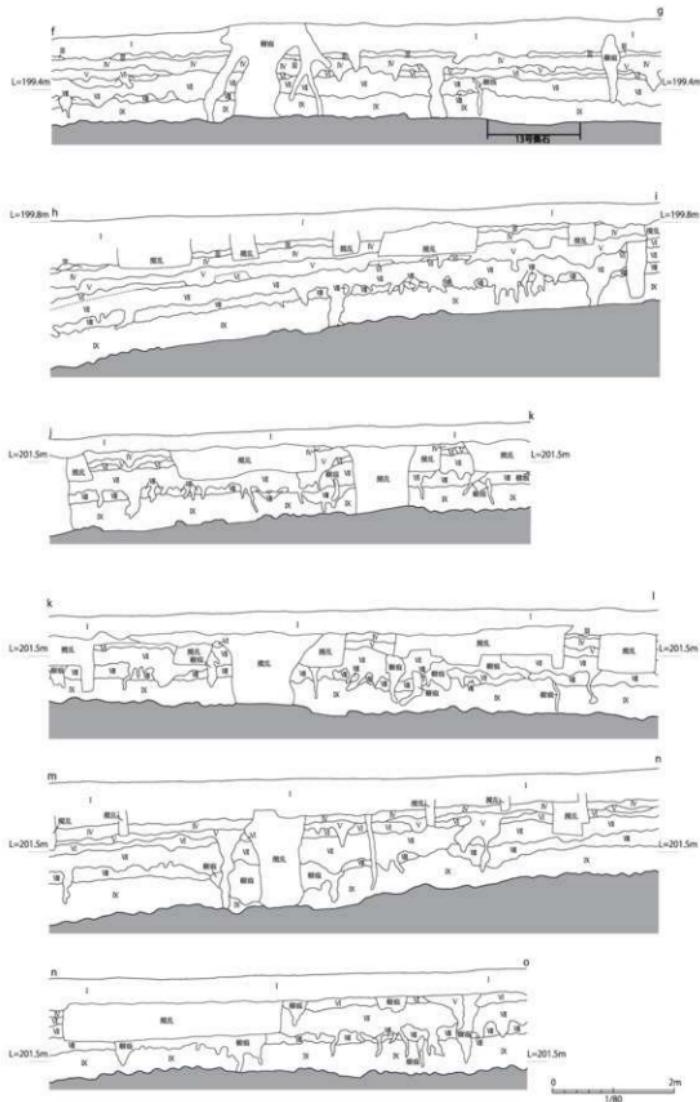
第3図 上高遺跡周辺地形図



第4図 調査区内の堆積層残存状況



第5-1図 土層断面図



第5-2図 土層断面図

第2節 縄文時代早期の遺構と遺物

1 概要

縄文時代の早期の遺構としては、X層上面より集石遺構24基、土坑2基が検出された。ともに調査区西側に集中している。遺物は、調査区中央の谷を挟んだ南北の平坦面より多く出土する傾向が認められた。

(1) 集石遺構（第8図～第14図）

X層を掘り下げるに、調査区全体に礫の分布が見られた。特に調査区の北側では、密に集中しており、これを散礫として平面分布図（第6図）を作成した。

集石遺構は、X層上面より24基が検出され、調査区中央の谷を挟んで、北側の一群（SI14～23）と南側（SI1～13・24）に大きく分布する。北側の一群は、B2グリッドにて遺構（SI18～23）が密に集中しており、散礫（第6図）の下から検出されたものである。南側の遺構は、南西方向へ延びる尾根筋上の等高線に沿って散在するあり方である。

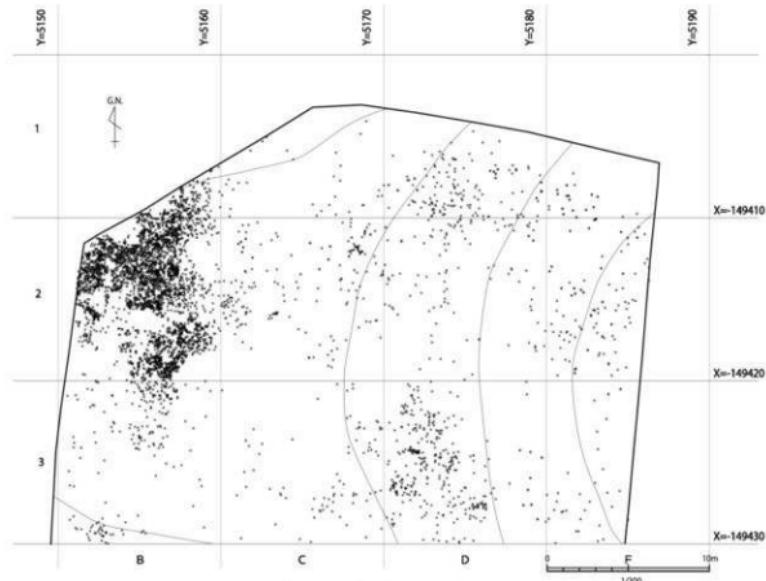
集石遺構の構成礫は破片化の著しい角礫で、一部が被熱により赤化しており、その石材はすべて砂岩である。また、集石遺構の掘り込みをもつものは15基（SI4・7～10・12・15・17～24）である。

1号集石遺構（第8図）

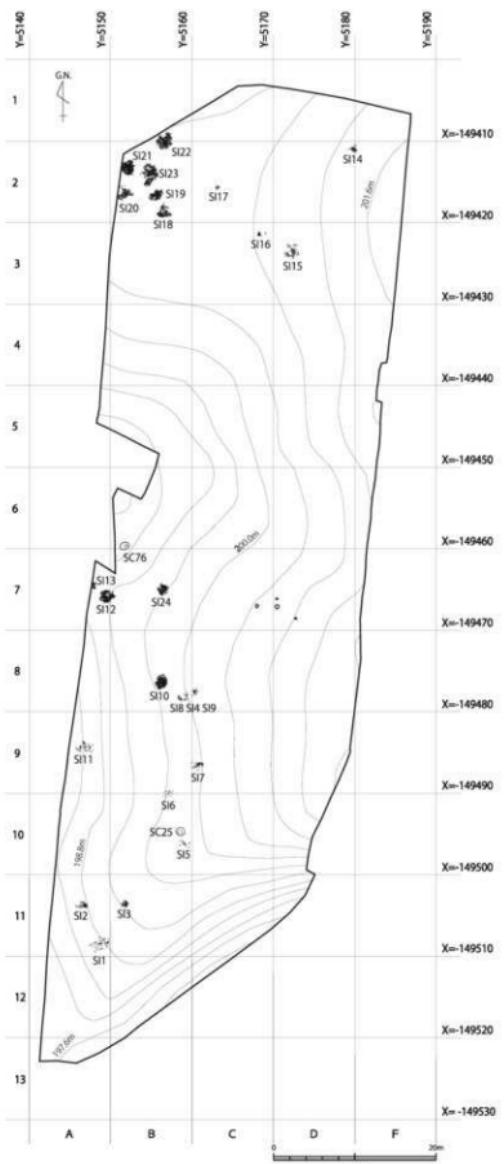
A11グリッドに位置し、 2.4×1.8 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはない。

2号集石遺構（第8図）

A11グリッドに位置し、 1.5×0.9 mの範囲に礫が広がっている。掘り込みではなく、構成礫は小片が多い。



第6図 散礫平面分布図



第7図 縄文時代早期遺構分布図

3号集石遺構（第8図）

B11 グリッドに位置し、 1.5×0.9 mの範囲に礫が広がっている。中心より北西側は礫の空白部分があり、掘り込みはない。構成礫は小片が多い。

4号集石遺構（第9図）

B8 グリッドに位置し、 0.8×0.8 mの範囲に礫の散布が見られる。遺構の両側にはそれぞれ8・9号集石遺構が隣接しており、下部には不整な方形の浅い掘り込みがあるが、南西側は傾斜面となるため不明瞭である。

5号集石遺構（第8図）

B10 グリッドに位置し、 0.9×0.6 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはない。

6号集石遺構（第8図）

B9～B10 グリッドに位置し、 1.5×1.3 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはない。

7号集石遺構（第8図）

C9 グリッドに位置し、 1.5×1.2 mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがあるが、南西側は傾斜面となるため不明瞭である。検出面からの深さは0.15 mで、礫が掘り込み外に広がっている。この広がりは、傾斜による流出か、搔き出しによるものと考えられる。

8号集石遺構（第9図）

B8 グリッドに位置し、 0.75×0.45 mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがあり、検出面からの深さは0.13 mである。掘り込みの中心部は、礫が少ないとから、持ち出された可能性がある。

9号集石遺構（第9図）

C8 グリッドに位置し、 1.0×0.75 mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な方形の掘り込みがあり、検出面からの深さは0.15 mである。

10号集石遺構（第9図）

B8 グリッドに位置し、 2.0×1.5 mの範囲に礫の集中が認められる。下部には不整な梢円形の掘り込みがあり、南側は張り出す。検出面からの深さは0.13 mである。構成礫は主に0.05 m大の砂岩が主体であるが、その構成礫の上部には $0.1 \sim 0.15$ m大とやや大きな礫が集まっている。また、埋土中から出土した炭化物についてAMS法による放射性炭素分析を実施した結果、 8535 ± 30 年¹⁴CBPの測定値が得られた。

11号集石遺構（第9図）

A9 グリッドに位置し、 2.0×1.3 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはなく、構成礫は0.1～0.15 m大のやや大きな礫と小片が混在している。

12号集石遺構（第10図）

A7～B7 グリッドに位置し、 2.1×1.7 mの範囲に礫の集中が認められる。下部には不整な梢円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.15 mである。掘り込みの中心部は、礫が少ないとから、持ち出された可能性がある。

13号集石遺構（第10図）

A7 グリッドに位置し、 0.4×0.2 mの範囲に礫が広がり、調査区外の西側へ続いている。掘り込みはない。

14号集石遺構（第10図）

D2～F2 グリッドに位置し、 0.9×0.9 mの範囲に礫が集中している。掘り込みはみられなかったが、斜面をやや削り込んで平坦面をなしている。

15号集石造構（第10図）

B3グリッドに位置し、 $1.8 \times 1.8\text{ m}$ の範囲に礫がまばらに広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは 0.15 m である。

16号集石造構（第10図）

C3グリッドに位置し、 $0.6 \times 0.5\text{ m}$ の範囲に礫が集中している。下部には浅い座みがあり、構成礫は $0.1 \sim 0.15\text{ m}$ 大とやや大きな礫が多く密度が高い。

17号集石造構（第10図）

C2グリッドに位置し、 $0.6 \times 0.5\text{ m}$ の範囲に礫が広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがあり、断面はすり鉢状を呈し、検出面からの深さは 0.12 m である。

18号集石造構（第11図）

B2グリッドに位置し、 $1.8 \times 1.8\text{ m}$ の範囲に礫が広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがあり、断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは 0.09 m である。掘り込みの中心部から、周縁にかけては、礫のまばらな部分がある。

19号集石造構（第11図）

B2グリッドに位置し、 $1.8 \times 1.8\text{ m}$ の範囲に礫が広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがある。断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは 0.09 m である。掘り込みの中心部は、大きな礫が多く、密度が高い。掘り込みの中心部より南西側にかけては、礫のまばらな部分があり、持ち出された可能性がある。

20号集石造構（第12図）

B2グリッドに位置している。 $1.8 \times 1.8\text{ m}$ の範囲に礫が広がっており、調査区外の南側へ続いている。下部には不整な方形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは 0.21 m である。掘り込みの中心部より、西側は礫の空白部分となる。

21号集石造構（第12図）

B2グリッドに位置している。 $1.8 \times 1.8\text{ m}$ の範囲に礫が集中しており、調査区外の西側へ続いている。下部には不整な梢円形の掘り込みがあり、北東隅側は張り出す。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは 0.15 m である。構成礫は小片が多い。

22号集石造構（第13図）

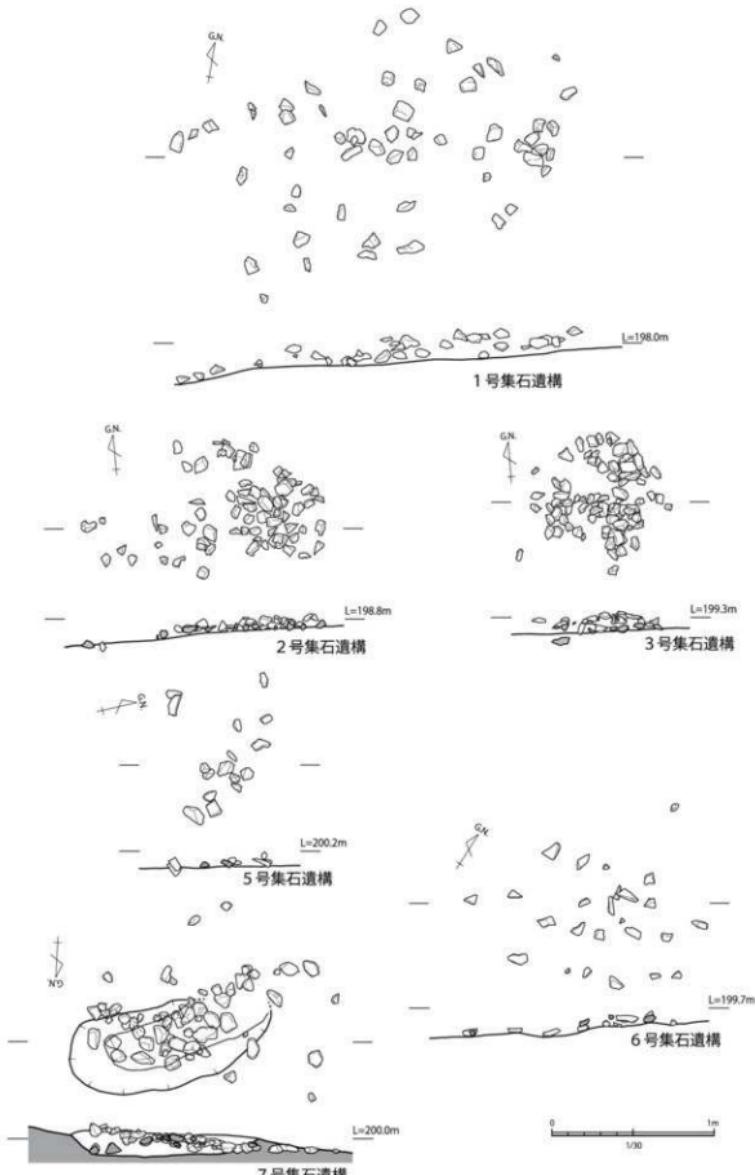
B1～B2グリッドに位置し、 $2.1 \times 2.0\text{ m}$ の範囲に礫が広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは 0.12 m である。構成礫は、掘り込みの中心部に小片が多く、周縁にかけて大きな礫が多い。

23号集石造構（第13図）

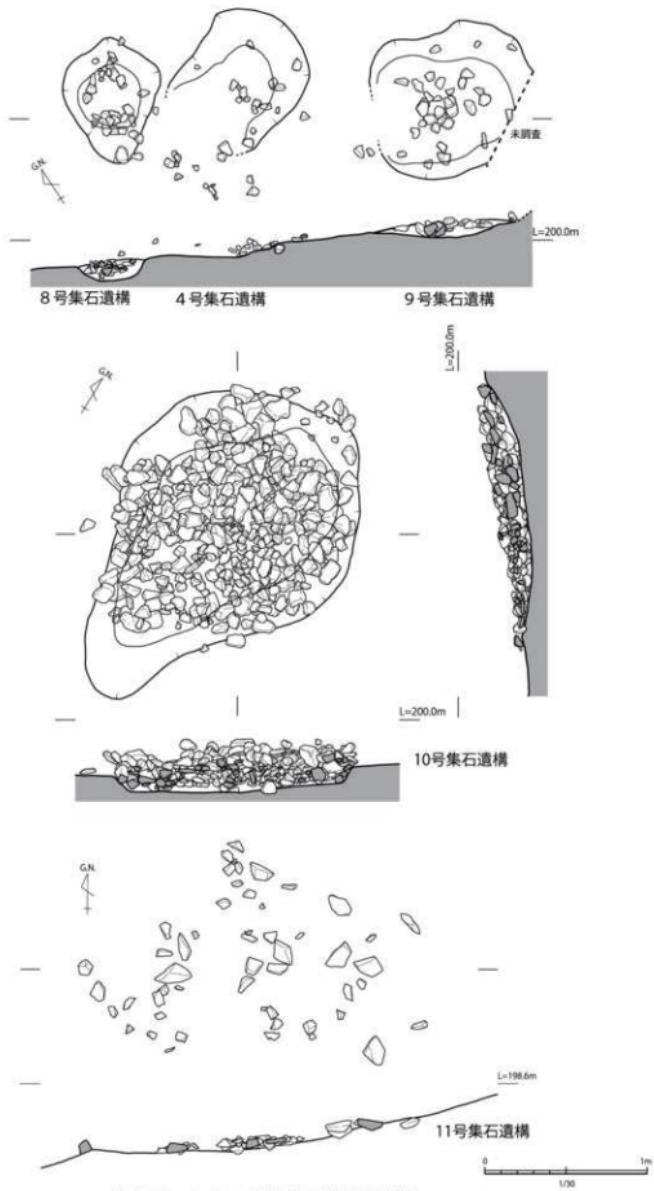
B2グリッドに位置し、 $2.7 \times 2.4\text{ m}$ の範囲に礫が広がっている。下部には不整な方形の掘り込みがあり、南西隅側は張り出す。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは 0.21 m である。掘り込みの中心部付近は、樹痕により擾乱された形跡がみられる。

24号集石造構（第14図）

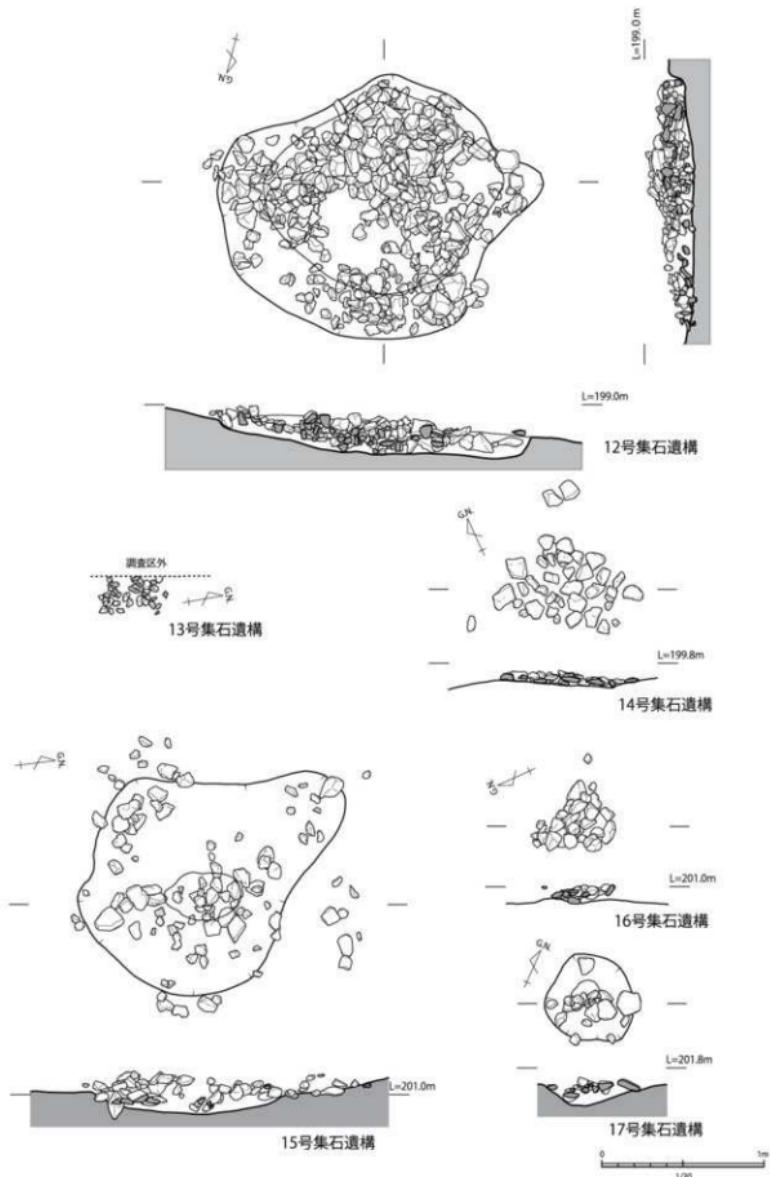
B7グリッドに位置し、 $1.5 \times 1.4\text{ m}$ の範囲に礫が広がっている。下部には不整な梢円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは 0.18 m である。また、掘り込みの中心部は礫の空白部分となる。



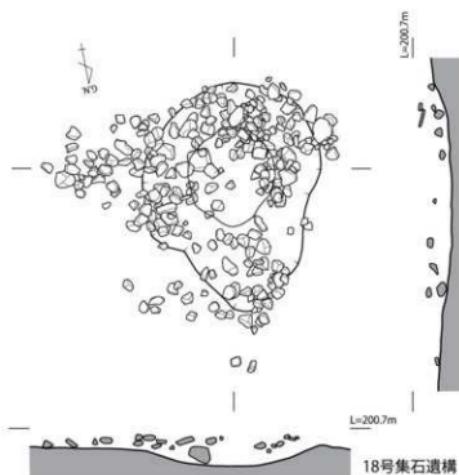
第8図 1~3・5~7号集石遺構実測図



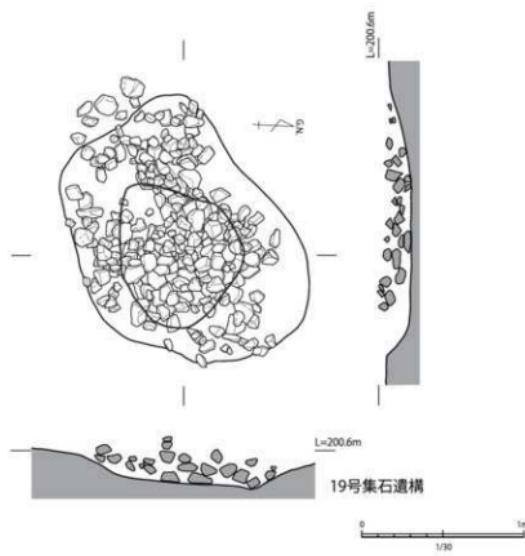
第9図 4・8～11号集石遺構実測図



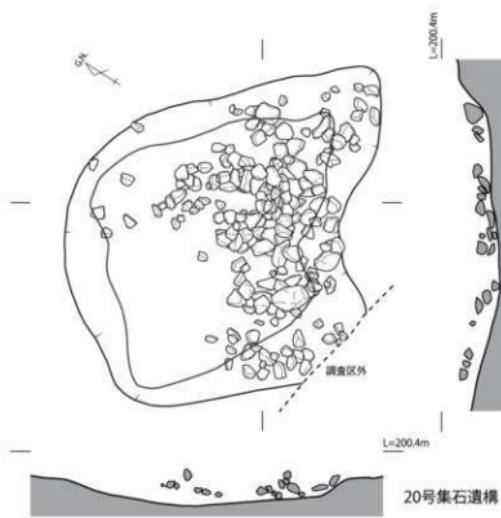
第10図 12~17号集石遺構実測図



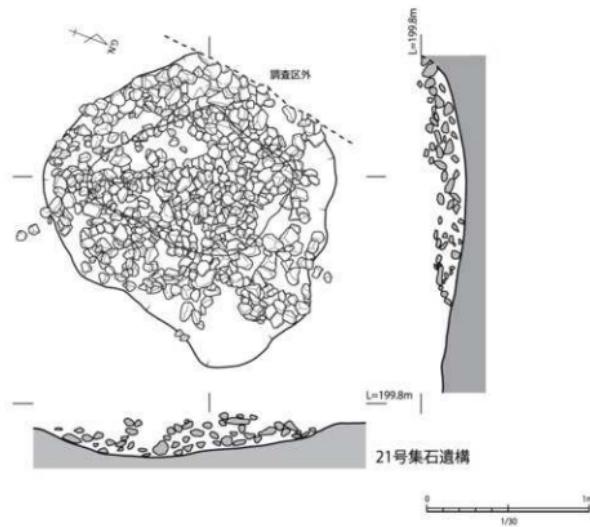
18号集石遺構



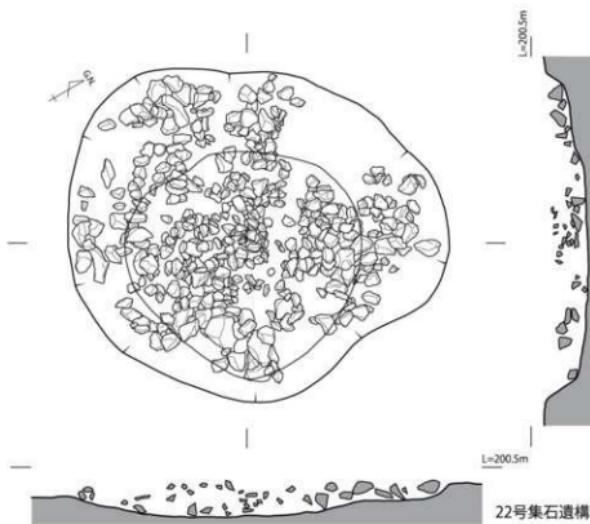
第11図 18・19号集石遺構実測図



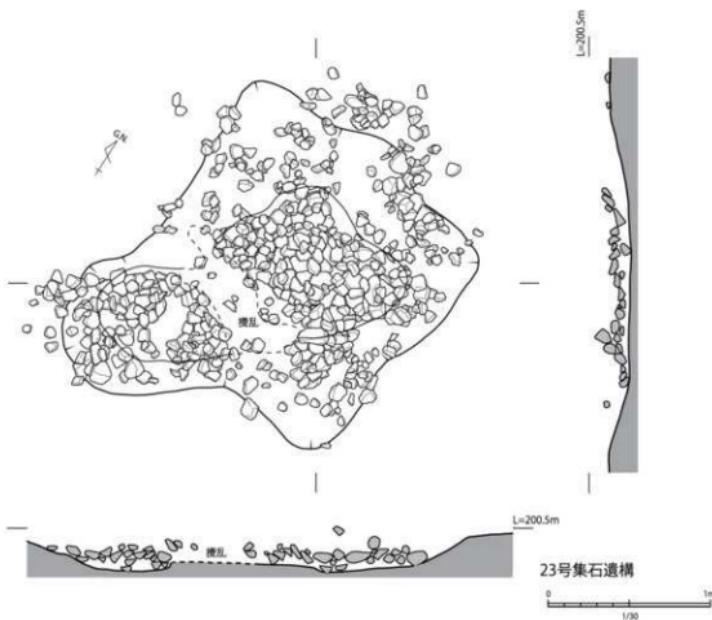
20号集石遺構



第12図 20・21号集石遺構実測図



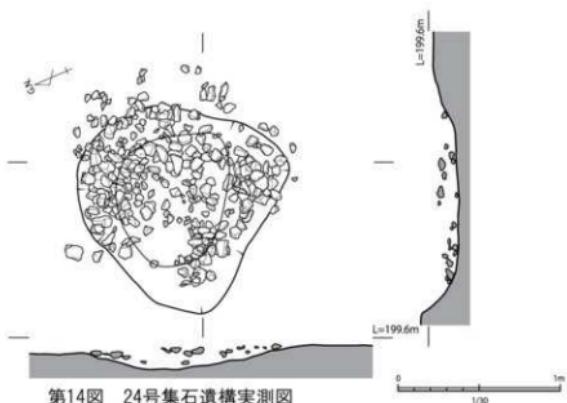
22号集石遺構



23号集石遺構

第13図 22・23号集石遺構実測図

0 1m
1/30



第14図 24号集石構造実測図

(2) 土坑 (第15図)

土坑は2基検出されており、調査区中央にある谷地形より南側にある。単独で検出され、群集はしていない。集石構造に比べると基數は少ないが、近接した位置には集石構造がある。

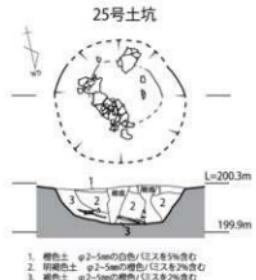
25号土坑 (第15図)

調査区南部のB10 グリッドに位置し、X層上面にて検出された。樹痕等による攪乱が著しいため、精査においては、ベルトを残して全体的に掘り下げた。平面形は不整な円形で、長軸約1.1m、短軸1.0m（復元値）、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は3層に分かれ、遺物は、底面付近から縄文土器の深鉢が1個体（第16図）出土している。

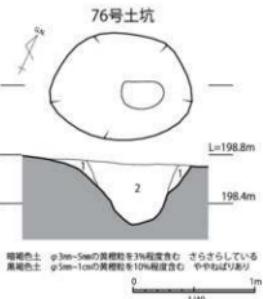
1は塞ノ神式土器の深鉢で、胴部から底部の一部が失われている。口縁部はラッパ状に外反し、胴部は丸みをもった円筒形を呈す。口縁部はヘラ工具による刻目が密に施され、口縁部から胴部にかけては、横方向の連続的な貝殻刺突文が8条施されるが、胴部は押し引き状となる。貝殻刺突文より下位は、沈線文により縱長に弧状の文様が施される。口縁部内面は横方向の貝殻条痕文、それより下面是ケズリ状のナデ調整である。また、内面に炭化物、外面全体にススが付着している。

76号土坑 (第15図)

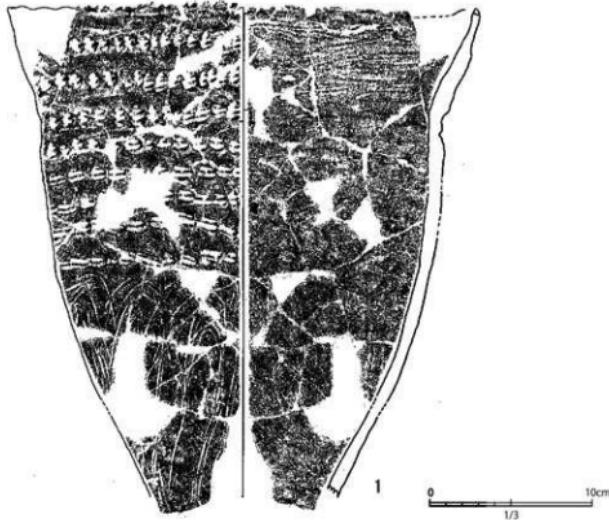
調査区西部のB6 グリッドに位置し、X層上面にて検出された。平面は不整な楕円形で、長軸約1.2m、短軸0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形はV字形で、遺物は出土していない。



1. 棕褐色土 $\phi 2\sim5\text{mm}$ の白色/（ススを5%含む）
2. 黑褐色土 $\phi 2\sim5\text{mm}$ の褐色/（ススを2%含む）
3. 棕褐色土 $\phi 2\sim5\text{mm}$ の褐色/（ススを2%含む）



第15図 25・76号土坑実測図



第16図 25号土坑出土遺物実測図

(3) 遺物 (IX・X層出土)

a) 繪文土器 (第17図・第18図)

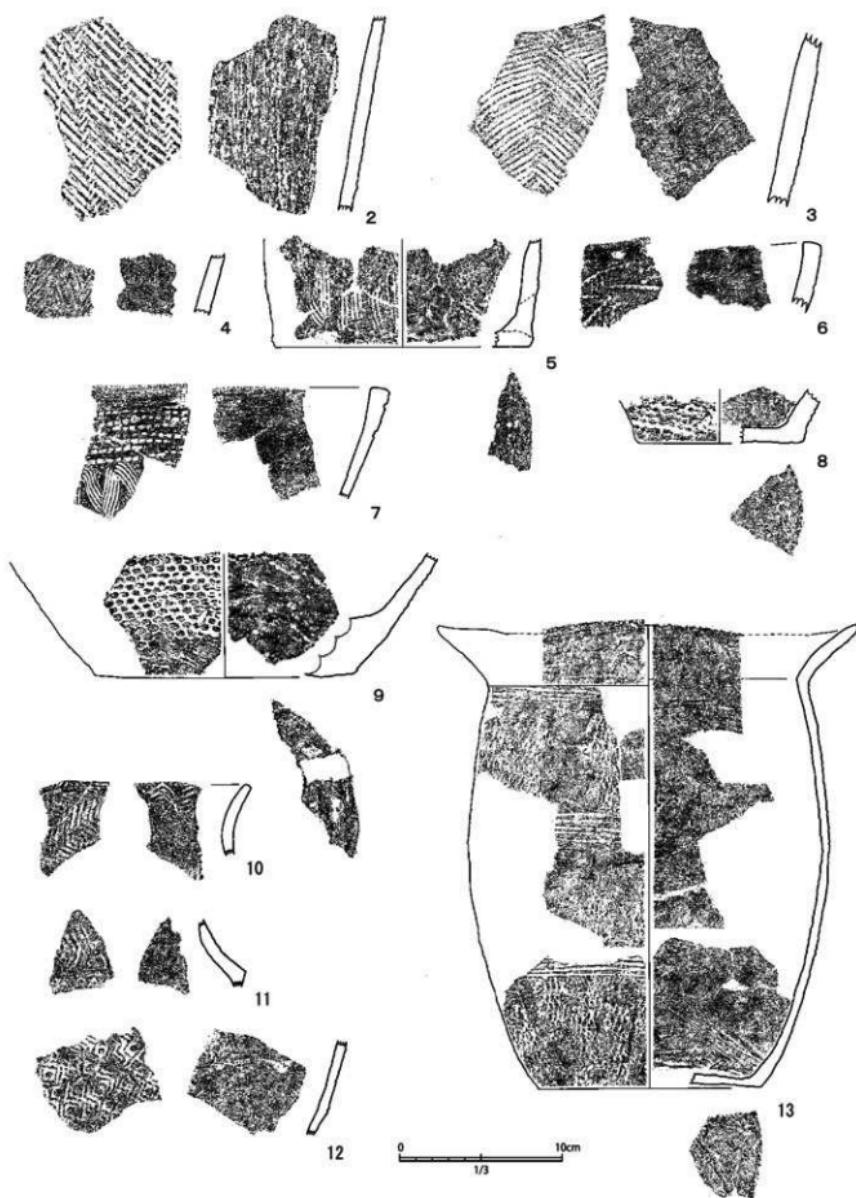
2～6は貝殻文円筒形土器である。2は胴部で、綾杉状の条痕地に、貝殻腹縁による刺突文を縦方向に施している。内面は縦方向のケズリ状のナデ調整である。3・4も胴部で、綾杉状の貝殻条痕文を施す。5は底部で、縦方向の貝殻条痕文、端部は面取りされる。6は口縁部で、羽状の貝殻腹縁刺突文を施す。7は口縁部から胴部で、口縁部外面は横方向に8条の貝殻腹縁による刺突文、胴部は鋸歯状の貝殻条痕文を施す。

8～12は押型文土器で、内面はナデ調整される。8・9は平底の底部で、外面に楕円押型文を施している。10は外反する口縁部で、外面には山形押型文を施している。11は稜をなして屈曲する胴部である。横方向の山形押型文を施している。12は胴部で、横方向の山形押型文を施している。

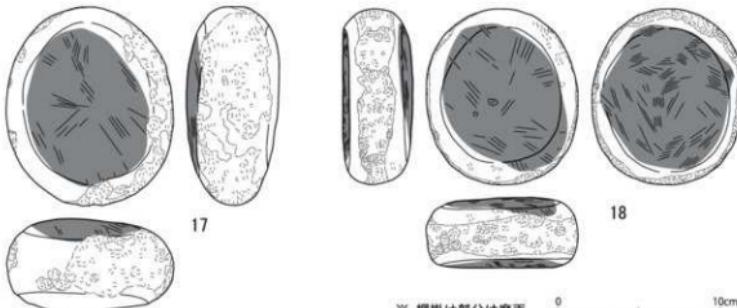
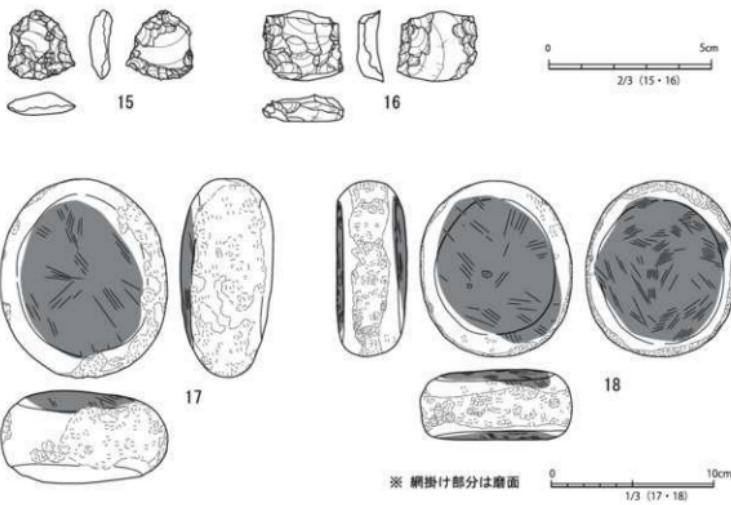
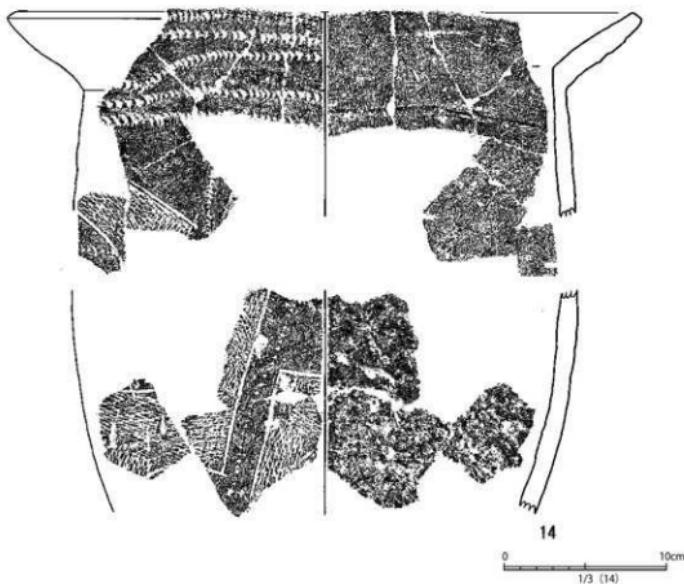
13・14はいわゆる塞ノ神式土器である。13は口縁部が大きく外反し、胴部は丸みをもった円筒形を呈す。復元口径22.3cmで、口唇部は波状の刻目が施される。胴部は区画のない網目状撚糸文、頭部から胴部にかけては、5条1単位で沈線が3段に巡る。内面は横方向の丁寧なナデ調整である。また、外面全体にススが付着する。14は、13と同様の器形で復元口径37.7cm。口縁部外面に5条の刺突列点文が施されている。胴部は、沈線区画内に撚糸文の充填、沈線間に列点文を施す。内面は横方向のナデ調整である。

b) 石器 (第18図)

15はチャート製の楔形石器で、平面形は三角形状を呈し、2辺の表裏面から調整が施されている。16は、黒曜石製(腰岳産)の楔形石器で、両側面の表裏面から調整が施されている。17・18は砂岩製の磨敲石である。全体形はともに楕円形で、17は正面に磨面が見られ、敲打痕が右側面に集中している。18は表裏面に磨面が見られ、敲打痕が周縁を巡る。



第17図 縄文時代早期土器実測図



第18図 繩文時代早期土器及び石器実測図

第3節 縄文時代前期～中期の遺構と遺物

1 概要

縄文時代前期～中期の遺構としては、堅穴建物跡2軒、土坑13基（陥し穴状遺構5基を含む）がある。

なお、調査の都合上、VI層～VII層を重機による除去の後、IX層上面にて人力による遺構検出を行ったが、後述のように本来の掘り込み面はVII層中である。堅穴建物跡は、2軒とも尾根筋上の地形変換点にあり、谷際に位置する。土坑は、堅穴建物跡2軒の間に広がる尾根筋の南北方向に沿って分布している。遺物は1号堅穴建物から石匙が1点出土したのみで、包含層からもほとんど出ていない。

（1）堅穴建物跡（第20図）

堅穴建物跡はいずれもIX層上面にて検出している。これは、市道建設時の削平及び、傾斜地による堆積層の流出等の影響によるものである。2軒とも円形プランで、埋土中に鬼界アカホヤ火山灰を含む。

1号堅穴建物跡（第20図）

調査区南側のB11グリッドに位置し、北から南側に傾斜する緩斜面の崖面際に近い場所にある堅穴建物跡である。遺構の平面形は円形で直径約2.9m、底面積は約5.3m²である。堅穴床面は、多少の起伏があるが概して平坦で、緩斜面に対して水平に掘削されている。検出面からの深さは約0.2m、掘り込みの立ち上がりはしっかりとをしている。堅穴に伴う柱穴は確認できなかった。堅穴埋土は、VII層（鬼界アカホヤ火山灰層）とIX層の混土である。本遺構に伴う遺物は、検出面近くから出土した石匙（19）が1点のみである。

19は石英製の石匙で、両側からの抉りによってつまみ状の少突起を作りだし、周縁に刃部を形成する。

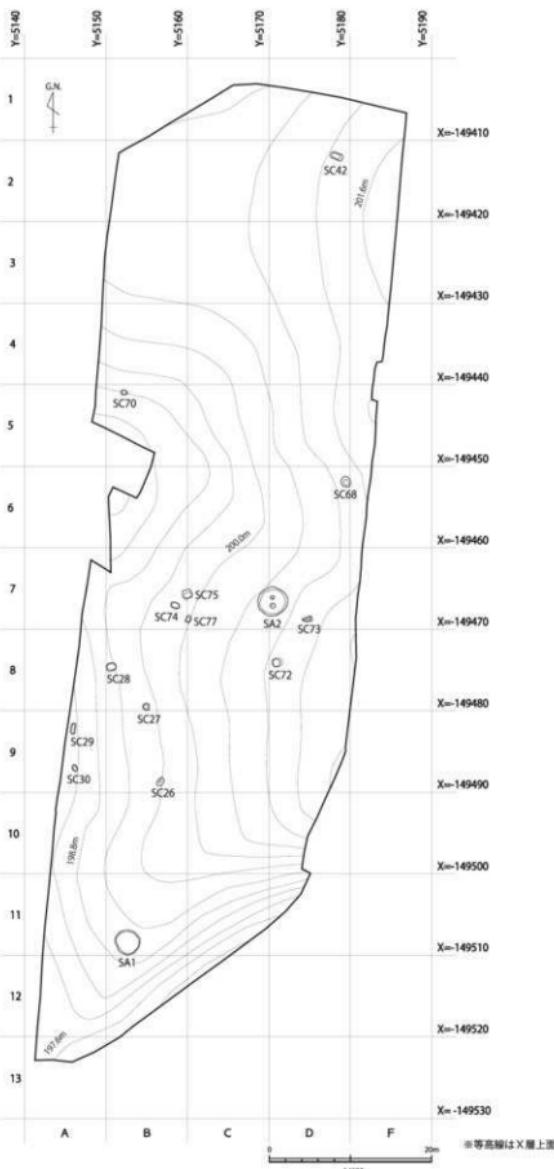
2号堅穴建物跡（第20図）

調査区中央部のC7～D7グリッドに位置する堅穴建物跡である。市道建設時にVII層～IX層まで削平されており、IX層にて検出された。

遺構の平面形は円形で直径約3.6m、底面積は約7.1m²である。堅穴床面は概して平坦であり、貼床が施されている。検出面から0.45m程掘削した後に0.2m程度埋め戻して床面とする。掘り込みの立ち上がりはしっかりとをしている。主柱穴は2本（P1・P2）で、堅穴中心部の南北方向に認められた。主柱穴間の距離は約0.8mで、貼床面から直径約0.5m、深さ0.7mの円形に掘り込んだ後、直径約0.15m前後の柱（第20図土層番号9）を立てたとみられる。本遺構からは、土器、礪の出土はなかったが、底面近くより炭化物が検出された。この炭化物は、AMS法による放射性炭素分析の結果、4440±25年¹⁴C BPの測定値が得られた。

（2）土坑・陥し穴状遺構（第21図～第23図）

IX層上面において、土坑が13基検出された。これらは、黄褐色土及び明黄褐色土等の黄色系統の共通した埋土が特徴であるが、遺物は伴わない。そこで、遺構の時期や埋土の由来を調べるために、SC68の埋土をサンプリングして分析した。その結果、鬼界アカホヤ火山灰を含むが、霧島御池軽石は含まないことが判明した。よって土坑等は、縄文時代前期から中期の間のある時期と判断される。したがって、埋土と基本土層との対比関係からIX層上面での検出であったが、本来の掘り込み面はVII層中と考えられることから、本来の掘り込み面は、検出面より0.5～0.8m程度の高い位置と推定される。なお、13基のうち5基（SC27・28・68・70・72）は床面に小穴等を確認できるため、特に陥し穴状遺構として報告する。



第19図 繩文時代前期～中期遺構分布図

土坑

土坑は調査区全体に分布しているが、SC42 のように単独で存在するものや、SC74・75・77 のようにまとまりをもつものもある。平面形は楕円形（SC26・30）、隅丸方形（SC74・75・77）、隅丸長方形（SC29・42・73）のものに大別される。また、埋土は、黄褐色及び明褐色土が主体で、直径 1～5 mm 程度の黄橙色及び橙色粒を含んでいるものが多い。

26 号土坑（第 21 図）

B9 グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約 1.1m、短軸 0.7 m、検出面からの深さは約 0.5 m である。断面形は椀状で、北側の立ち上がりは急である。埋土は、黄褐色土を主とする粘質土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

29 号土坑（第 21 図）

A9 グリッドに位置している。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸約 1.4m、短軸 0.5 m、検出面からの深さは約 0.3 m である。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。埋土は、明褐色土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

30 号土坑（第 21 図）

A9 グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約 0.9m、短軸 0.6 m、検出面からの深さは約 0.3 m である。断面形は椀状で、北側の立ち上がりは急である。埋土は、明褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

42 号土坑（第 21 図）

D2 グリッドに位置している。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸約 1.5m、短軸 0.8 m、検出面からの深さは約 0.4 m である。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。埋土は、黄褐色土を主とするシルト混じりの粗砂土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

73 号土坑（第 21 図）

D7 グリッドに位置している。平面形は不整な隅丸長方形で、西側は張り出す。長軸約 1.2m、短軸 0.5 m、検出面からの深さは約 0.4 m であり、底面は不整な形状である。断面形は逆台形状に近く、東側の立ち上がりは急である。埋土は黄褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

74 号土坑（第 21 図）

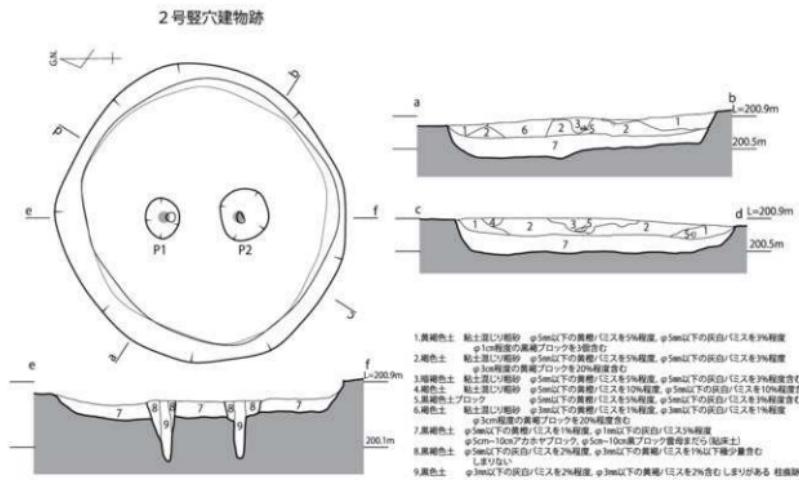
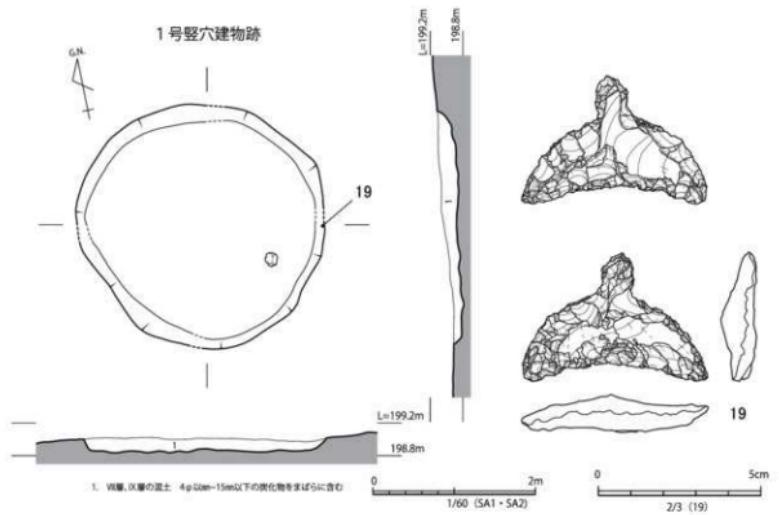
B7 グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約 1.0m、短軸 0.7 m、検出面からの深さは約 0.6 m である。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は、明黄褐色土及び褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

75 号土坑（第 22 図）

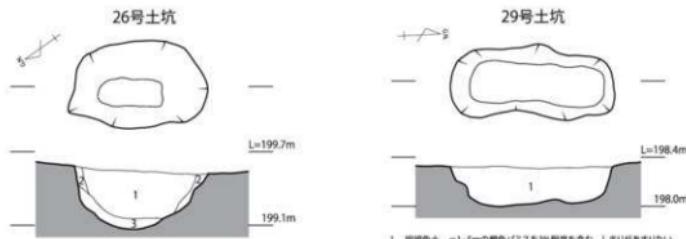
B7～C7 グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約 1.2m、短軸 1.1 m、検出面からの深さは約 1.0 m である。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。また、霧島御池軽石を含む風倒木痕に切られる（図版 8）。埋土は明黄褐色土及び褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物はない。

77 号土坑（第 22 図）

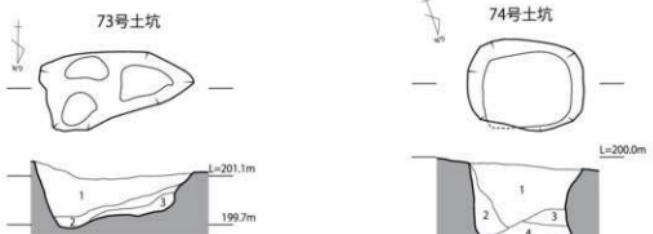
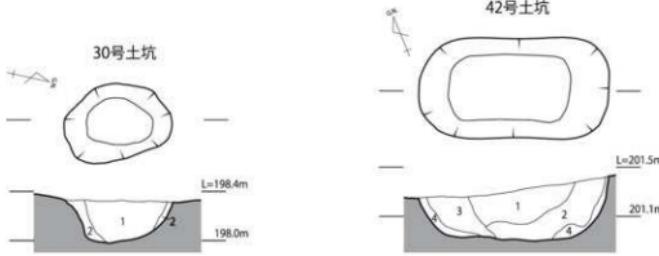
B7～C7 グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約 0.8m、短軸 0.6 m、検出面からの深さは約 0.7 m である。断面形は逆台形で、立ち上がりは急である。埋土は、明褐色土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。



第20図 1・2号竪穴建物跡及び出土遺物実測図



1. 明褐色土 $\varphi 1\text{--}5\text{mm}$ の褐色土(ミスを3%程度含む しまりがありません)
 2. 褐色土 $\varphi 1\text{--}3\text{mm}$ の褐色粘土を1%程度含む 1よりしまりがややある
 3. 海綿色土 r (ミスは特に含まない) 1と同等しまりがない



第21図 26・29・30・42・73・74号土坑実測図

陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、調査区中央を走る谷を隔て南北に点在している。平面形は円形を基調とするが、不整なものが多い。また、SC27・28・68・70は検出面からの深さが約0.5～0.9mで底面の中央に小穴（杭状の痕跡）があり、逆茂木痕と捉えられる。なお、SC72については、明確な逆茂木痕は確認できないが、掘り込みの深さから陥し穴状遺構に含める。

27号土坑（陥し穴状遺構）（第22図）

B8グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.8m、検出面からの深さは約0.7mである。断面形は方形に近く、立ち上がりは急である。床面には、直径0.1m、深さ0.4mの小穴があり、杭の痕跡と考えられる。埋土は、明黄褐色土を主とし、しまりがない。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

28号土坑（陥し穴状遺構）（第22図）

B8グリッドに位置している。平面形は不整な梢円形で、長軸約1.3m、短軸1.0m、検出面からの深さは約0.6mである。断面形はラスコ状である。床面には、直径0.1m程度の小穴が1箇所あり、杭の痕跡と考えられる。床面からの深さは0.2mであった。埋土は、黄褐色土及び褐色土を主とし、しまりがない。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

68号土坑（陥し穴状遺構）（第23図）

D6グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.2m、検出面からの深さは約0.9mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。床面には、直径0.15m程度の小穴が1箇所あり、床面からの深さは0.5mであった。

埋土は褐色及び黄褐色を主とする粗砂土で、遺構に伴う遺物は出土していない。また、土層断面図中にあるぶい褐色土（土層番号5）はしまりのない土質で、小穴との位置関係から杭の痕跡（腐食土化したもの）と考えられる。

サンプリングした埋土の火山灰分析結果では、鬼界アカホヤ火山灰を少量含むが、霧島御池軽石は含まないと結果が得られた。また、68号土坑のみ埋土中（土層番号2・3）から炭化物粒が数点出土した。このうち1点をAMS法による放射性炭素分析した結果、 3505 ± 25 年¹⁴CBPの測定値が得られた。

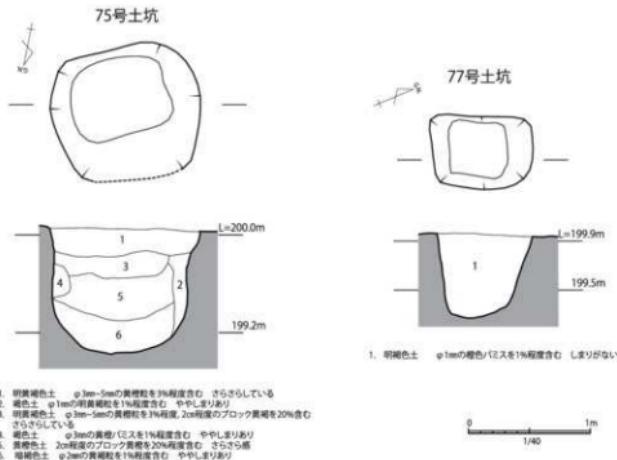
70号土坑（陥し穴状遺構）（第23図）

B5グリッドに位置している。平面形は不整な梢円形で、長軸約0.8m、短軸0.6mである。検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。床面には、直径0.12m程度の小穴が1箇所あり、杭の痕跡と考えられる。床面からの深さは0.1mであった。埋土は、黄褐色及び褐色を主とする粗砂土で、鬼界アカホヤ火山灰がブロック状に入る。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

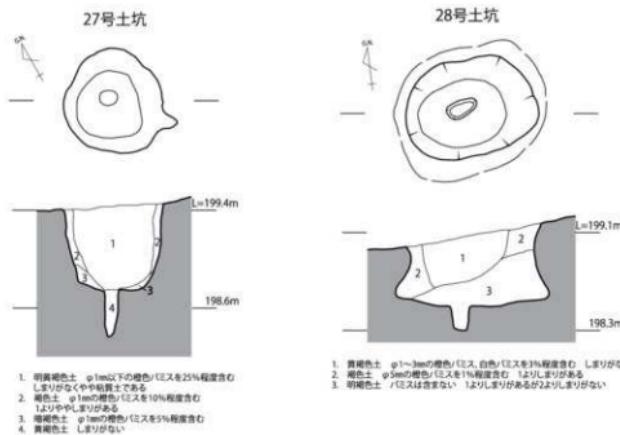
72号土坑（陥し穴状遺構）（第23図）

D9グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.9m、検出面からの深さは約1.6mである。断面形は台形で、底面は広がっている。また、東側底部の不整な立ち上がりは、壁面の崩落と考えられる。

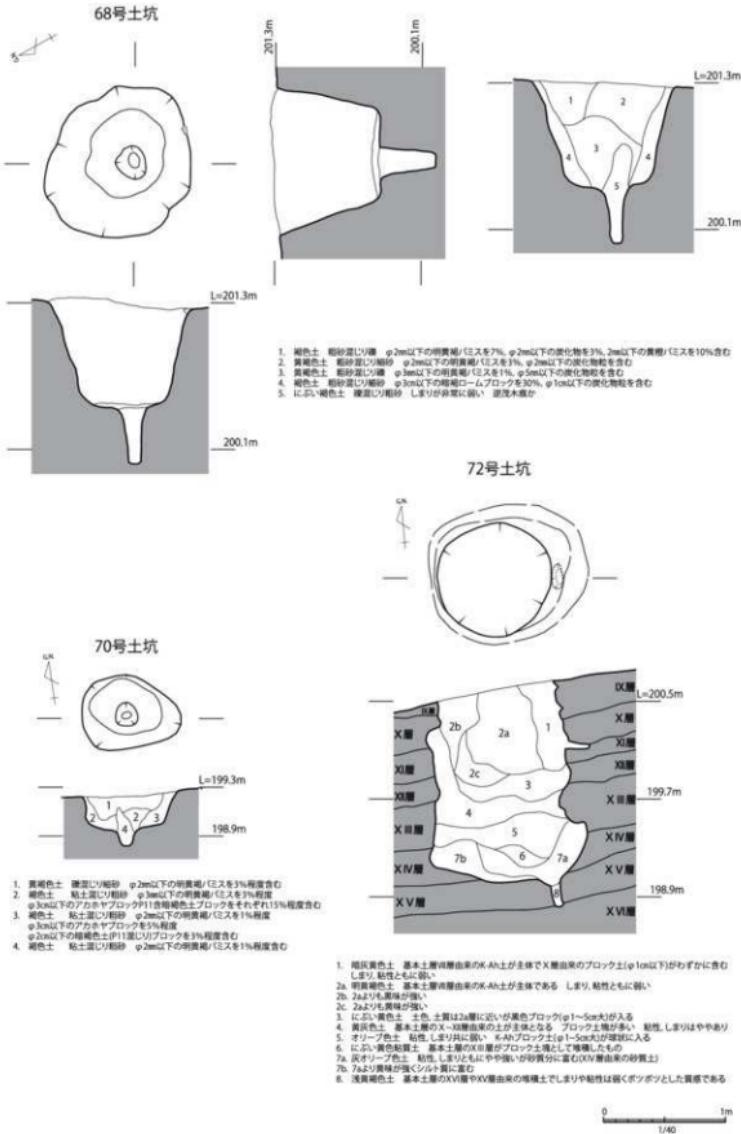
本来の掘り込み面からの深さは、2.1～2.4mと推測され、XV層まで掘削された床面には、直径0.08m程度の小穴が1箇所あるが、遺構底面の中心部ではなく、壁面側に寄っている。床面からの深さは0.2mであった。埋土は、暗灰黄色や明黄褐色土などの黄系統色を主とし、下位にかけてしまりが強くなる傾向にあるが、小穴の埋土（土層番号8）はしまりのない土質である。



1. 明褐色土 φ3mm~5mmの黄褐色粘土を2%程度含む さらさらしている
2. 褐色土 φ1mmの明褐色粘土を1%程度含む ややしまりあり
3. 明褐色粘土 φ3mm~5mmの黄褐色粘土を1%程度、2cm程度のブロック黄褐色を20%含む さらさらしている
4. 黄褐色土 φ1mmの黄褐色粘土を1%程度含む ややしまりあり
5. 黄褐色土 2cm程度のブロック黄褐色を20%程度含む さらさら感
6. 暗褐色土 φ2mmの黄褐色粘土を1%程度含む ややしまりあり



第22図 75・77号土坑及び27・28号土坑（陥し穴状遺構）実測図



第23図 68・70・72号土坑（陥し穴状遺構）実測図

第4節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物

1 概要

IV層より縄文時代後期～晩期の遺物（縄文土器・石器）、V層上面より土坑が31基検出された。土坑は出土遺物の土器型式から晩期に属するものと判断される。土坑は、調査区中央の谷を挟んで南北に分布しており、特に調査区北西部には土坑の群集がみられる。晩期の遺物は、土坑の群集箇所及び、調査区南部の尾根筋上の包含層より多く出土する傾向が認められた。また、調査区北東部及び調査区南端付近の斜面部については、畠地造成による削平や堆積層の流出のため、包含層の残存状況が悪く、遺物はほとんど出土していない。

（1）土坑

土坑の平面形は、円形・楕円形・隅丸方形があり、円形プランが主体である。また、掘り込みの深さは調査区中央の谷を挟んで北側の土坑群は、南側の土坑に比べて深い。遺物は31基の土坑のうち、4基（SC4・17・21・31）を除いた27基の土坑から出土した。特に調査区北西部に群集する土坑群からは、深鉢や浅鉢片が多量に出土した。なかでも、40号と41号、65号と71号のように、互いに接合関係のある土坑も認められた。

なお、遺物の掲載については、可能な限り図化に努め、互いに接合関係にある遺物の所属については、より大きい破片が出土した側とした。

1号土坑（第25図）

B11グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.8m、検出面からの深さは約0.9mである。断面形は逆台形で、立ち上がりは急である。そのうち遺物は、埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢3点（20～22）、浅鉢1点（23）を図化した。20は口縁部が直立気味に立ち上がり、外面は貝殻条痕後ナデ調整、内面はナデ調整される。21は胴部から底部で復元底径は12cmである。外面は貝殻条痕後ナデ調整、内面はナデ調整される。22は底部片である。23は胴部で、外外面ともにミガキ調整される。

4号土坑（第25図）

B7グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で長軸約2.0m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は皿状で、立ち上がりは緩やかである。遺構に伴う遺物は出土していない。

6号土坑（第25図）

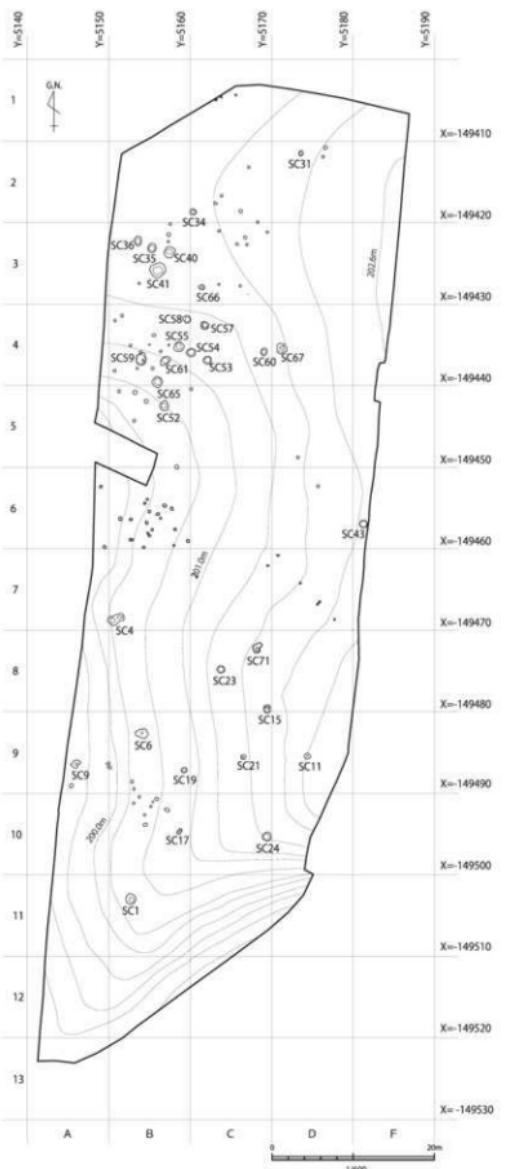
B9グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で長軸約1.6m、短軸約1.0m、検出面からの深さは約0.4mである。断面形はすり鉢状で、遺物は埋土中より浅鉢片が出土しているが、小片のため図化していない。

9号土坑（第25図）

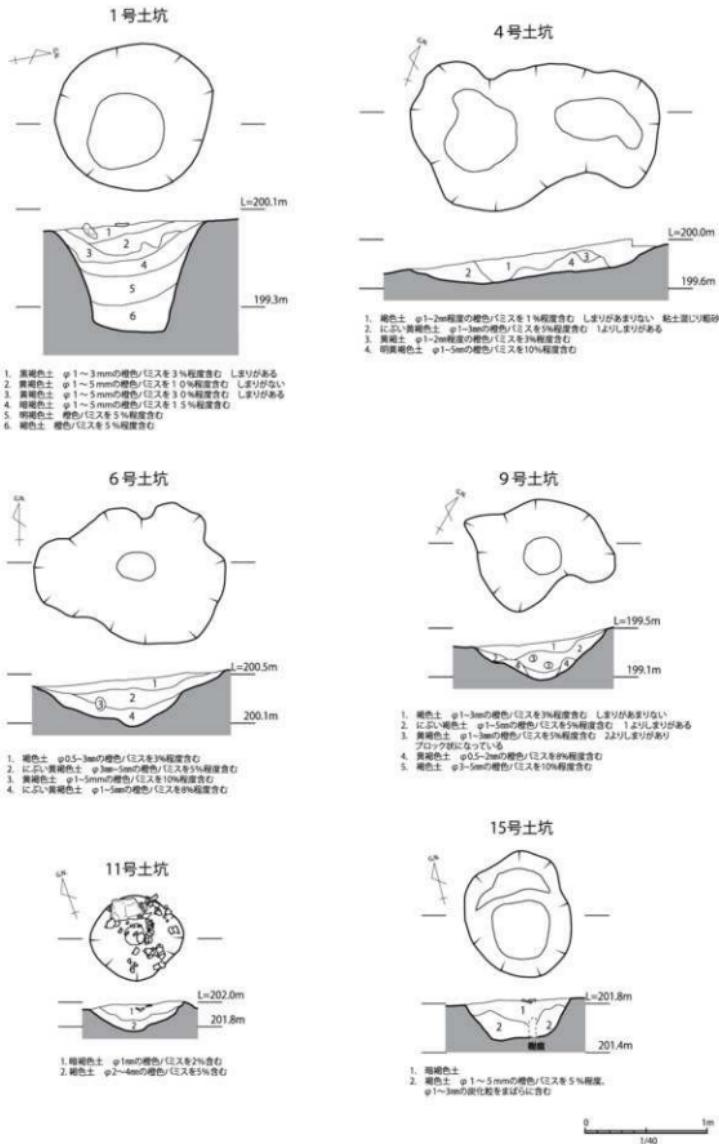
A9グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で長軸約1.1m、短軸約0.7m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形はすり鉢状で、遺物は埋土中より浅鉢片が出土しているが、小片のため図化していない。

11号土坑（第25図）

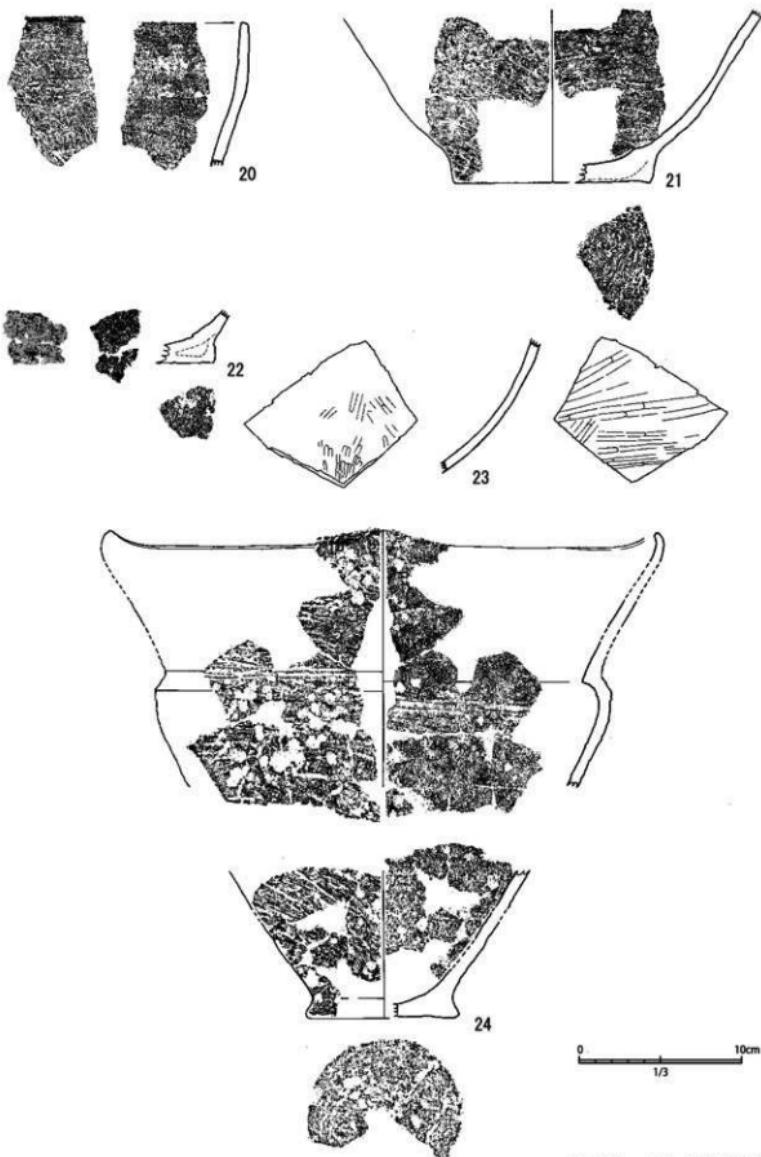
D9グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.7m、検出面からの深さは約0.2mで、断面形はすり鉢状である。遺物は検出面付近より縄文土器が出土しており、深鉢1点（24）、浅鉢3点（25～27）、石器1点（28）を図化した。24は波状口縁で、口縁部のつけ根と肩部が近接する器形で、頸部の内面は鋭い稜となる。口縁端部は内湾する。外外面とも風化・欠損が著しく、外面は貝殻条痕後ナデ調整、内面はナデ調整される。25・26は口縁部外外面に沈線を施しており、口縁部が外反して口縁部内面に段を作り出す。また、胴部は張り出し、胴部最大径が口径を上回る。25～27は外外面ともミガキ調整である。28は砂岩製の砥石で、全体的に赤化し、一部が剥離している。使用面は全体的に凹み、直線状の削痕が部分的に残る。



第24図 繩文時代後期～晩期遺構分布図

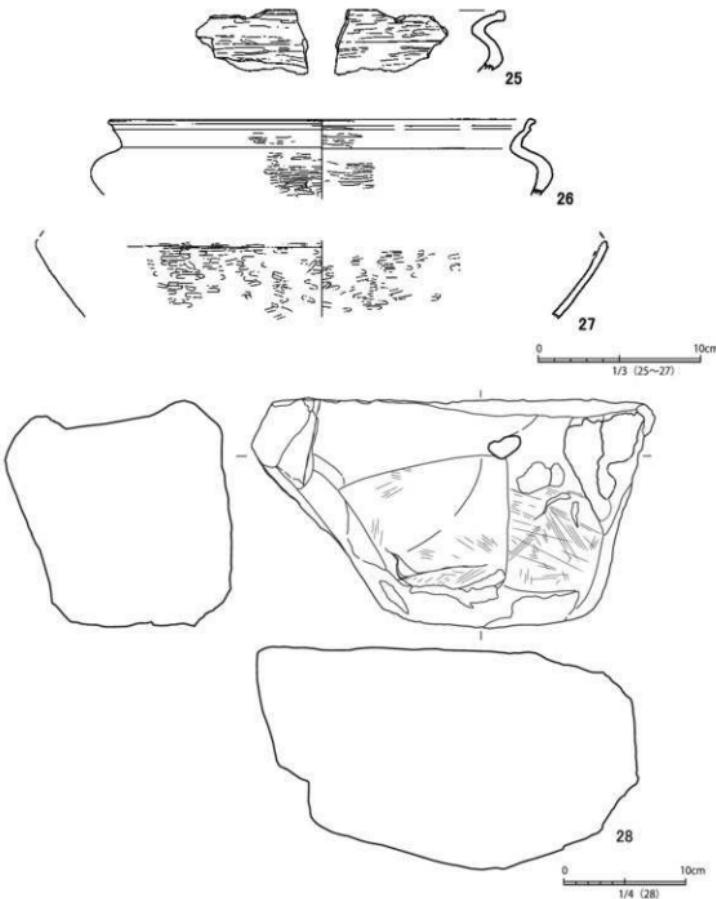


第25図 1・4・6・9・11・15号土坑実測図



第26図 1・11号土坑出土遺物実測図

SC1(20 ~ 23)・SC11(24)



第27図 11号土坑出土遺物実測図

15号土坑（第25図）

C8グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.0m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは緩やかである。遺物は埋土中より、深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

17号土坑（第28図）

B10グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.8m、短軸約0.4m、検出面からの深さは約0.4mである。断面形はすり鉢状に近く、北東側は段落上に深くなる。遺構に伴う遺物は出土していない。

19号土坑（第28図）

B9 グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.8m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物は埋土中より、深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

21号土坑（第28図）

C9 グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、東側の立ち上がりは緩やかである。遺構に伴う遺物は出土していない。

23号土坑（第28図）

C8 グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.0m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は皿状で、立ち上がりは急である。遺物は、床面付近より縄文土器及び石器が出土しており、深鉢3点（29～31）、浅鉢3点（32～34）、石器2点（35・36）を図化した。29の口縁部は「く」の字形に屈曲し、口径が胴部最大径より大きく、その胴部の屈曲はゆるい器形をなす。内外面はともに貝殻条痕後ナデ調整される。30は逆「ハ」の字形に広がる胴部である。内外面ともにナデ調整されるが、内面に比べ外側は粗いナデ調整である。また、外面には黒斑が大きく2カ所ある。31は底径9.5cmの底部で、その端部は外方に張り出す。32は頭部を中心とする破片で、短く外反する口縁部が付くと考えられる。また、胴部にかけて接合痕が残る。33は胴部から底部で、平底に近い丸底を呈す。内外面は丁寧なミガキ調整で、内面に黒斑がある。34は口縁部から底部である。復元口径は41.5cm、外面は貝殻条痕後粗いナデ調整、内面は貝殻条痕文が認められる。また、外面にススが付着している。

35・36は砂岩製の磨石で、35は平面形が円形を呈し、全体的に磨面が見られるが、一部が欠損している。36は正面に磨面が残るが、裏面側は複数回の打削と剥離調整が認められる。

24号土坑（第28図）

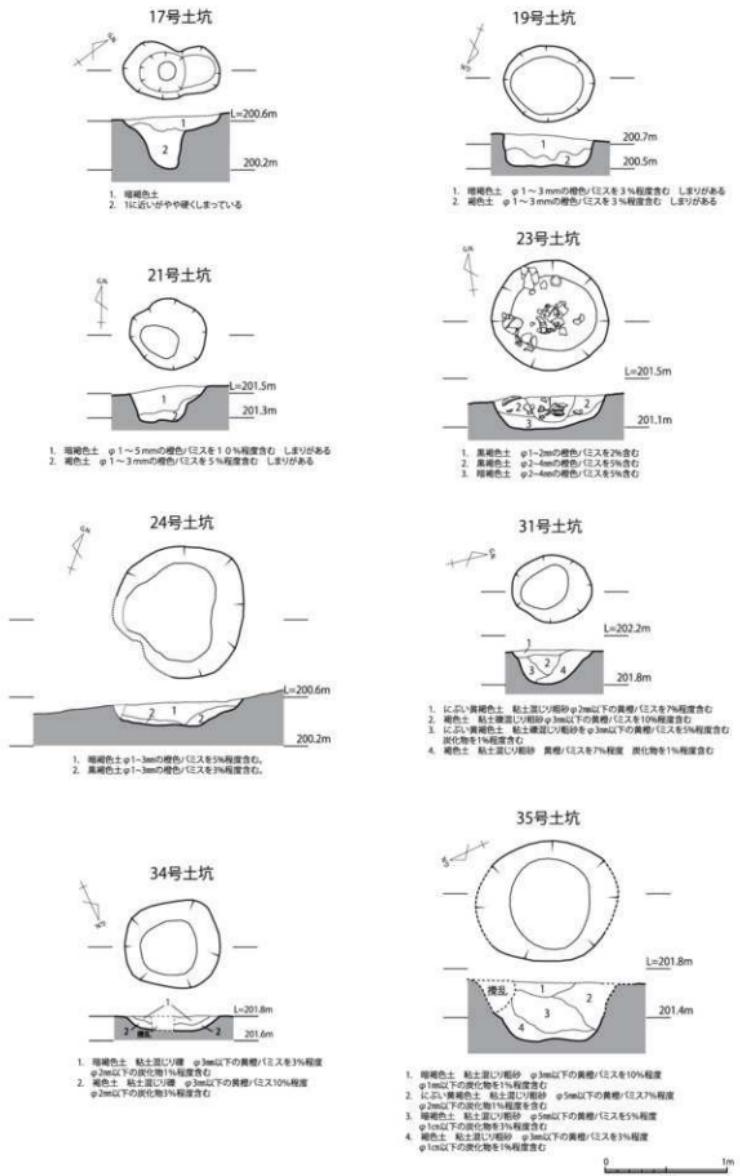
C10 グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約1.2m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は方形に近く、南西側は擾乱している。遺物は、埋土中より縄文土器が出土しており、深鉢1点（37）、浅鉢3点（38～40）を図化した。37は復元底径8.6cmの底部で、端部は外方に張り出している。38は口縁部が欠損しており、胴部は屈曲して稜をなす。39は短く「く」の字形に屈曲する口縁部で、その端部は玉縁状となる。胴部は屈曲してうい稜をなす。40は胴部でも下半部にあたる。内外面には丁寧なヘラミガキ調整が施される。

31号土坑（第28図）

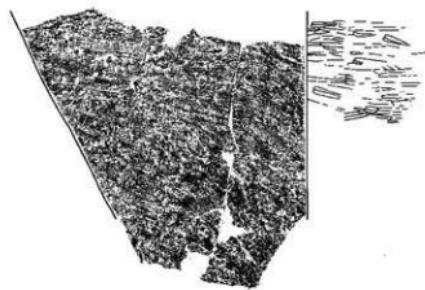
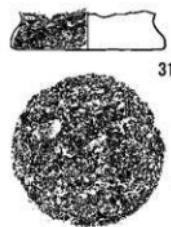
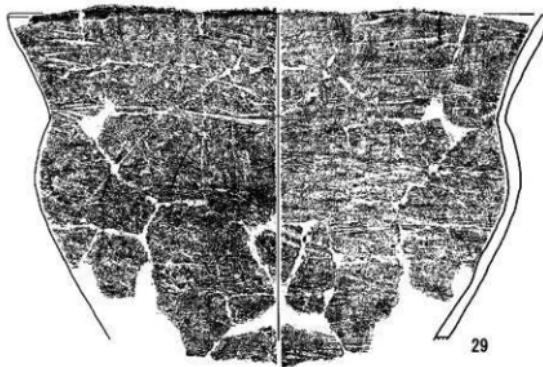
D2 グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.7m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は北側の立ち上がりが緩やかな椀状である。遺構に伴う遺物は出土していない。

34号土坑（第28図）

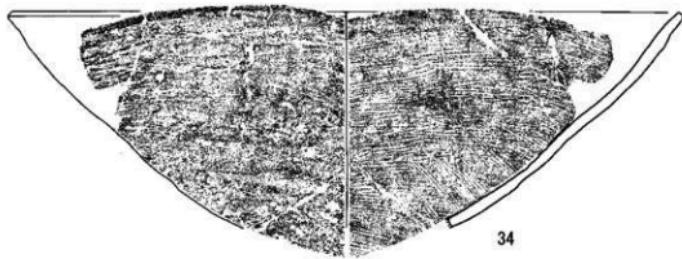
C2 グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約0.8m、短軸約0.7m、検出面からの深さは約0.15mである。断面形は立ち上がりの緩やかな皿状である。遺物は、埋土中より縄文土器が出土しており、浅鉢2点（41・42）を図化した。41・42は内外面ともに丁寧なミガキ調整で、41は短く外反する口縁部がつき、その端部は短く屈曲する。また、胴部最大径が口径を上回る。42は口縁端部を失うが、41と類似した器形と思われる。



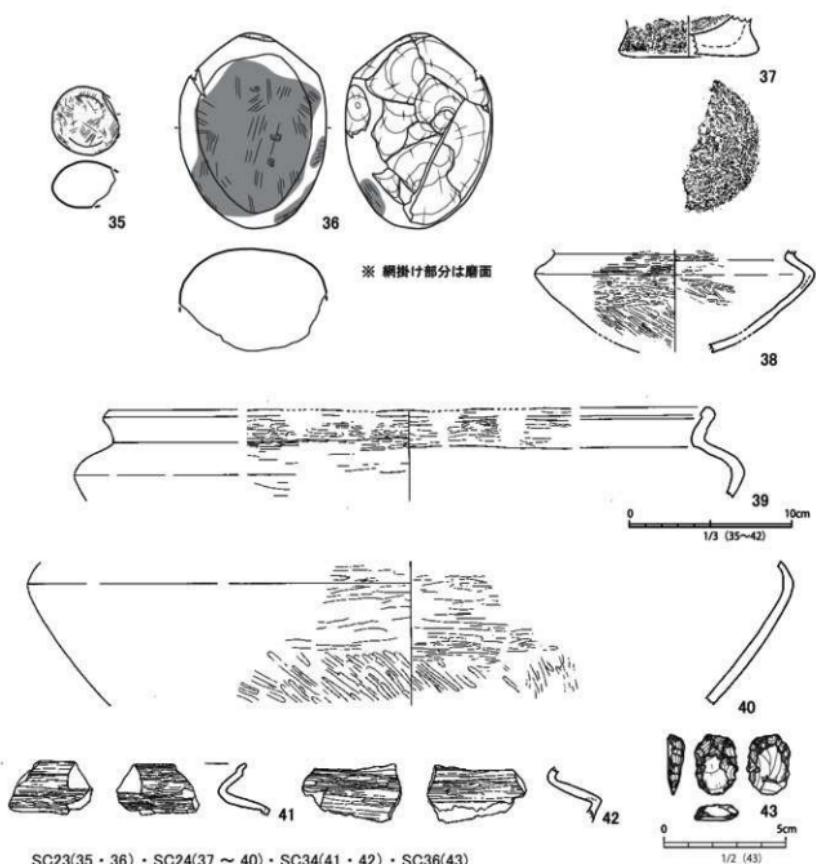
第28図 17・19・21・23・24・31・34・35号土坑実測図



0
1/3 10cm



第29図 23号土坑出土遺物実測図



第30図 23・24・34・36号土坑出土遺物実測図

35号土坑（第28図）

B3グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.2m、短軸約1.0m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は逆台形で立ち上がりは急である。遺物は埋土中より深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

36号土坑（第31図）

B3グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.2m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物には縄文土器及び石器があり、石器1点(43)を図化した。43は黒曜石製（腰岳産）のスクレーパーで、周縁を剥離調整して刃部とする。

40号土坑（第31図）

B3グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.4m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は立ち上がりの緩やかな椀状であり、遺物は底面よりやや浮いた位置で縄文土器及び石器が出土している。出土遺物は、隣接する41号土坑より出土した遺物と互いに接合関係があり、接合関係にある深鉢2点（44・45）を含め、浅鉢1点（46）、石器1点（47）を図化した。

44は口縁部が外反し、口縁部外面に断面三角形の突帯がつく。45は復元底径8cmの底部で、端部が外方に張り出す。46は直線的に開く口縁部で、口縁端部は玉縁状に肥厚する。47はホルンフェルス製の石鏃である。平面形は三角形状で、正面の両側縁に剥離調整を施している。

41号土坑（第31図）

B3グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約1.9m、短軸約1.7m、検出面からの深さは約1.0mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。埋土は大きく5層に分かれるが（第31図）、特に4層中（床面よりやや浮いた位置）より大量の縄文土器片が出土しており、その総重量は約14.1kgである。埋土の堆積状況により、この4層を含む2～5層は、人為的な埋め戻しに伴うもの、1層はその後の自然堆積と判断される。遺物は、40号土坑と接合関係にある62～64を含め、深鉢13点（48～58・62・63）、浅鉢4点（59～61・64）を図化した。

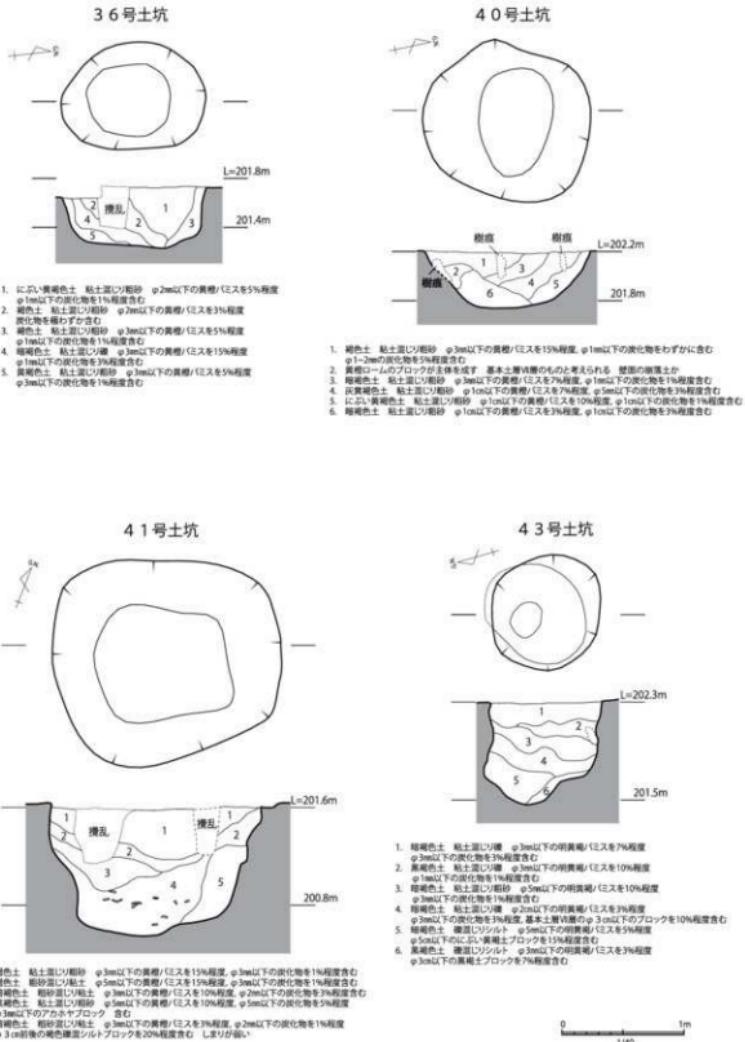
なお、4層中より炭化物が出土しており、AMS法による放射性炭素分析を実施した結果、 2925 ± 25 年¹⁴CBPの測定値が得られた。

48～58は深鉢で、内外面ともにナデ調整される。48～50は口縁部がやや直立気味に外反している。また、48は胴部最大径が口径を上回り、胴部が鋭角に屈曲するのに対し、49・50は口径と胴部最大径が等しく、胴部の屈曲は緩くなる。51・52は口縁部や胴部に屈曲をなさず、そのまま立ち上がる。51は口縁部に補修孔が1ヵ所あり、口縁端部の外面は台形状に肥厚し、受け口状となる。52・53は口縁部外面に断面三角形を呈する突帯がつく。54～57は端部が外方に張り出す底部で、54・55・57は上げ底状である。58は口縁部が外反し、口縁部外面に断面が台形状の突帯がつく。胴部は稜をなして鋭角に屈曲している。59～61は縄文土器の浅鉢で、内外面ともにミガキ調整されている。59は口縁部が短く内傾する。60は口縁部が僅かに外反し、口縁部内面に沈線文が一条巡る。胴部は張り出し気味で、扁球状を呈する。61は丸底の浅鉢で底部外面には、あばた状の焼成時破裂痕が認められる。

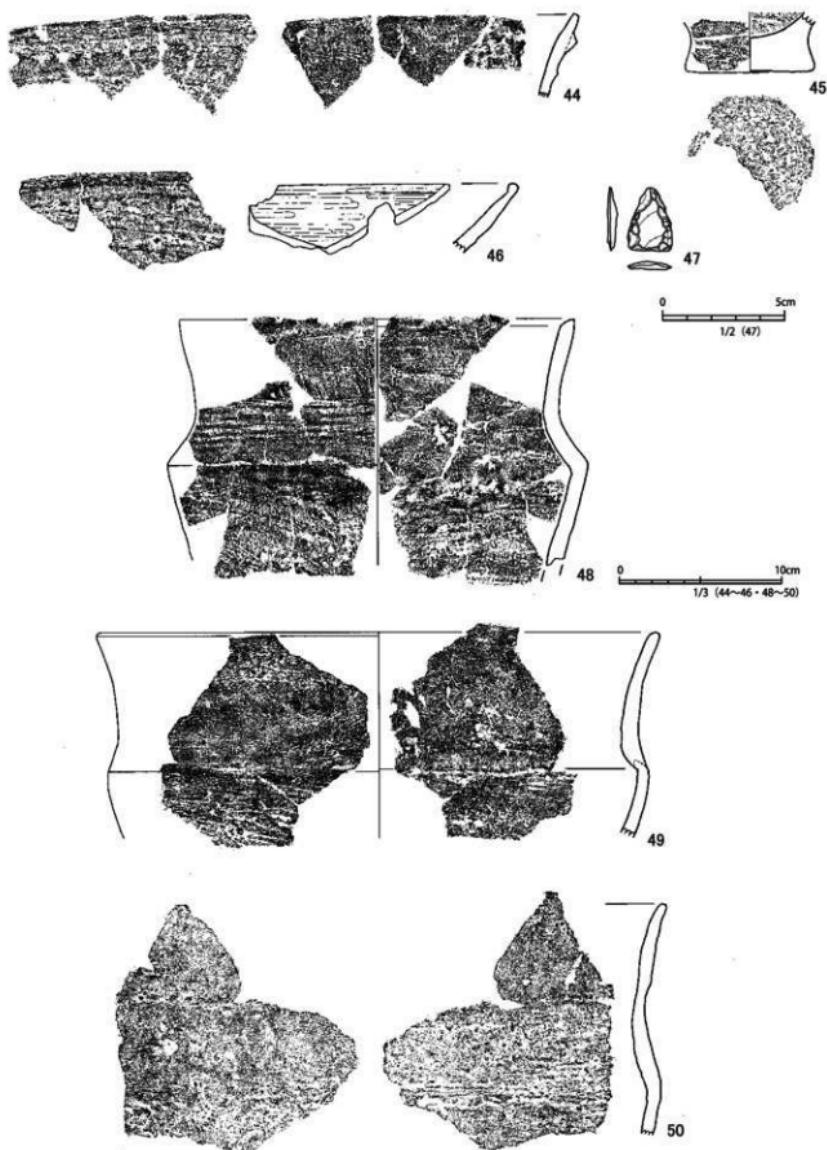
62～64は40号土坑と互いに接合関係のある縄文土器である。62・63は深鉢で、口縁部は外反しており、口縁部のつけ根と胴部の屈曲部が近接し、頸部内面には明確な段を有する。62は口縁部外面に断面三角形状の突帯がつく。64は精製浅鉢で、大きく外方に開く口縁部に半球状の胴部から底部がつく。口縁部内面には沈線が1条施される。

43号土坑（第31図）

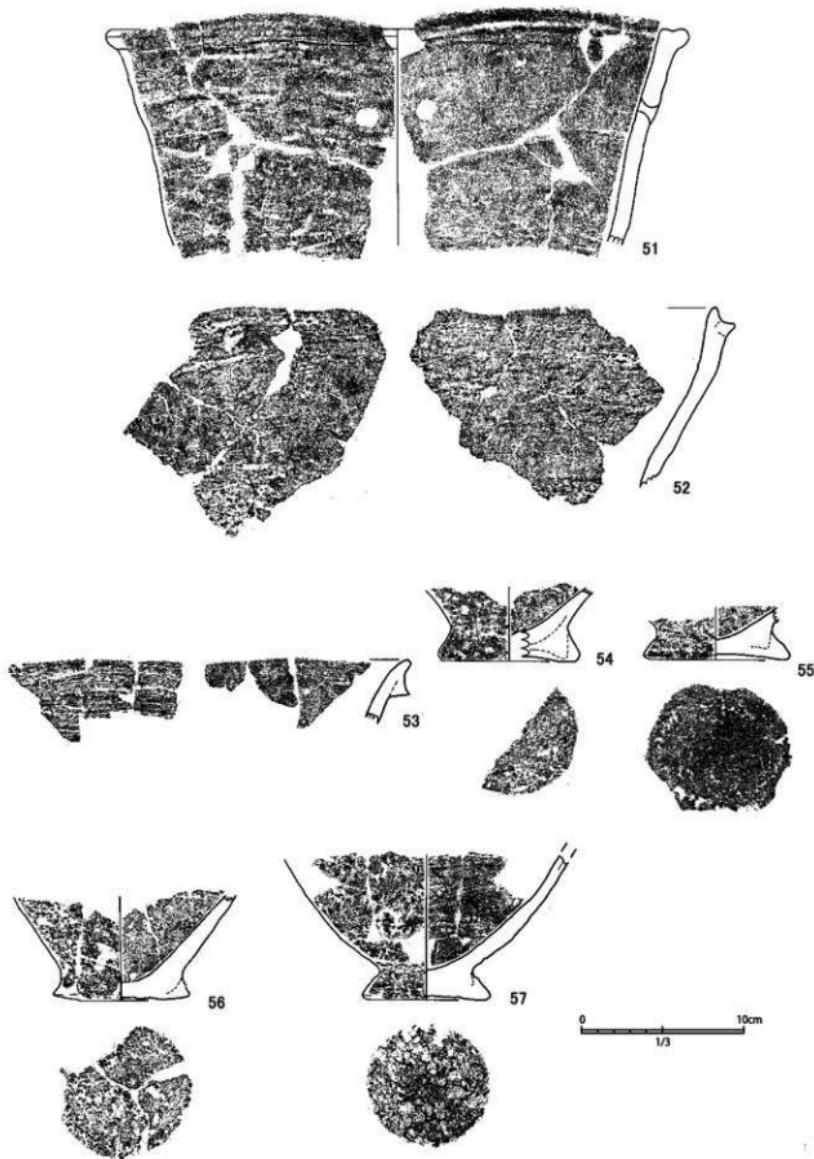
F6グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.9m、検出面からの深さは約0.8mである。断面形は方形に近く、南側は段落上に深くなっている。埋土は大きく1～6層に分かれるが、各層にブロック状の土塊が含まれることから、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。遺物は土坑底面上で、深鉢の底部（65）が1点、立位の状態で出土した。65は底径9.1cmの底部で、端部が外方に張り出しており、内外面はともにナデ調整される。



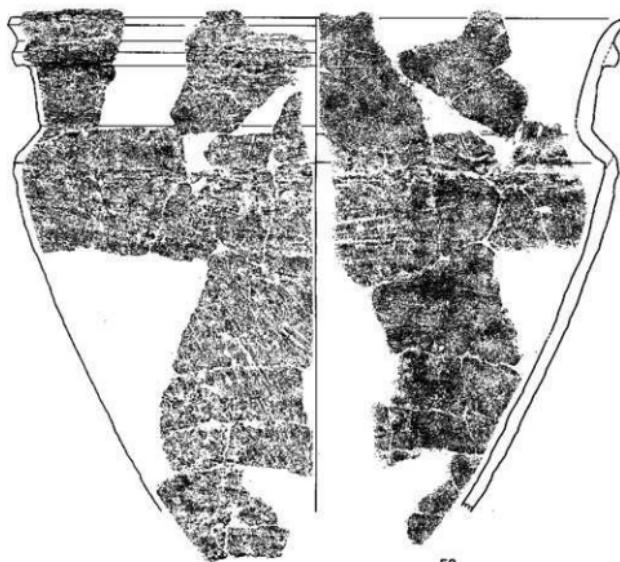
第31図 36-40-41-43号十抗寒性圖



SC40(44 ~ 47) · SC41(48 ~ 50)
第32図 40·41号土坑出土遺物実測図



第33図 41号土坑出土遺物実測図（1）

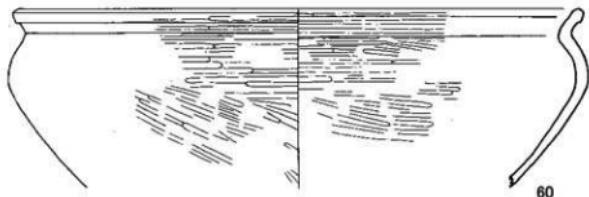


58

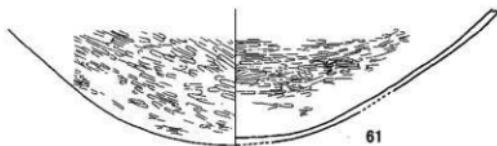


59

0
1/3
10cm

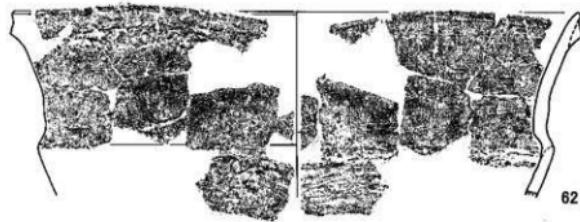


60

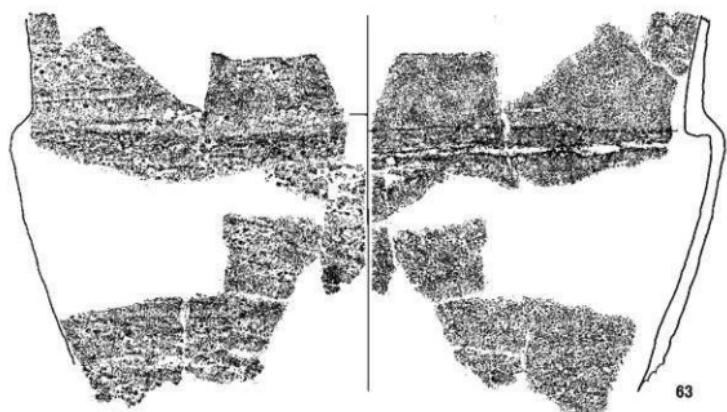


61

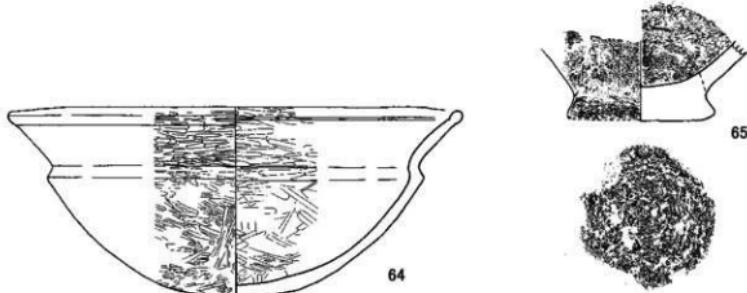
第34図 41号土坑出土遺物実測図（2）



62

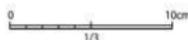


63



64

65



SC41(62 ~ 64)・SC43(65)

第35図 41・43号土坑出土遺物実測図

52号土坑（第36図）

B5グリッドに位置している。平面形は方形基調で、北側は張り出している。長軸約1.3m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.6mである。断面形は椀状に近く、北側は緩やかな傾斜がつく。遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

53号土坑（第36図）

C4グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.0m、検出面からの深さは約0.25mである。断面形は立ち上がりの緩やかな椀状で、遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

54号土坑（第36図）

B4～C4グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.1m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は立ち上がりの緩やかな椀状で、遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

55号土坑（第36図）

B4グリッドに位置している。平面形は方形基調の不整形で、長軸約1.3m、短軸約1.2m、検出面からの深さは約0.55mである。断面形は椀状に近く、西側は段落上に深くなっている。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢1点（66）、浅鉢1点（67）を図化した。**66**は胴部で外表面がナデ調整、内面には貝殻条痕文が認められる。**67**は内外面ともにミガキ調整され、口縁部の内外面に沈線を施す。

57号土坑（第36図）

C4グリッドに位置している。平面形は不整な梢円形で、長軸約1.1m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物は埋土中から、縄文土器が出土しており、深鉢1点（68）、浅鉢1点（69）を図化した。**68**は口縁部外面に幅広の突帯を貼り付け、さらに1条の沈線を施す。**69**は扁球状の器形を呈する。内外面ともにミガキ調整で、外面に接合痕が残る。

58号土坑（第36図）

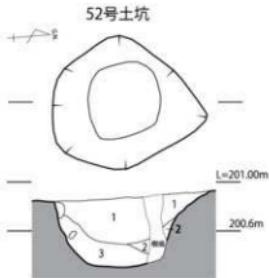
B4グリッドに位置している。平面形は方形基調の不整形で、長軸約1.1m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.25mである。断面形は立ち上がりの緩やかな皿状であり、西側は段落上に深くなっている。遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

59号土坑（第37図）

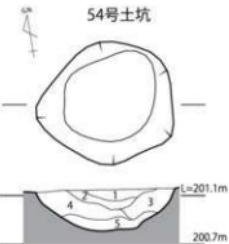
B4グリッドに位置している。平面形は方形基調の不整形で、長軸約1.6m、短軸約1.2m、検出面からの深さは約0.7mである。断面形は逆台形で、立ち上がりは急である。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、浅鉢1点（70）、深鉢1点（71）を図化した。**70**は口縁端部を玉縁状に肥厚させ、その内外面に沈線を施す。**71**は口縁部が短く、直立気味に外反し、口径と胴部最大径が近似する。また、胴部の屈曲は緩やかで、内外面には貝殻条痕文が認められる。

60号土坑（第37図）

C4グリッドに位置している。平面形は不整な梢円形で、長軸約0.9m、短軸約0.7m。検出面からの深さは約0.25mで、断面形は皿状である。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、浅鉢1点（72）を図化した。**72**は大きく外方に開く器形を呈する。口縁端部の外面は連続的な指頭痕が残るが、口縁端部と口縁部内面は丁寧にナデ調整されていることから、指頭痕は調整痕というより、加飾的な意味合いが強いとみられる。



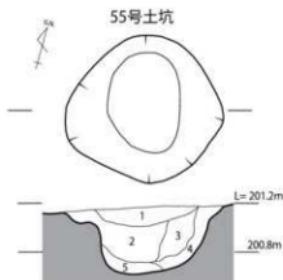
- 褐色土 φ50m以下の明黄褐色/(Eスを5%程度)
φ2m以下の液化物を1%程度含む
- にじむ黄褐色土 φ5m以下の中黄褐色/(Eスを3%程度)
- 褐色土 φ50m以下のにじむ黄褐色ブロックを20%程度含む
壁面が崩壊したものと考える



- 褐褐色土 褐土混じり層φ 2m以下の明黄褐色/(Eスを5%程度)
φ2m以下の液化物を1%程度含む
- 黄褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを30%程度)右側
- 褐色土 褐土混じり層φ 2m以下の明黄褐色/(Eスを10%程度)
φ2m以下の液化物を1%程度含む
- 灰黄褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを10%程度)
φ3m以下の中液化物を3%程度含む
- にじむ黄褐色土 褐土混じりシルト φ1m以下の明黄褐色/(Eスを5%程度)
φ1m以下の中液化物を1%程度含む



- 褐褐色土 褐土混じり層 φ3m以下の中黄褐色/(Eスを5%程度)
φ1m以下の中液化物を1%程度含む
- にじむ黄褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを10%程度)
φ3m以下の中液化物を1%程度含む
- 黄褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを10%程度)
φ3m以下の中液化物を1%程度含む
- にじむ黄褐色土 褐土混じり層φ 2m以下の明黄褐色/(Eスを5%程度)
φ1m以下の中液化物を3%程度含む
- 褐褐色土 褐土混じり層 φ3m以下の中黄褐色/(Eスを5%程度)
φ3m以下の中液化物を1%程度含む 壁面に落水孔埋設



- 灰黄褐色土 褐土混じり層φ 2m以下の明黄褐色/(Eスを5%程度)
φ2m以下の中液化物を1%程度含む
- 黄褐色土 褐土混じり層φ 2m以下の明黄褐色/(Eスを10%程度)
φ1m以下の中液化物を1%程度含む
- 褐褐色土 褐土混じり層φ 1cm以下の明黄褐色/(Eスを5%程度)
φ2m以下の中液化物を1%程度含む
- にじむ黄褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを5%程度)
φ1m以下の中液化物を1%程度含む
- 灰黄褐色土 褐土混じり層 φ5m以下の明黄褐色/(Eスを5%程度)
φ2m以下の液化物を1%程度含む



- 褐色土 褐土混じり層φ 2m以下の明黄褐色/(Eスを15%程度)
φ5m以下の液化物を3%程度含む
- にじむ黄褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを10%程度)
φ3m以下の中液化物を3%程度含む
- 灰黄褐色土 褐土混じり層φ 2m以下の明黄褐色/(Eスを7%程度)
φ1m以下の中液化物1%程度を含む
- にじむ黄褐色土 φ3m以下の中黄褐色/(Eスを5%程度)
φ1cm以下の中液化物1%程度含む
- 褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを10%程度)
φ1m以下の中液化物1%程度含む
- にじむ黄褐色土 褐土混じり層φ 3m以下の中黄褐色/(Eスを10%程度)
φ1m以下の中液化物1%程度含む 壁面の崩壊と考えられる



- 黒褐色土 φ3m以下の明黄褐色/(Eスを10%程度含む)
- 灰黄褐色土 φ5m以下の明黄褐色/(Eスを15%程度含む)
- にじむ黄褐色土 φ5m以下の明黄褐色/(Eスを10%程度含む)

0 1m
1/40

第36図 52~55・57・58号土坑実測図

61号土坑（第37図）

B4グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.4m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は逆台形状で、西側は緩やかな傾斜がつく。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢3点(73～75)、浅鉢1点(76)を図化した。73・74は端部が外方に張り出す底部で、内外面はナデ調整される。75は口縁部外面に幅広の突帯を貼り付け、1条の沈線文を入れる。76は頸部に蝶ネクタイ状の突起を貼り付けている。

65号土坑（第37図）

B4グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.3m、検出面からの深さは約1.0mである。断面形は逆台形に近く、底面に直径0.4m、深さ0.3mの小穴がある。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢1点(77)、浅鉢5点(78～82)を図化した。

77は端部が外方に緩く張り出す底部である。78～80は胴部で、内外面ともにミガキ調整される。81は埋土の中位付近から出土した浅鉢で、1個体が押しつぶされたような状況(国版11)で出土した。口縁部は短く直口する器形で、胴部は長胴を呈し、底部は平底に近い丸底である。内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整され、口縁部直下には焼成時破裂痕が1箇所認められる。底部には被熱痕が、胴部全体にはススが付着している。82の口縁端部外面にみられる指頭痕は72と同様な手法である。

66号土坑（第40図）

C3グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.8m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は皿状で、立ち上がりは緩やかである。遺物は床面付近から縄文土器及び石器が出土しており、深鉢4点(83～86)、浅鉢1点(87)、石器1点(88)を図化した。

83は短く外反する口縁部で、内外面ともに貝殻条痕後に粗いナデ調整される。84～86は内外面ともにナデ調整された胴部で、逆「ハ」の字形に直線的にひらく。85は胴部と頸部の境目に屈曲をもつ。87は大きく外方に向けて立ち上がる口縁部で、その外面は粗いナデ調整、内面はナデ調整される。88は砂岩製の磨礲石である。表裏面に磨面が見られ、敲打痕が周縁を巡る。

67号土坑（第40図）

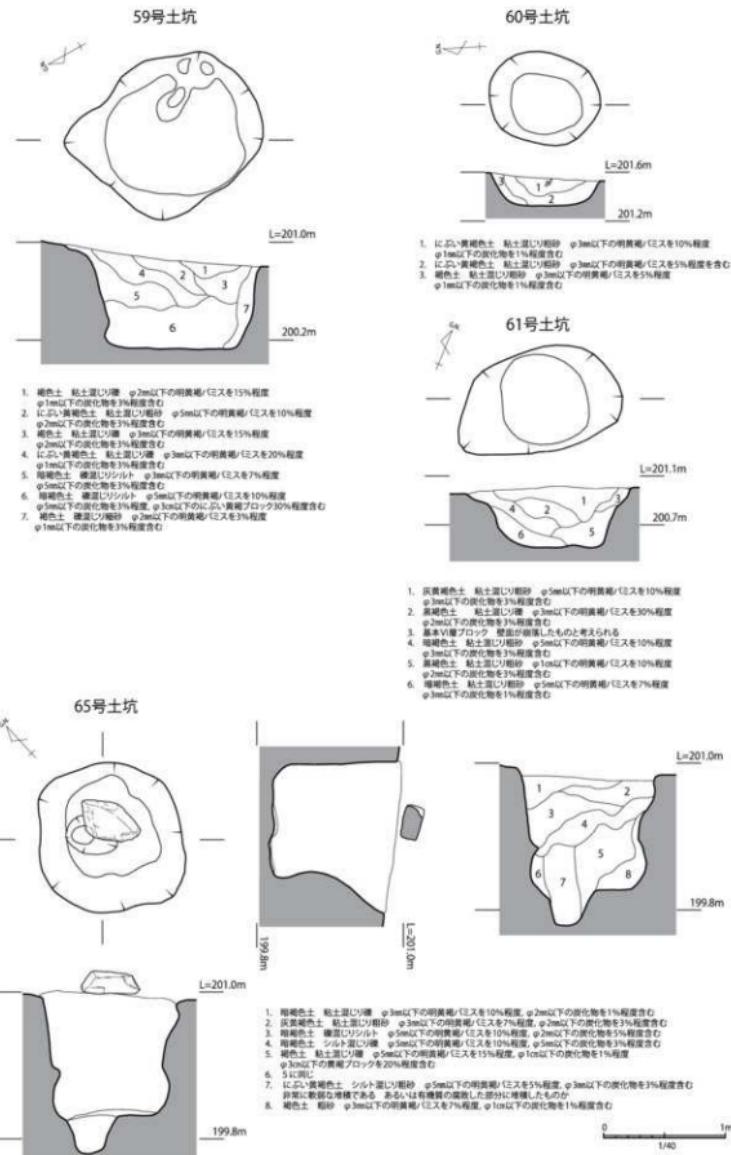
D4グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.3m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.65mである。断面形は逆台形で、西側は段落上に深くなっている。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢1点(89)、浅鉢1点(90)を図化した。

89は端部が外方に強く張り出す底部で、底径8.4cm、内外面はナデ調整される。90は口縁端部を僅かに肥厚させ、内面に沈線を施す。

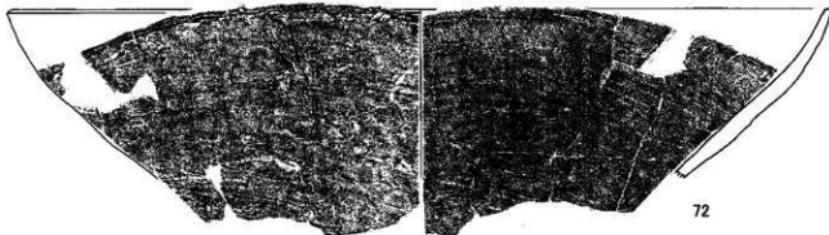
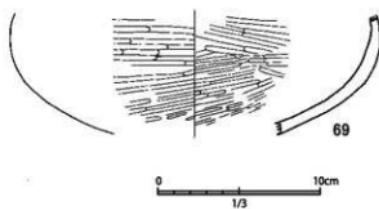
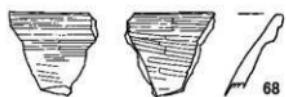
71号土坑（第40図）

C3グリッドに位置している。平面形は方形基調で、東側の壁面は崩れていいる。長軸約1.1m、短軸約0.8m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢2点(91・92)を図化した。なお、92は、65号土坑より出土した遺物と互いに接合関係がある。

91は口縁端部を肥厚させ、内面に沈線文を施す。92は口縁部が大きく外方に開き、外側は貝殻条痕文が認められるが、内面側はミガキ調整される。

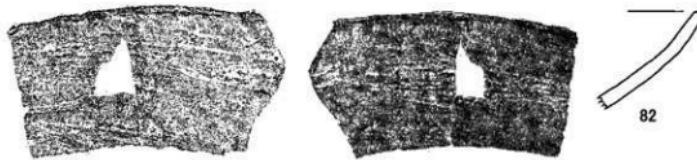
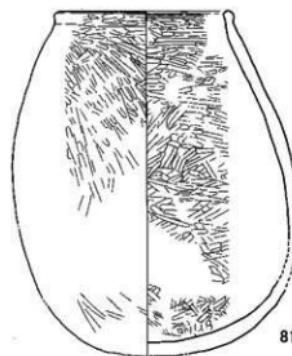
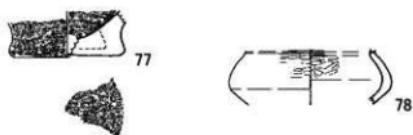
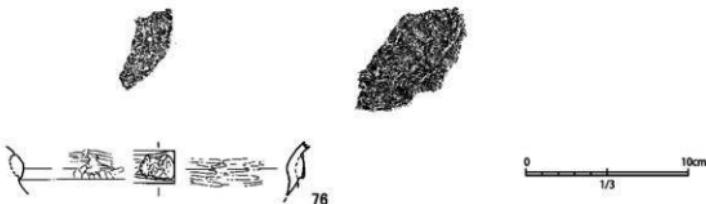
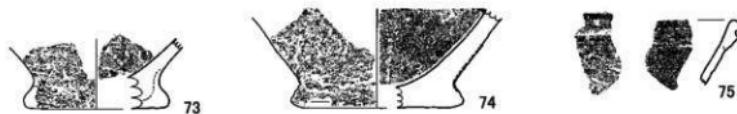


第37図 59~61・65号土坑実測図



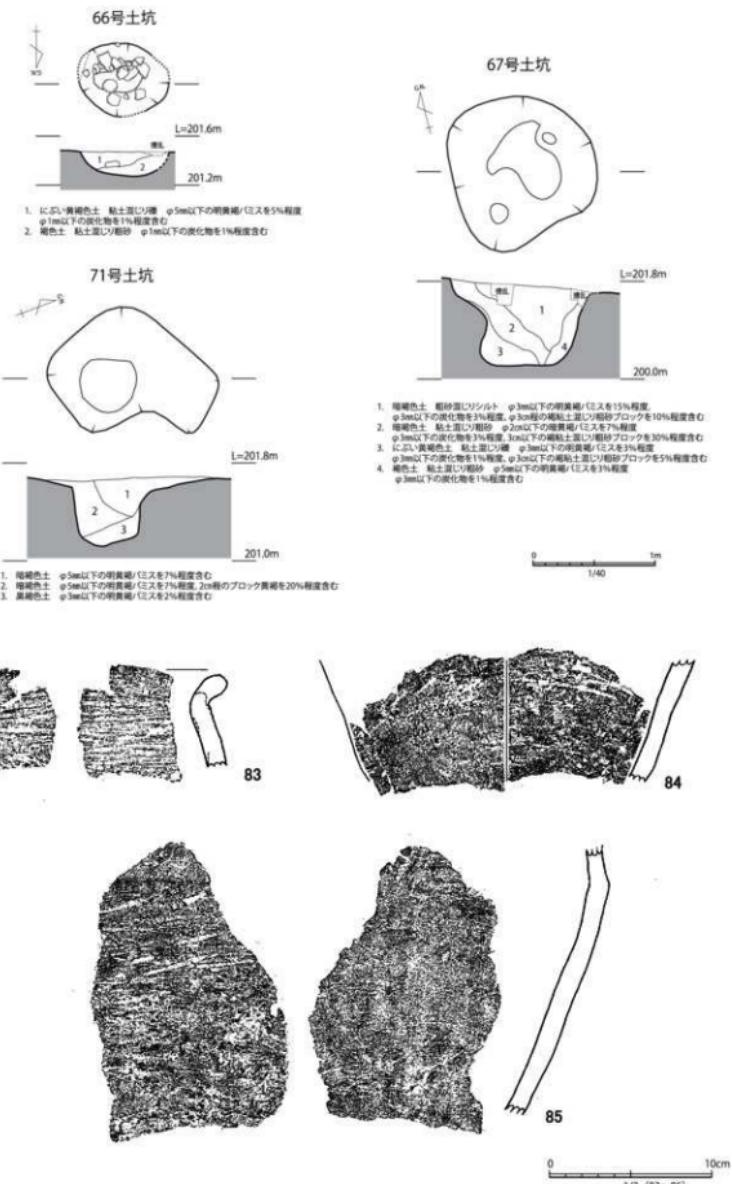
SC55(66・67)・SC57(68・69)・SC59(70・71)・SC60(72)

第38図 55・57・59・60号土坑出土遺物実測図

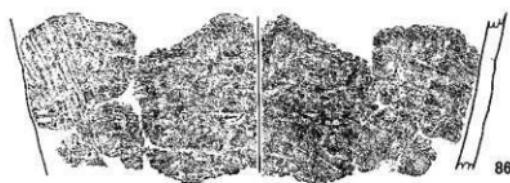


SC61(73 ~ 76) · SC65(77 ~ 82)

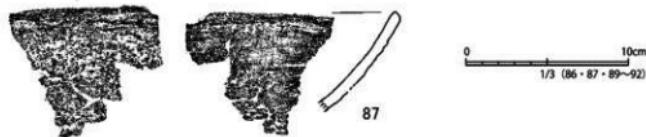
第39図 61・65号土坑出土遺物実測図



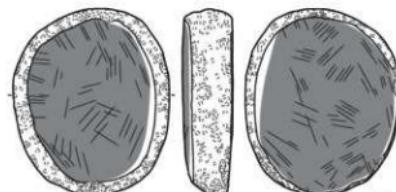
第40図 66・67・71号土坑及び66号土坑出土遺物実測図



86



87



88

※ 網掛け部分は磨面

0
10cm
1/3 (88)



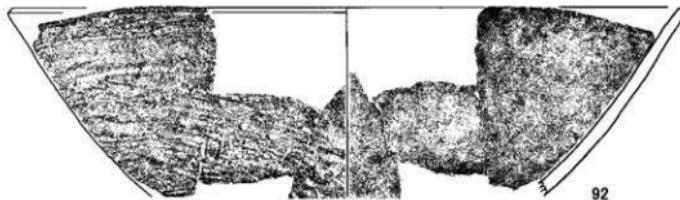
89



90



91



92

SC66(86～88)・SC67(89・90)・SC71(91・92)

第41図 66・67・71号土坑出土遺物実測図

(2) 遺物 (IV層出土)

a) 繩文土器 (第42図～第51図)

縄文時代後期 93～113は縄文時代後期に属する深鉢で、宮ノ迫式、中岳II式を中心とする。

93・94は僅かに外反する口縁部で、外面に貝殻腹縁刺突文、頸部に凹線を施す。95・96は胴部に凹線ないし沈線が施されている。97は口縁部外面に刺突文、沈線間に縄文が施されている。98は2条1組となる凹線文の間に貝殻腹縁刺突文を施す。99は、胴部外面に短沈線文と凹線文を施す。100～103は胴部外面に凹線文を施し、101～103の内面には貝殻条痕文が認められる。104は口唇部に刻目を交互につけ、口縁部外面に貝殻条痕文と凹線文を施す。105の外面は貝殻条痕後ナデ調整され、口縁部外面に貝殻腹縁刺突文を施す。また、内外面にススが付着している。

106～111は口縁部で、口縁端部が肥厚しており、口縁部の端面には108は1条、109～111は2条の沈線文が巡る。112は胴部で、2条の沈線文と列点文を施す。また、外面が僅かに赤色であったため、分析した結果、鉄成分による赤色顔料（ベンガラ）と思われる。113は胴部と頸部の境目に刺突列点文が施される。

縄文時代晩期 114～213は縄文時代晩期に属し、入佐式や黒川式土器に相当する。そのうち114～161は深鉢で、その器形は口縁部が大きく外反するもの、胴部最大径と口径が等しく僅かに外反するもの、内溝するものがある。また、口縁端部を肥厚させるものや、口縁部外面に突帶をつけるものもある。

114は口縁部がやや内溝ぎみの複合口縁で、口縁部内面は平滑に仕上げられる。115は口縁部から胴部で、口縁部の内外面に沈線を施す。116は口縁部が僅かに肥厚し、内外面ともに粗いナデ調整される。また、外面にススが付着している。117は口縁部が外反している。また、口径が胴部最大径を上回り、胴部の屈曲が緩やかである。118は口縁部外面に縦方向の2本の沈線文が入る。119は外反する口縁部で、口縁端部が僅かに肥厚している。また、外面にススが付着している。120は大きく外反する口縁部で、内外面ともにミガキ調整される。121～124は波状口縁を呈する。また、外面全体にススが付着しており、そのうち121～123は内面に黒斑がある。この121～123は内外面ともナデ調整され、124は口縁部外面に貝殻条痕文を施し、内面はナデ調整される。125は頸部に胴部の屈曲部が近接し、頸部内面には明確な段がつく。また、口縁部はやや直立気味に外反する。126・127は直立気味に外反する口縁部で、126は内外面ともに貝殻条痕文を施す。127は、内外面ともに貝殻条痕後ナデ調整され、胴部にかけて接合面が見られる。

128・129は胴部から頸部にかけて稜をなして緩やかに屈曲する。128の外面はナデ調整され、128の内面及び129の内外面は、貝殻条痕後粗いナデ調整される。129・130は口縁端部が肥厚している。

131～137は口縁部外面に断面三角形状の突帶がつくが、134～137の突帶は、131～133に比べ、下がった位置に貼り付けられる。また、132は外面に貝殻条痕文を施すが、それ以外はナデ調整される。

138は稜をなして屈曲する胴部である。内外面ともに貝殻条痕文が施される。139は口縁部外面に三角形を呈する突帶が施され、胴部から口縁部にかけて肩部を形成し、稜をなして屈曲する。また、口縁部は緩やかに外反し、口径と胴部最大径が等しくなる。

140～143は直立気味に立ち上がる口縁部である。141は口縁端部を玉縁状に肥厚させ、その内面には沈線を施す。142は口縁部に4条の沈線文が巡り、内外面ともに貝殻条痕文を施す。143は肥厚した口縁部をもつ。144は口縁部が緩やかに立ち上がり、外面に貝殻条痕文を施す。145は口縁部が僅かに外反し、断面台形状の突帶がつく。

146～148は口縁部が大きく内湾するものである。146は口縁部を僅かに帯状に肥厚させ、ナデ調整し、頸部からは貝殻条痕文を施す。147・148は口縁部外面に断面三角形状の突帶がつく。

149～161は底部で、底部から外側へ直線的に開く一群である。底部下端が外方に張り出すもの（150～160）のなかには上げ底状（159・160）のものがある。

149・150は底面にアジロ編み圧痕があり、底面のみに白色の微細粉末が固化した物質が付着している。また、149は外面に貝殻条痕文を施し、内面をナデ調整、150は内外面ともに貝殻条痕文を施し、底面内部は指頭痕が残る。151～161は内外面ともにナデ調整され、161の外面には指頭痕が残る。

162～193は精製浅鉢である。器形は口縁部が大きく外反するもの、口縁部が短く胴部最大径が口径より大きくなるもの、内湾するものがある。また、口縁端部を玉縁状に肥厚させるものや、リボン状の突起をつけるものもある。調整については、基本的に黒色磨研がなされるが、黒色処理がされず、明黄褐色（174）や浅黄色（175）の色調をもつものもある。162は頸部から口縁部にかけて外反し、さらに口縁端部が立ち上がる。その外面には沈線が施される。163は頸部から口縁部にかけて大きく弧状に外反し、さらに口縁端部が短く直立する。また、口縁部の外面に沈線文が巡る。

164～169は口縁部で、口縁端部が玉縁状を呈するものである。164は口縁部内面に沈線文が巡り、165・166は口縁部外面に沈線文が巡る。167は口縁端部を内面側に肥厚させたもので、口縁部外面に沈線文が巡る。168は口縁部内外面に沈線文が巡り、リボン状の突起がつく。また、胴部は明確な稜をなして張り出す。169も口縁部にリボン状の突起がつく。170は胴部が扁球状に張り出しており、外面に黒斑がある。

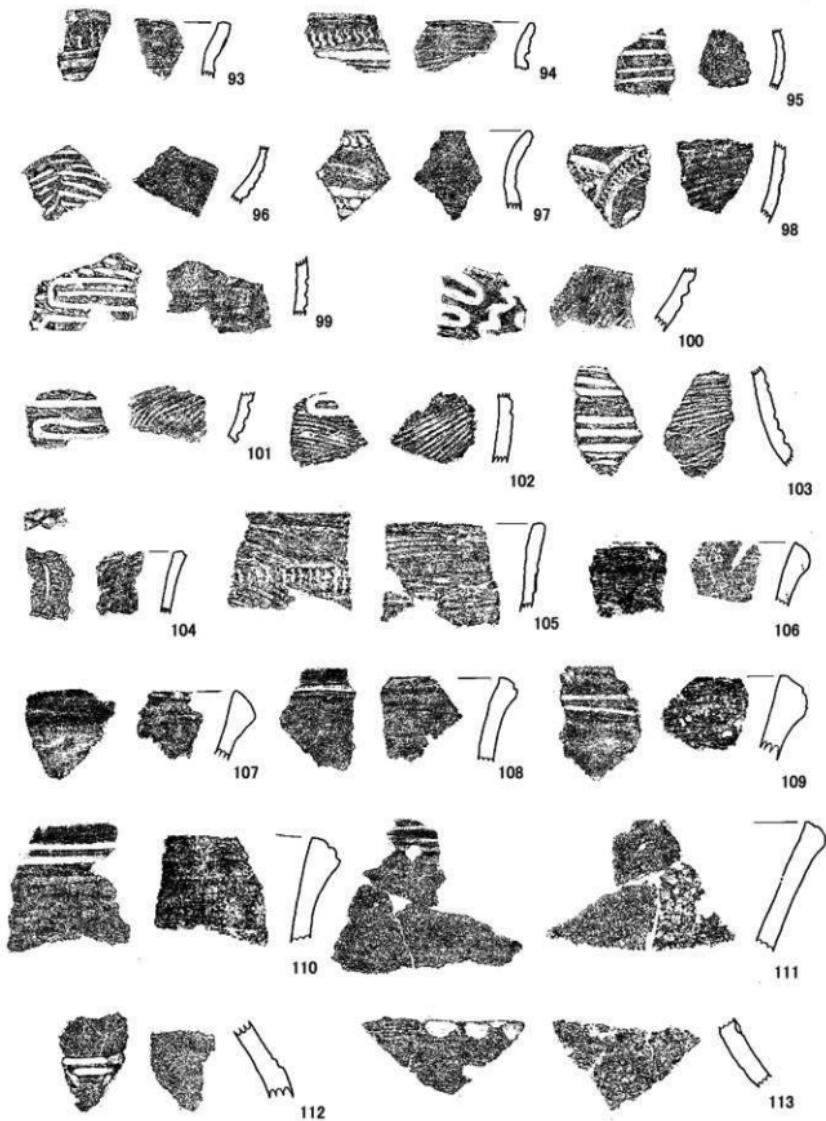
171～179は口縁部から胴部にかけてのものである。そのうち171～175・177～179は、口縁端部が玉縁状を呈し、口縁部が短く、胴部が張り出している。171-172-174-177～179は口縁部の内外面に沈線文が巡り、173・175は口縁部内面に沈線文が巡る。176は口縁部が肥厚せず、外反する。177・179は口縁部にリボン状の突起がつく。180は171、181は168等に類似する口縁部から胴部の資料である。

182～186は短く屈曲する口縁部をもつものである。182-183は口縁部が短く外反し、胴部は稜をなして張り出す。また182は口縁部内面に沈線文が巡る。184は口縁端部にリボン状の突起が複数個つく。185は口縁端部にひれ状の突起がつく。186は内湾する1次口縁端部に粘土錆をのせて、玉縁状の2次口縁とする。

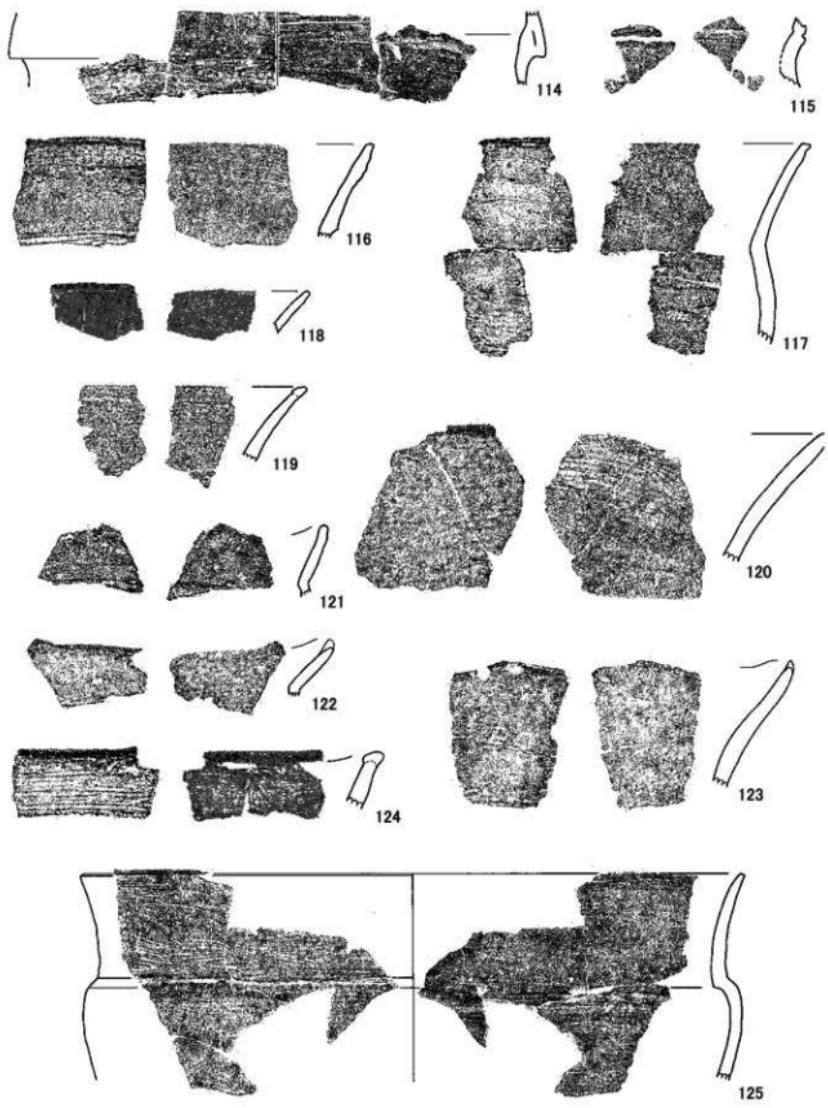
187～189は内傾する口縁部である。187は端部が僅かに肥厚する。188はやや直立ぎみに内傾する口縁端部に、粘土帶を貼り付けて肥厚させる。189は波状口縁で、波頂部は円形の刺突文となる。また、口縁部外面には沈線を施す。接合痕の端面には、貝殻腹縁による平滑なナデ調整痕が認められる。

190～193は胴部下半から底部にかけてのもので、内外面とともにミガキ調整である。

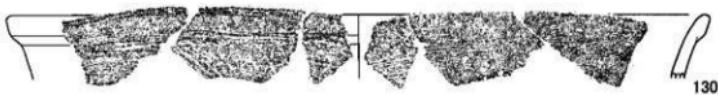
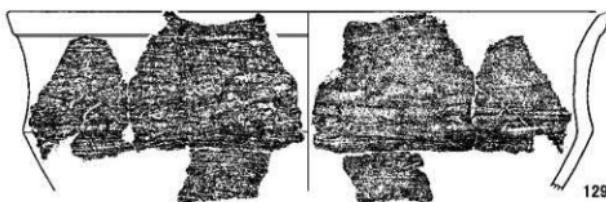
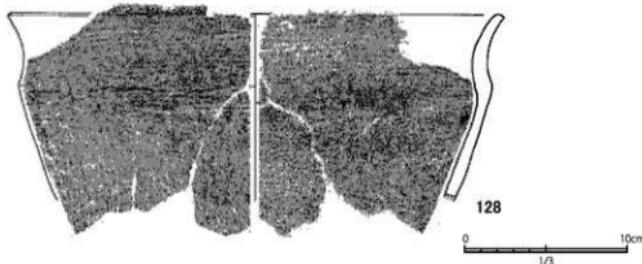
194～213は粗製浅鉢である。器形は直線的に外方へ開くものがほとんどであるが、口縁部が直立気味なもの（207-208）、内傾するもの（213）もある。また、口縁部の端部は丸くまとまるものが多いが、尖り気味なもの（200）、口縁部外面に粘土帶を貼り付けて肥厚させるもの（207-208）がある。さらに、器面調整の特徴としては、外面は粗いナデ・貝殻条痕文、内面はナデ調整を基本とするが、194は外面、195-201-203-205-206-212は内面にミガキ調整がなされる。198は口縁部に補修孔が1つある。206-209～211の胴部下半の外面には繊維圧痕を有し、209は布目状の圧痕がある。212は口縁部に刺突列点文が施される。213は口縁部外面に3条のうすい突帶がつく。



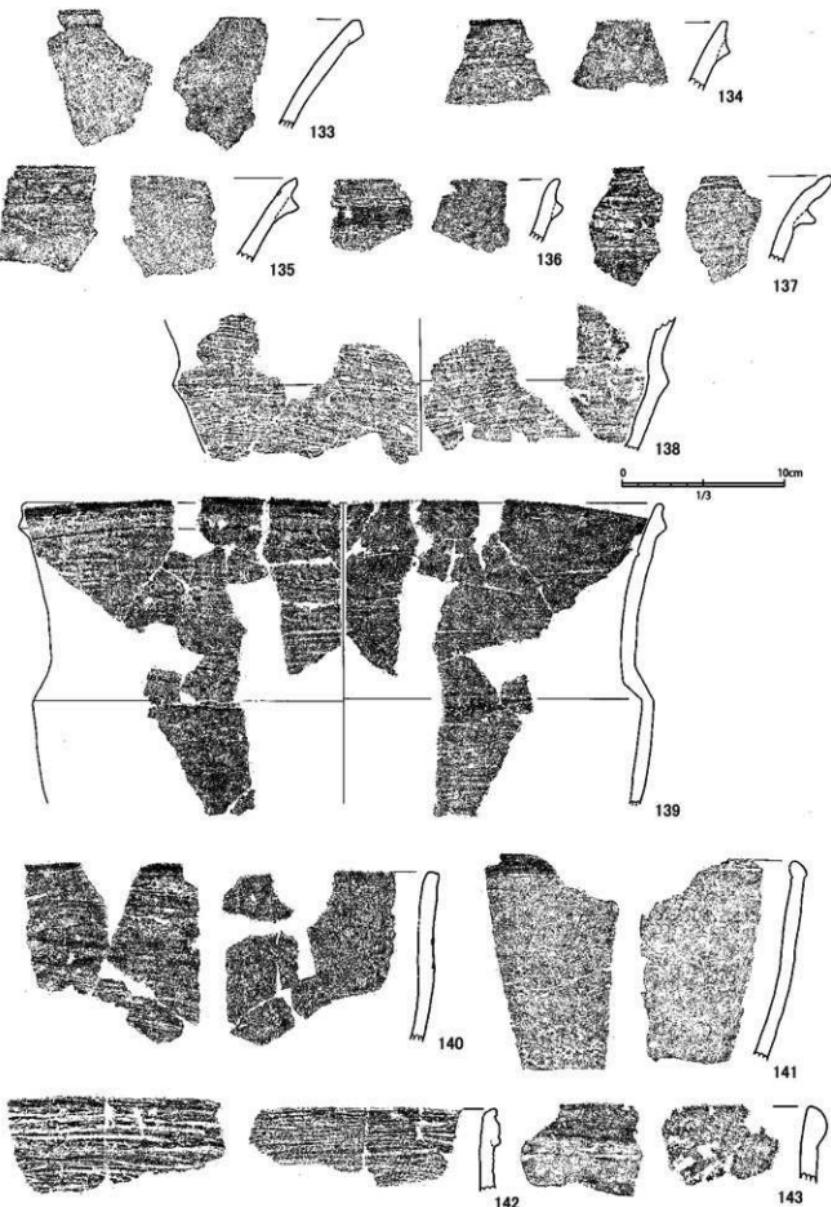
第42図 縄文時代後期土器実測図



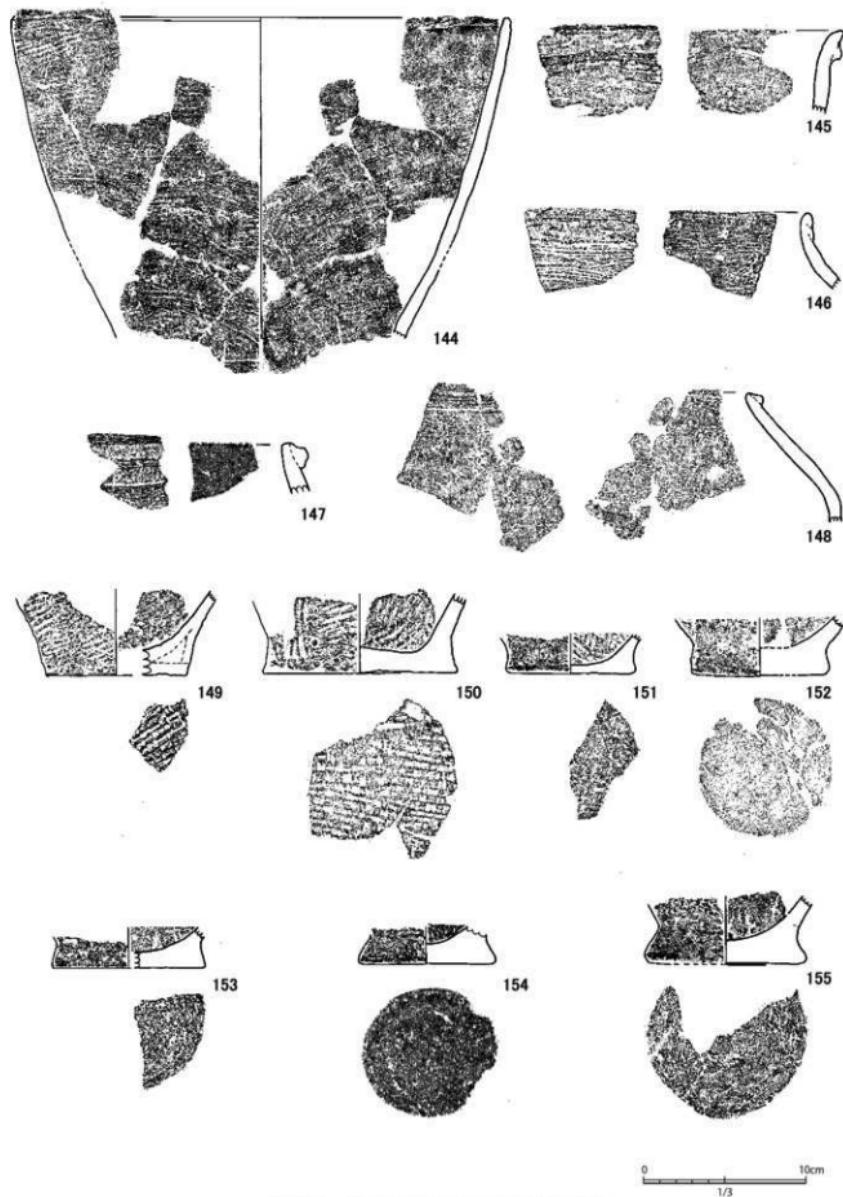
第43図 縄文時代晩期土器実測図（1）



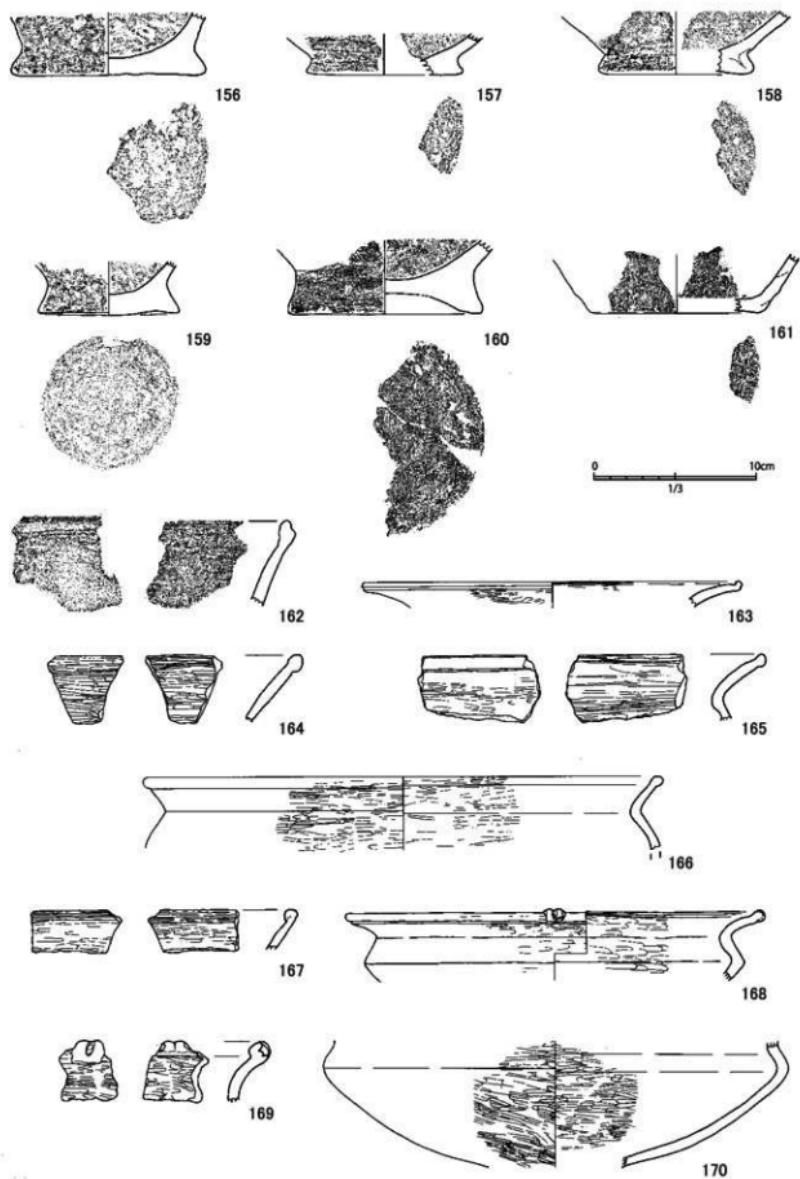
第44図 繩文時代晩期土器実測図（2）



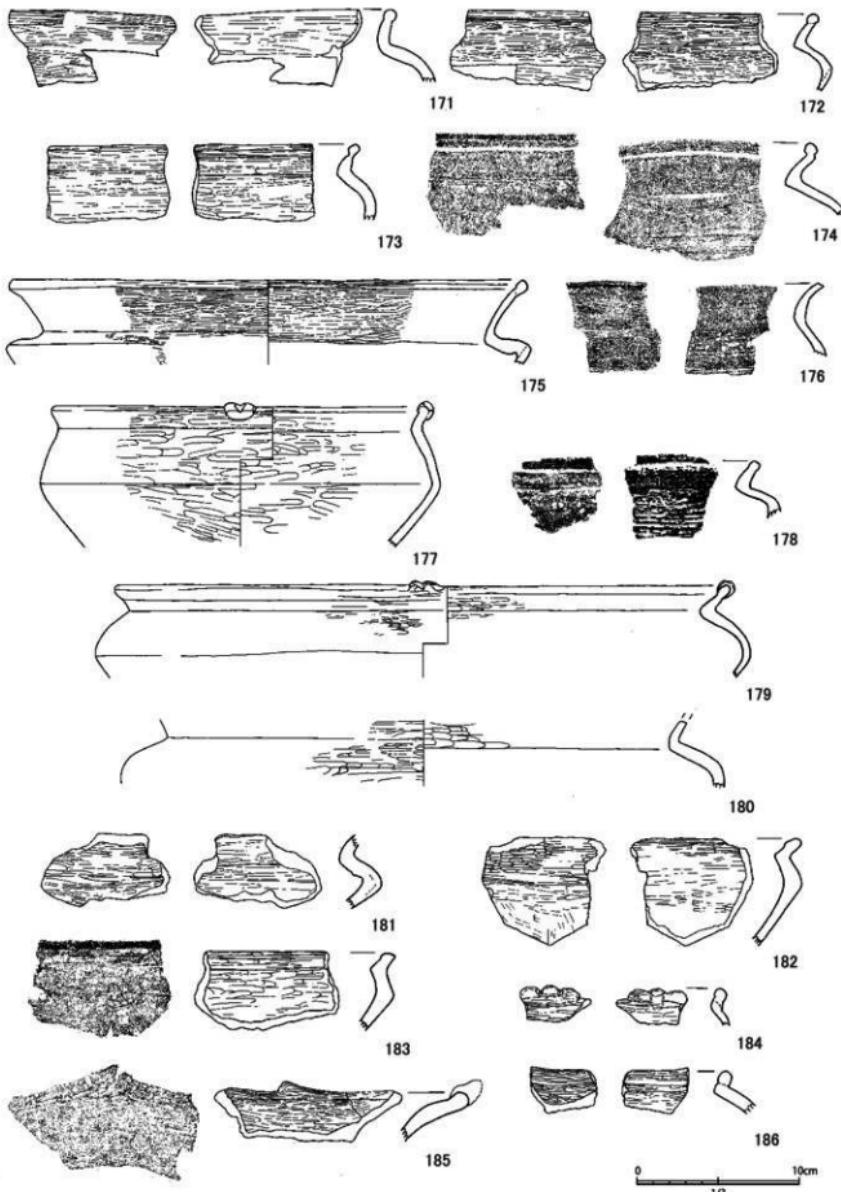
第45図 縄文時代晩期土器実測図（3）



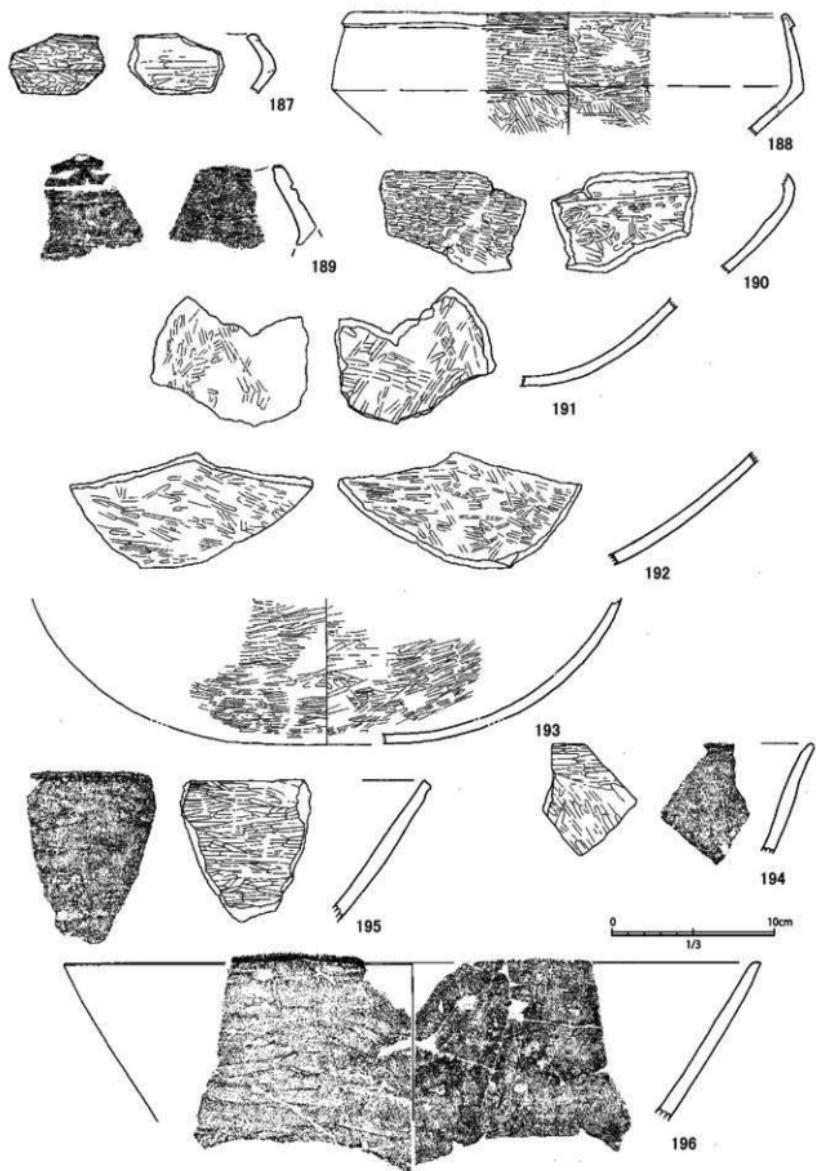
第46図 縄文時代晩期土器実測図（4）



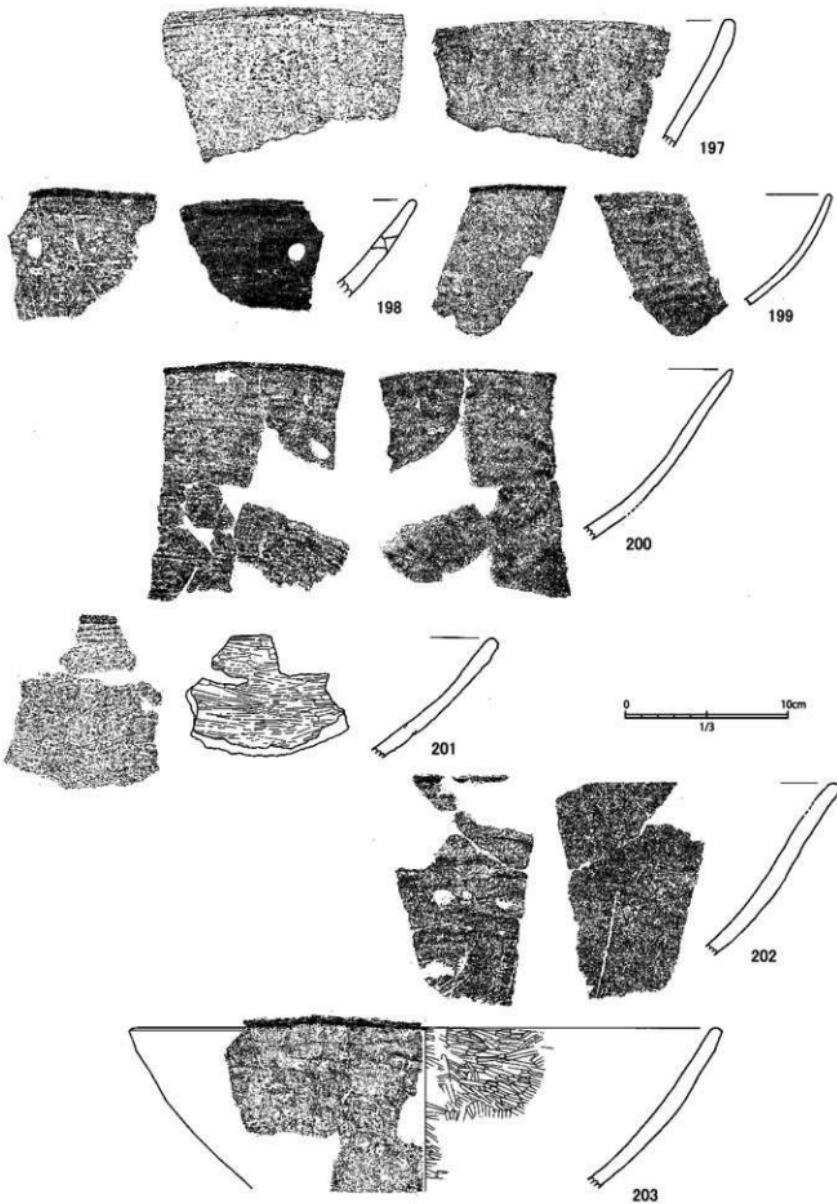
第47図 繩文時代晩期土器実測図（5）



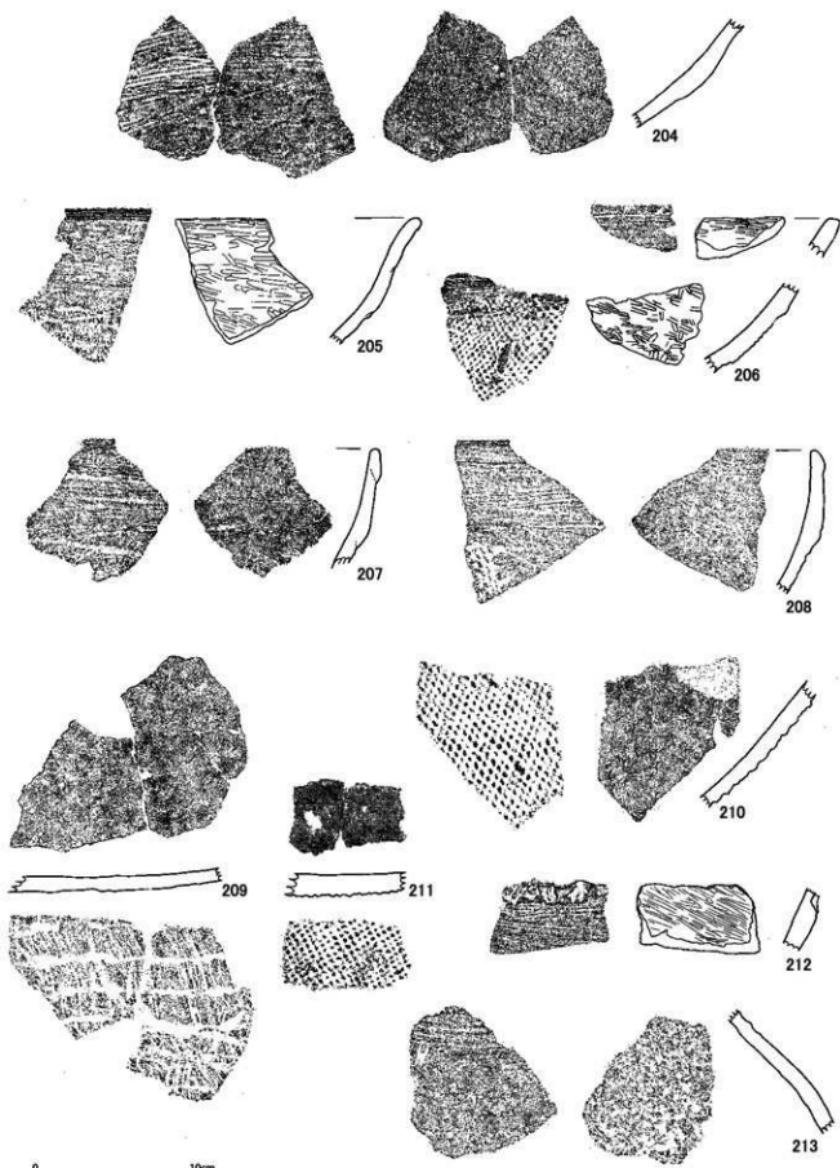
第48図 繩文時代晩期土器実測図（6）



第49図 繩文時代晩期土器実測図（7）



第50図 縄文時代晩期土器実測図（8）



第51図 繩文時代晩期土器実測図（9）

b) 繩文時代後期～晩期の石器（第52図～第55図）

ここでは、IV層出土の石器について図化掲載する。本来ならば縄文時代後期と晩期の石器に区分すべきであるが、形態上の類別が困難であるため一括して報告する。なお、IV層及び遺構内出土の縄文土器の大半は黒川式土器であるため、石器も縄文時代晩期に属するものが多いと考えられる。

214～221は石鏃である。214～221は平面形が二等辺三角形に近い形状で、特に214～219は側縁の先端部に近い位置に屈曲点をもつことから、将棋の駒のような形状を呈する。基部は、浅い抉りをもつもの（214・217-219-220）、平基（215-216-218）、V字状（221）がある。また、217は側縁の中ほどに突出部を作り出している。219は正面及び裏面の中央部分に研磨によって平坦面を作り出している局部磨製石鏃である。

なお、これら石鏃の石材は、チャート（214-216-218-220）、ガラス質安山岩（215-217）、緑色頁岩（219）、腰岳産黒曜石（221）である。

222～224はスクレーパーである。222はチャート製で、弧状の刃部をもつ削器である。223は頁岩製で、両側縁に円弧状を呈する2つの刃縁部を有する削器である。224はチャート製で、全体形が二等辺三角形状を呈し、両側縁に直線的な刃部をもつ。

225はチャート製の楔形石器である。平面形が台形状を呈し、上端と右側面の表裏面から調整を施している。

226～235は打製石斧である。226～229は基部と刃部が同じ幅で、両側縁が直線的ないし弧状となる短冊形の平面形を呈する。また、基部の端面は直線的なもの（226～228）、三角形状を呈するもの（229-230）がある。230は刃部が欠損しているが、本来的には短冊形と考えられる。

231～234は基部と刃部の境にくびれ、または刃部が大きく撥形に開く一群である。基部の端面は丸みを帯びている。235の平面形は短冊形に近いが、基部が丸みを帯びている。

なお、これら打製石斧の石材は、ホルンフェルス（226～228-230-231-233-234）、砂岩（229）、頁岩（232・235）である。

236～239は磨製石斧である。236は全体形が台形状を呈し、両側面に稜を作り断面は隅丸長方形となる。また、刃部には使用時の欠損とみられる剥離痕がある。237は刃部を欠損しているが、本来的には台形状を呈すると考えられる。238は断面が楕円形で、棒状を呈している。また、基部の一部が欠損しており、刃部に向かって細くなっている。239は断面形が扁平で両刃である。剥離による整形の後、研磨が行われたと考えられる。

なお、これら磨製石斧の石材は、閃綠岩（236）、ホルンフェルス（237～239）である。

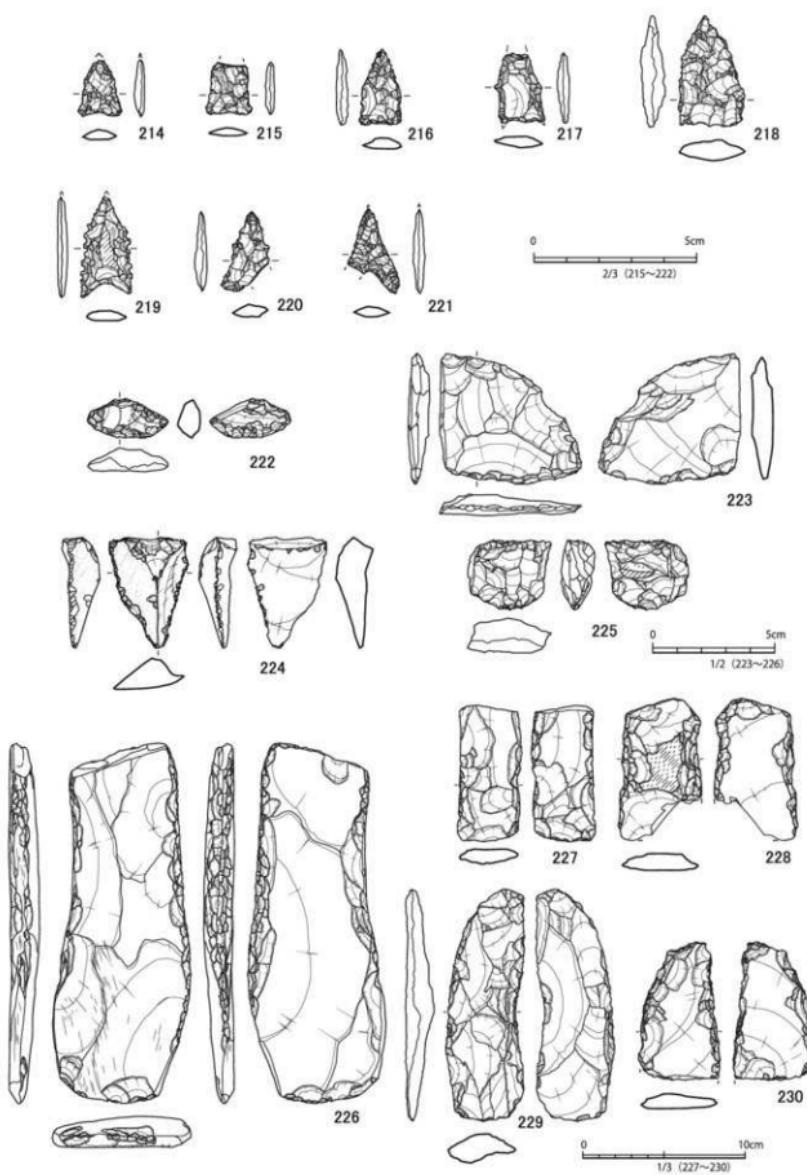
240は砂岩製の敲石である。側面部に集中的な敲打による器形変化が見られる。

241～252は磨敲石である。20点出土したうち12点を図化した。241-242は長軸長45mm程度の小砾の素材品である。どちらも片側一面のみに磨面が見られ、敲打痕が周縁をめぐる。243～245は平面形が三角形状もしくは縱長の円錐で、表裏面に磨面が見られる。243は側面部に集中的な敲打によって生じた剥離がみられ、244-245は敲打痕が周縁をめぐる。また、245の磨面には、僅かな敲打痕がみられる。246～252は一部が欠損している磨敲石で、周縁部全体に敲打痕がみられるもの（246-247-249-250-252）、周縁の一部に敲打痕がみられるもの（248-251）がある。

なお、これら磨敲石の石材は245-248が溶結凝灰岩製で、それ以外は全て砂岩製である。

253は、砂岩製の石皿である。使用面は楕円形で全体的に凹み、直線状の擦痕や潰打痕が部分的に残る。

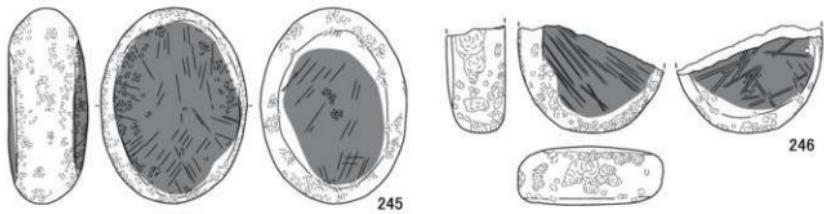
254は砂岩製の砥石である。正面及び上面には不定方向で直線状の擦痕が残る。砥石の下半分は大きく失われているが、本来は平面形が長方形の形状であったと考えられる。



第52図 縄文時代後期～晩期石器実測図（1）

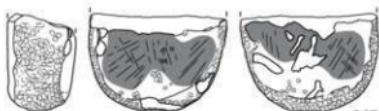


第53図 縄文時代後期～晩期石器実測図（2）



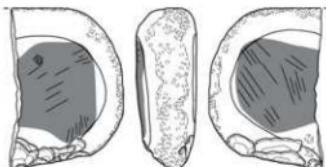
245

246



247

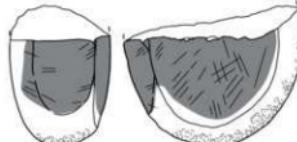
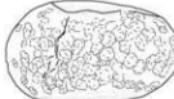
248



249



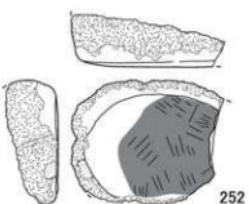
250



251



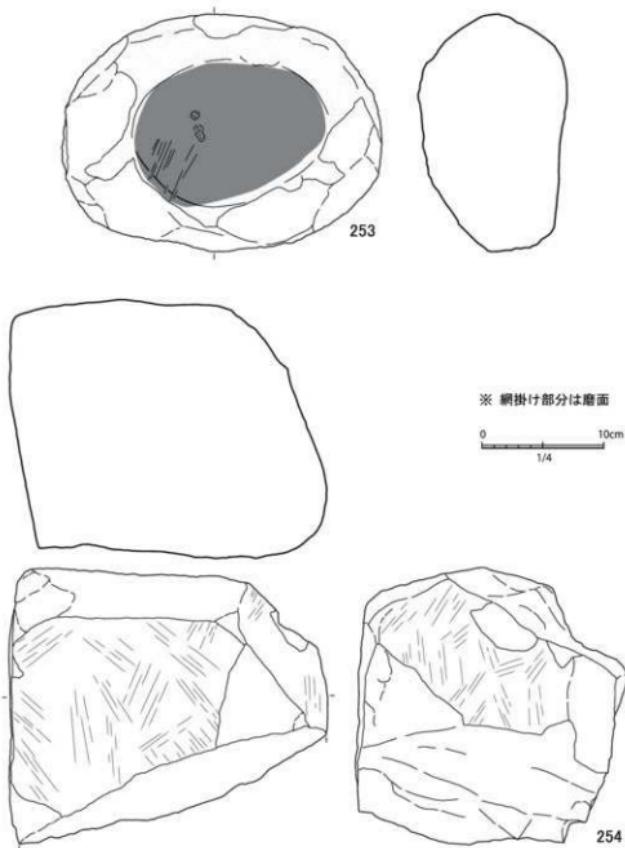
※ 網掛け部分は磨面



252

0
1/3 (245~252)
10cm

第54図 繩文時代後期～晩期石器実測図（3）



第55図 繩文時代後期～晩期石器実測図（4）

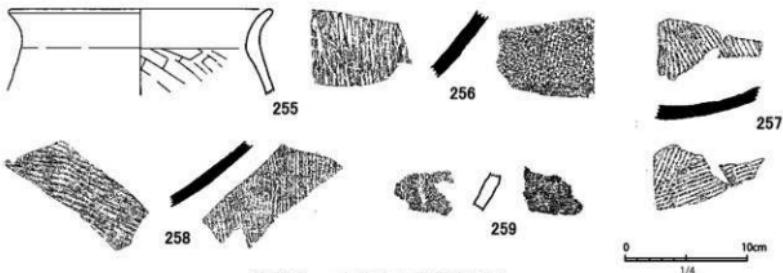
第5節 古代の遺物

1 概要

本調査区においては、古代の遺構は検出されなかったが、土師器や須恵器などがわずかに出土した。

(1) 土器類（第56図）

255は、土師器甕の口縁部で、内面は丁寧なヘラケズリ削りが施される。256～258は須恵器甕片である。256の外面は格子目タタキ、257・258の外面は平行タタキ、256～258の内面は平行当て具痕が残る。259は、製塙土器（布痕土器）の鉢の、胴部片である。内面には布目および織状の圧痕が残る。胎土には金雲母が多量に含む。



第56図 古代の土器類実測図

第6節 中世の遺構

1 概要

中世の遺構としては、IV層上面にて検出された道路状遺構10条である。これらの道路状遺構は、調査区南側の谷際から北側の傾斜面にかけて確認され、等高線に対して直交する。遺構に伴う遺物は皆無であるが、検出された層位と遺構埋土に含まれる火山灰（桜島文明軽石）から、中世期に掘削されたものと判断される。

なお、表土中より中世の土師器の杯または、皿がわずかに出土したのみで、小破片であるために図化および編年的位置づけは困難である。

(1) 道路状遺構（第57図・第58図）

道路状遺構は、調査区南側の谷地形から調査区中央の丘陵尾根側に向かって延伸する。北側部分は、畑地造成等による削平により残存状況が悪い。なお遺構検出面は基本的にIV層であるが、南側部分については、斜面地による堆積層の流出により、IX層となっている。

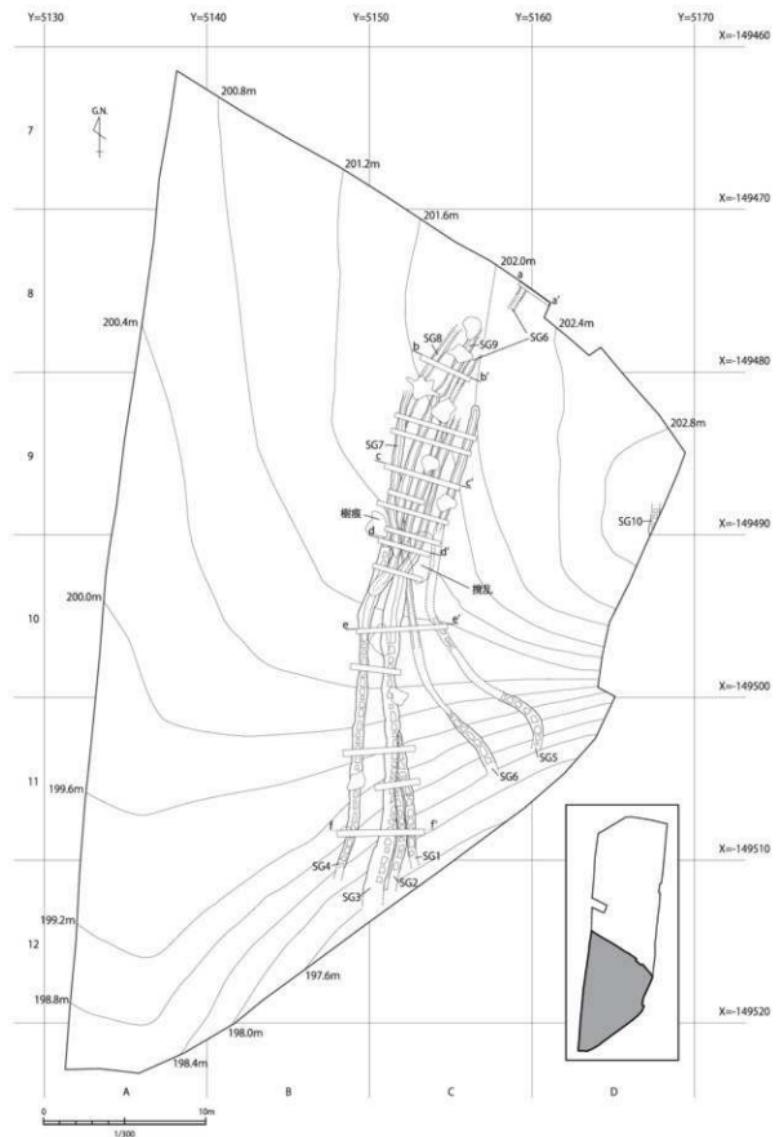
道路状遺構は大きく3つに大別され、調査区中央の谷下から南北に延びるもの（SG1～4）、調査区南東の谷下から北西に延びるもの（SG5・6）、調査区東側面にわずかに残るもの（SG10）がある。また、SG1～9については、急斜面から緩斜面への地形変換部（第57図d-d' / e-e'）にて走向を北北東へ変える。これら道路状遺構は、溝状に掘り込まれた形状で、その底面は硬化しているが、南側斜面地部分においては波板状凹凸面（図版12）が形成されている。また、SG1～9は、互いに隣接し、かつ複雑に切り合っているため、掘削等を繰り返しながら使用していたものと考えられる。また、SG2・3・4・6・7は、遺構内埋土の堆積状況から桜島文明軽石（SZ-3、AD1471）の降下によって埋没していることが認められた。

1号道路状遺構（第57図・第58図）

SG1の西側にはSG2が近接しており、SG3とはC11グリッド付近で切られる。SG1の現存長約7.5m、幅約0.54m、検出面からの深さは約0.18mで、断面形は逆台形状を呈する。底面は幅約0.29mで硬化し、急勾配の斜面地部分にかけては、直径約0.18～0.45mの半円形状の波板状凹凸面が連続している。

2号道路状遺構（第57図・第58図）

SG2はSG1とSG3に挟まれた位置にあり、SG3とはC11グリッド付近で切られる。SG1との前後関係は平面的には不明であるが、SG1とSG2の埋土はお互いに近似している。SG2の現存長約7.6m、幅約0.54m、検出面からの深さは0.16mで、断面形は半球状を呈する。底面は直径約0.15～0.29mの半円形状の波板状凹凸面が連続している。



第57図 道路状遺構分布図

3号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG3 は SG1・SG2 を C11 グリッド付近で、SG6 を C10 グリッド付近で切る。現存長約 27 m、幅約 0.5～1.2 m、C9 グリッド付近で後世の削平により消失している。検出面からの深さは最大で 0.36 m である。断面形は、南側斜面では V 字状、中央付近で逆台形状を呈し、北側では、底面を残すのみである。底面は幅約 0.2～0.27 m で硬化しており、急勾配の南側斜面地においては、直径約 0.21～0.36 m の半円形状の波板状凹凸面が連続し、中央付近の緩斜面部分からは平坦面となる。

4号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG4 は、道路状遺構群 (SG 1～9) の西端に位置し、B10 グリッド付近で SG7 に切られる。現存長約 21 m、幅約 0.65 m、検出面からの深さは約 0.16 m である。断面形は逆台形状を呈し、その底面は幅約 0.18～0.44 m で硬化しており、ほぼ全体に直径約 0.21～0.4 m の半円形状の波板状凹凸面が連続している。

5号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG5 は、道路状遺構群 (SG 1～9) の東端に位置する。後世の削平により部分的な遺存状況であるが、現存長約 25 m（推定）、幅約 0.6 m で、直線的な SG1～SG4・SG7～9 に比べて、S 字状の走向である。それは地形に沿った結果であると考えられる。検出面からの深さは約 0.12 m、断面形は、逆台形型を呈し、底面は幅約 0.27～0.48 m で硬化しており、急勾配の南側斜面地においては、直径約 0.26～0.45 m の半円形状の波板状凹凸面が連続し、中央付近の緩斜面部分からは平坦面となる。

6号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG6 は、SG5 の西側に位置し、C10 グリッド付近で SG7 を切り、SG3 に切られる。後世の削平により部分的な遺存状況であるが、現存長約 25 m（推定）、幅約 0.6 m で、地形に沿って大きな円弧状となる。断面形は、基本的に逆台形状で、削平によって底面のみを残す部分が多い。検出面からの深さは最大で約 0.12 m である。底面は幅約 0.24～0.48 m で硬化しており、急勾配の南側斜面地においては、直径約 0.14～0.46 m の半円形状の波板状凹凸面が連続し、中央付近の緩斜面部分からは平坦面となる。

7号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG7 は、B10 グリッド付近で SG4 を切り、SG6 に切られる。SG7 と SG4 の平面的な位置関係から、SG7 は SG4 を再掘削した遺構の可能性がある。全長約 12 m、幅約 0.6 m、検出面からの深さは最大で約 0.18 m、断面形は逆台形状を呈し、その底面は幅約 0.24～0.47 m で硬化している。

8号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

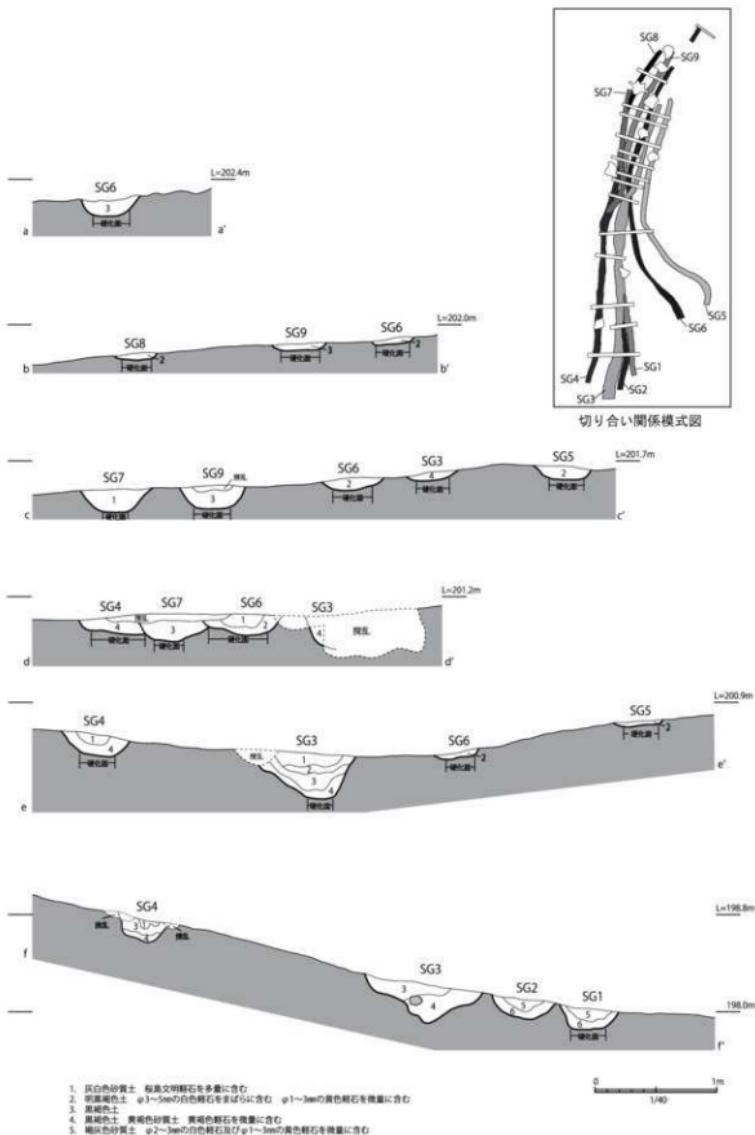
SG8 は C9 グリッド付近で SG7 に切られる。後世の削平により部分的な遺存状況であるが、現存長約 6 m、幅約 0.6 m、幅約 0.32～0.36 m で硬化した底面部分のみを残す。

9号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG9 は C10 グリッド付近で SG7 に切られる。現存長約 12 m、幅約 0.6 m、検出面からの深さは最大約 0.2 m で、断面形は逆台形状を呈し、その底面は幅約 0.32～0.49 m で硬化する。北側は削平により硬化した底面部分のみを残す。

10号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG10 は調査区東端の壁面付近にて検出された。道路状遺構群 (SG1～SG9) とは大きく離れた位置にある。部分的な検出であるので、全長等は不明であるが、平面には直径約 0.33 m の半円形状の波板状凹凸面が連続している。



第58図 道路状遺構土層断面実測図

第1表 土器觀察表（1）

第2表 土器觀察表 (2)

成数 番号	種別	形態	区 分 基 準	出土位置 Gr. - 部 - 遺構	手法・調査・文書ほか		色調	土の特徴	備考
					平面	内面			
41	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B1	SG34	丁寧なミガキ 丁寧なミガキ	褐灰 2.5YR 5/2	褐灰 2.5YR 3/1	黄褐色光沢多・透明光沢多(微細) 白色光沢多(微細)
42	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B1	SG34	丁寧なミガキ 丁寧なミガキ	褐灰 2.5YR 5/2	褐灰 2.5YR 2/1	黄褐色光沢多・透明光沢多(微細) 白色光沢多(微細)
43	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG40	三重形状の実施 萬化が美しい	ナデ	にじる・薄緑 10YR 3/4	白地白 3.5YR 3/2
44	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG40	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 6/6	透明光沢光沢少(2mm以下) 黑色光沢・白色光沢有(1mm以下)
45	純文土器	深鉢	底板	B1	SG40	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 6/6	透明光沢光沢少(2mm以下) 黑色光沢・白色光沢有(1mm以下)
46	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B1	SG40	ナデ	ミガキ	にじる・薄緑 10YR 3/4	透明光沢光沢少・白色光沢少(2mm以下)
47	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 6/6	白色光沢多・薄黄色光沢少(1mm以下) 白色光沢少・透明光沢少(1mm以下)
48	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 6/6	白色光沢多・白色光沢多(1mm以下) 白色光沢少・透明光沢少(1mm以下)
49	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 6/6	白色光沢多・薄黄色光沢少(1mm以下) 白色光沢少・透明光沢少(1mm以下)
50	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	丁寧なナデ 粗いナデ	粗いナデ	白地 10YR 4/2	白地 10YR 3/1
51	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 6/6	白色光沢多・褐色光沢多(3mm以下) 白色光沢少・褐色光沢少(1mm以下)
52	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ナデ 貼付変形	ナデ	白地 7.5YR 7/4	白色光沢少(1mm以下) 白色光沢少(6mm以下)・褐色光沢多(3mm以下)
53	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ナデ 貼付変形	ナデ	白地 7.5YR 6/6	白色光沢少・褐色光沢少(1mm以下) 透明光沢光沢有(2mm以下)
54	純文土器	深鉢	底板	B1	SG41	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 5/4	白色光沢多・透明光沢光沢少(微細) 白色光沢少(微細)
55	純文土器	深鉢	底板	B1	SG41	ナデ	ナデ	白地 7.5YR 5/4	にじる・薄緑 10YR 3/4
56	純文土器	深鉢	底板 化粧	B1	SG41	ナデ(風化著しい)	工具ナデ	にじる・薄緑 10YR 3/4	白色光沢少(1mm以下) 白色光沢少(6mm以下)・褐色光沢多(3mm以下) 白色光沢少・褐色光沢有(3mm以下)
57	純文土器	深鉢	底板 化粧	B1	SG41	工具ナデ	工具ナデ	白地 7.5YR 6/6	白色光沢少(1mm以下) 褐色光沢有(3mm以下) 褐色光沢少・白色光沢有(3mm以下) 褐色光沢少・白色光沢少(1mm以下) 褐色光沢少・白色光沢少(1mm以下) 褐色光沢少・白色光沢少(1mm以下)
58	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	無點目炎突火 アラカルト 粗いナデ	ナデ	白地 7.5YR 5/5	白色光沢少・褐色光沢少(3mm以下) 褐色光沢少(3mm以下)・褐色光沢多(1mm以下) 褐色光沢少・白色光沢少(1mm以下)
59	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ミガキ	ミガキ	白地 2.5YR 7/3	白色光沢少(1mm以下) 褐色光沢少(微細)
60	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ミガキ	ミガキ	黒地 2.5YR 4/2	白地 10YR 3/4
61	純文土器	洗鉢	底板 化粧	B1	SG41	ミガキ	ミガキ	白地 7.5YR 7/4	透明光沢光沢少(1mm以下) 透明光沢光沢少(2mm以下)
62	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	ナデ 貼付変形	工具ナデ	白地 7.5YR 7/4	白色光沢少(3mm以下) 褐色光沢少(3mm以下)・褐色光沢多(2mm以下)
63	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B1	SG41	粗いナデ	粗いナデ	白地 10YR 8/2	褐色光沢少(1mm以下) 褐色光沢少(1mm以下)・褐色光沢多(1mm以下) 褐色光沢少(1mm以下)・褐色光沢多(1mm以下) 褐色光沢少(1mm以下)・褐色光沢多(1mm以下)
64	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B1	SG41	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ 洗鉢火	白地 7.5YR 5/5	褐色光沢少(2mm以下) 褐色光沢少(2mm以下)・褐色光沢多(1mm以下) 褐色光沢少(2mm以下)・褐色光沢多(1mm以下)
65	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B2	SG42	ナデ	ナデ(風化著しい)	白地 10YR 4/1	白色光沢少(1mm以下) 褐色光沢少(1mm以下)・褐色光沢多(1mm以下) 褐色光沢少(1mm以下)・褐色光沢多(1mm以下)
66	純文土器	深鉢	層板	B2	SG55	ナデ	黄褐色赤味	白地 10YR 4/1	白色光沢少(2mm以下) 褐色光沢少(2mm以下)・褐色光沢多(1mm以下)
67	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B2	SG55	ミガキ 洗鉢火	ミガキ 洗鉢火	白地 7.5YR 5/4	白地 7.5YR 4/2
68	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B2	SG57	ミガキ 洗鉢火	ミガキ 洗鉢火	白地 7.5YR 6/6	白地 7.5YR 6/4
69	純文土器	洗鉢	層板	B2	SG57	ミガキ	ミガキ	白地 10YR 5/5	白色光沢少(1mm以下) 透明光沢光沢少(2mm以下)
70	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B2	SG59	ミガキ 洗鉢火	ミガキ 洗鉢火	白地 2.5YR 5/1	白地 2.5YR 4/1
71	純文土器	深鉢	口縁一 層板	B2	SG59	其他赤味火	其他赤味火	白地 2.5YR 5/1 2.5YR 6/3 2.5YR 6/1	白地 2.5YR 4/1 2.5YR 4/3 2.5YR 4/1
72	純文土器	洗鉢	口縁一 層板	B2	SG60	白地赤 白地黄赤 のちナデ	白地赤 白地黄赤 のちナデ	白地 2.5YR 5/1 2.5YR 6/2 2.5YR 6/1	白色光沢少(2mm以下) 透明光沢光沢少(1mm以下) 光沢少(微細)
73	純文土器	深鉢	底板	E2	SG61	ナデ	ナデ	白地 10YR 6/4	白色光沢少(2mm以下) 褐色光沢少(2mm以下)・褐色光沢多(1mm以下)
74	純文土器	深鉢	口縁一 層板	E2	SG61	ナデ	工具ナデ	白地 10YR 7/4	白地 2.5YR 7/1
75	純文土器	深鉢	口縁一 層板	E2	SG61	ミガキ 貼付変形 注文書 風化著しい	ミガキ 貼付変形 注文書 風化著しい	白地 7.5YR 5/6	褐色光沢少・褐色光沢多(2mm以下) 褐色光沢少・褐色光沢多(1mm以下) 褐色光沢少・透明光沢光沢少(1mm以下)

第3表 土器觀察表（3）

成数 番号	種別	器種	形状	出土位置 区 分 ・層 ・遺 跡	手法・調査・文様ほか		色調		地土の特徴	備考		
							表面					
					外表面	内表面	外表面	内表面				
56	縄文土器	湯鉢	箱型	E2	S061	土ガキ 粘付焼成文 (繩エクタイ状)	土ガキ	にじる黄褐色 10YR 6/2	黒 10YR 2/1	灰白色粒少・ 少・透視光沢少 (1mm以下)	内面にスス付 内面に炭化物付	
77	縄文土器	湯鉢	箱型	E2	S065	ナデ	ナデ	にじる黄褐色 10YR 7/3	2.5YR 3/2	墨褐色粒有 (5mm以下) 透視光沢有・炭化物付少・ 光沢粒少・光沢粒多 (2mm以下)	肯定底径 5.5cm 肯定底径 1.8cm 底径 2.2cm 器高 7.1cm 底端部破損・ 破損全体に久火付	
78	縄文土器	湯鉢	箱型・ 箱型	E2	S066	ミガキ 黒化が著しい	ミガキ 黒化が著しい	黒 3Y 2/1	3Y 2/1	底褐色粒有 (7mm以下) 透視光沢有・黑色粒有 (無限) 赤褐色粒有・透視光沢粒有 (無限)		
79	縄文土器	湯鉢	箱型・ 箱型	E2	S065	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にじる黄褐色 10YR 6/4	3Y 2/1	赤褐色粒少・ 灰白色粒少・ 透視光沢粒有 (1mm以下)	外間にスス付	
80	縄文土器	湯鉢	箱型	E2	S065	ミガキ	ミガキ	透視光沢 10YR 5/2	2.5Y 3/1	灰白色粒少・黑褐色粒少 (無限)		
81	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	E2	S065	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にじる黄褐色 10YR 5/4	10YR 5/2	灰白色粒少 (3mm以下) 透視光沢粒少 (1mm以下) 透視光沢粒少 (無限)	口径 10.8cm 最高最径 11.7cm 底径 2.2cm 器高 7.1cm 底端部破損・ 破損全体に久火付	
82	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	E2	S065	指痕有 黒褐色粒少 のちナガキ	指痕有 黒褐色粒少 のちナガキ	褐 7.5YR 6/6 透視光 2.5YR 3/2	7.5YR 4/1	灰白色粒少 (2mm以下) 透視光沢粒少 (無限)	外間にスス付	
83	縄文土器	深鉢	口縁一 箱型	E2	S066	貝和田縫 のちナガキ	貝和田縫 のちナガキ	褐 7.5YR 7/6	10YR 4/2	底褐色粒少・ 黑色粒有 (4mm以下) 透視光沢粒多 (2mm以下)	口縫部は貼付口縫	
84	縄文土器	湯鉢	箱型	E2	S066	ナデ	ナデ	褐 7.5Y 6/6	7.5Y 6/6	灰白色粒少 (5mm以下) 白色粒少・角石少 (2mm以下) 褐色粒有 (1mm以下)・ 光沢粒少 (無限)	外間にスス付	
85	縄文土器	湯鉢	箱型	E2	S066	ナデ	ナデ	褐 7.5YR 6/6	2.5YR 6/3	底褐色粒少 (3mm以下) 白色粒少多・透視光沢粒少 (無限) 白色粒多 (無限)	内面にスス付	
86	縄文土器	湯鉢	箱型	E2	S066	ナデ	ナデ	褐 7.5YR 6/6	2.5YR 4/1	底褐色粒少 (2mm以下) 白色粒少多・透視光沢粒少 (2mm以下) 白色粒多 (無限)	外間にスス付 外間に無限	
87	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	E2	S066	難いナデ	ナデ	褐 7.5YR 6/6	2.5Y 7/4	底褐色粒少 (2mm以下) 白色粒有・透視光沢粒有 (2mm以下) 褐色粒有・経緯柄色粒少・黑色粒少 (2mm以下)	口縫部に黒斑	
88	縄文土器	湯鉢	底盤	E2	S067	糊ナデ 黒化が著しい	ナデ 黒化が著しい	にじる黒褐色 10YR 6/4	2.5Y 6/1	褐色粒多・ にじる赤褐色粒多 (2mm以下)	底径 8.4cm	
89	縄文土器	湯鉢	口縁形	E2	S067	ミガキ	ミガキ	にじる黒褐色 10YR 5/1	2.5Y 6/2	底褐色粒少 (2mm以下) 白色粒多・透視光沢粒多 (2mm以下)	外間にスス付	
90	縄文土器	湯鉢	口縁形	E2	S067	ミガキ	ミガキ	にじる黒褐色 10YR 5/1	2.5Y 6/2	底褐色粒少 (2mm以下) 白色粒多 (無限)	外間にスス付 外間に無限	
91	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	E2	S066	貝和田縫	土ガキ	にじる黒褐色 10YR 5/4	2.5Y 6/2	底褐色粒少 (2mm以下) 白色粒多 (無限)	外間にスス付	
92	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	E2	S065	貝和田縫文	土ガキ	透視光 10YR 3/1	10YR 3/1	底褐色粒少 (2mm以下) 白色粒多 (無限)	外間にスス付	
93	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	E2	B46- N7層	貝和田縫文 の吹き文	ナデ	にじる黒褐色 10YR 5/3	7.5Y 4/6	透視光沢粒少・ 灰白粒少 (無限)		
94	縄文土器	湯鉢	口縁形	A1	A10G- N7層	貝和田縫文 吹き文	貝和田縫文のナデ	安堵	7.5Y 4/2	透視光沢粒少 (5mm以下) 底褐色粒少・ 黑色粒有 (1mm以下) 透視光沢粒少 (無限)		
95	縄文土器	湯鉢	口縁形	B1	C3G- N7層	吹き文 吹き文	工具ナデ	底褐色	7.5Y 4/2	底褐色粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)	外間にスス付	
96	縄文土器	湯鉢	口縁形	B1	02G- N7層	吹き文 吹き文	ナデ	にじる黒褐色 10YR 5/4	2.5Y 4/1	底褐色粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)		
97	縄文土器	湯鉢	口縁形	B2	B46- N7層	刺突文 沈抜文 吹き文	ナデ	反黄褐色 10YR 5/3	10YR 5/3	底褐色粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)		
98	縄文土器	湯鉢	口縁形	B2	B46- N7層	貝和田縫文吹き文	貝和田縫文	底褐色	10YR 7/4	底褐色粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)		
99	縄文土器	湯鉢	口縁形	B1	E1G- N7層	吹き文 吹き文	ナデ	底褐色	2.5Y 1/6	底褐色粒少 (4mm以下)		
100	縄文土器	湯鉢	口縁形	B2	B5G- N7層	05吹文	ナデ	底褐色	2.5Y 5/6	底褐色粒少 (2mm以下) 透視光沢粒少 (無限)		
101	縄文土器	湯鉢	口縁形	B2	B5G- N7層	05吹文	貝和田縫文	底褐色	10YR 5/4	底褐色粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)	内面に黒斑	
102	縄文土器	湯鉢	口縁形	B2	C5G- N7層	05吹文 貝和田縫文	貝和田縫文	褐	5YR 6/6	底褐色粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)		
103	縄文土器	湯鉢	口縁形	C	B46- N7層	05吹文	貝和田縫文	褐	7.5Y 5/6	底褐色粒少・ 底褐色粒少 (2mm以下) 透視光沢粒少 (2mm以下)		
104	縄文土器	湯鉢	口縁形	B2	B46- N7層	刺目 (口縁部) 吹き文 貝和田縫文	ナデ	12.5Y 5/4 7.5Y 5/4	12.5Y 5/4 10YR 5/4	底褐色粒少 (3mm以下) 底褐色粒少 (3mm以下)		
105	縄文土器	湯鉢	口縁形	B2	B46- N7層	貝和田縫文のナデ 吹き文	貝和田縫文	褐 5YR 6/6	12.5Y 6/4 12.5Y 6/4 10YR 6/3	底褐色粒少 (2mm以下) 透視光沢粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)	外間にスス付	
106	縄文土器	湯鉢	口縁形	B1	C3G- N7層	ミガキ	黒化が著しく不規	底褐色	10YR 6/4 10YR 5/4	底褐色粒少 (3mm以下) 透視光沢粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)		
107	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	A1	N7層	ナデ	ナデ	底褐色	2.5Y 5/2	底褐色粒少・ 透視光沢粒少 (無限) 底褐色粒少・ 底褐色粒少 (無限)	外間にスス付	
108	縄文土器	湯鉢	口縁一 箱型	A1	911G- N7層	口縫付吹き文 吹き文	細いミガキ	にじる黒褐色 7.5Y 6/4	10YR 5/2	底褐色粒少 (2mm以下) 透視光沢粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)	外間に全体に黒斑	
109	縄文土器	湯鉢	口縁形	B1	C1G- N7層	吹き文吹き文	ナデ	にじる黒褐色 7.5Y 6/4	2.5Y 5/4	底褐色粒少 (7mm以下) 透視光沢粒少 (2mm以下)		
110	縄文土器	湯鉢	口縁形	B1	C1G- N7層	吹き文吹き文 ナデのミガキ	ナデのミガキ	褐	2.5Y 4/3	底褐色粒少 (2mm以下) 透視光沢粒少 (2mm以下) 底褐色粒少 (2mm以下)		

第4表 土器觀察表 (4)

底面 番号	種類	基盤	形状	区 分 基 準 選 択	出土位置		手法・調査・文書記入		色調	土の特徴	備考	
					外面	内面	外側	内側				
111	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A1	A11G- H面	口縁部に波線文 E.手刀	ナゲ 高化灰味	褐灰 10YR 5/1 黒 10YR 2/1	にじる・黒 7.5YR 6/4 7.5YR 7/1	赤褐色斑点少・(5mm以下) 黑色颗粒多・(3mm以下) 暗灰色粒少・淡黄色颗粒少・(2mm以下) 透明光沢粒多・(2mm以下)・黑色光沢粒有・(1mm以下)	外面上黒	
112	縄文土器	深鉢	網目	B1	C1G- H面	上手舟 波線文	ナゲ	赤灰 5YR 4/8	7.5YR 6/6	灰白色粒少・透視光沢少・(2mm以下)	外面上各色點付有	
113	縄文土器	深鉢	網目	B1	C1G- H面	斜削部波線文 安美手 E.手刀	ナゲ (風化が著し UV)	褐灰 10YR 2/1 黒 5YR 6/6	7.5YR 2/1	淡黃褐色粒有・(4mm以下) 赤褐色粒少・(2mm以下) 暗灰色粒少・黑色光沢粒多・(1mm以下)	外面上の波線文 にスカ付有	
114	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	C4G- H面	上手舟 E.手刀	玉手舟	褐灰 2.5Y 3/4	灰 5YR 4/2	黄褐色光沢粒有・(2mm以下) 黑色光沢粒有・(1mm以下) 黑色光沢少・(1mm以下)・灰白色有・(微細)	肯定底面 33 cm 複合口縁	
115	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B1	C1G- H面	波線文 ナゲ	波線文 ナゲ	褐灰 10YR 4/1	にじる・黒 10YR 5/1 10YR 2/1	にじる・褐色 暗褐色・黑色光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒多・透視光沢多・(1mm以下)		
116	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B1	H面	無いナゲ	無いナゲ	褐 7.5YR 6/6	にじる・黒 7.5YR 4/1	透視光沢粒多・明黄色颗粒多・(2mm以下) 灰白色颗粒多・(2mm以下)	外面上スカ付有	
117	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B1	C1G- H面	ナゲ	ナゲ	褐灰 7.5YR 4/1	にじる・黒 7.5YR 5/1 10YR 4/1	黑色光沢多・透視光沢多・(微細) 淡黄色颗粒多・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)		
118	縄文土器	浅鉢	口縁一 筋	B1	C3G- H面	ナゲ 風化の波線文	ナゲ	にじる・褐色 10YR 6/4	褐灰 10YR 6/4	暗褐色光沢多・(4mm以下) 黑色颗粒少・(2mm以下)		
119	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B1	H面	ナゲ	ナゲ	7.5YR 6/6	にじる・黒 10YR 1/2	黑色光沢多・(2mm以下) 暗褐色光沢少・(1mm以下) 黑色颗粒多・透視光沢少・(1mm以下)	外面上の波線文 にスカ付有	
120	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	C	C1G- H面	上手舟 高化灰味	玉手舟 高化灰味	褐 7.5Y 6/6 7.5Y 4/1	にじる・黒 7.5Y 6/6 10YR 6/4	灰白色光沢有・(7mm以下)・明黄色颗粒多・(4mm以下) 黑色光沢少・(1mm以下) 黑色光沢有・(1mm以下)・灰白色有・(1mm以下) 灰白色少・(微細)		
121	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B1	C4G- H面	波線口縁 ナゲ	ナゲ	灰 10YR 2/2	黄褐色光沢有・(4mm以下)・褐色光沢少・(3mm以下) 透視光沢少・(2mm以下)	外面上全体にスカ付有 内面上に黒斑		
122	縄文土器	浅鉢	口縁一 筋	B2	H面	深波線口縁 ナゲ	ナゲ	褐 10YR 4/4	白灰色颗粒 (2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下) 灰白色少・(微細)	外面上スカ付有 内面上に黒斑		
123	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	D4G- H面	波線口縫 ナゲ	ナゲ	褐 7.5Y 6/6 にじる・黒 10YR 5/4	にじる・黒 10YR 5/4	灰白色光沢有・(4mm以下)・褐色光沢少・(3mm以下) 黑色颗粒少・(2mm以下)	内面上に黒斑	
124	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A1	A11G- H面	透視口縫 波線文	ナゲ	褐 10YR 4/4	にじる・黒 10YR 4/4	透視光沢光沢有・(2mm以下)		
125	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	H面	工具ナゲ	工具ナゲ	褐灰 5YR 5/6	7.5Y 6/6 7.5Y 4/2	灰 10YR 4/4	灰褐色光沢少・(2mm以下) 白色颗粒多・黑色颗粒多・(1mm以下) 黑色颗粒少・透視光沢少・(1mm以下)	内面上に黒斑 外面上にスカ付有
126	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A2	A9G- H面	貴賤条文	貴賤条文	にじる・黒 7.5Y 6/6	にじる・黒 10YR 7/2	にじる・黒 10YR 7/2	黑色颗粒少・(2mm以下) 黑色颗粒多・透視光沢少・(1mm以下)	口縫部 外面上にスカ付有
127	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A1	A11G- H面	貴賤条文 のち無いナゲ	貴賤条文 のち無いナゲ	褐 10YR 5/3	にじる・黒 10YR 5/3	透視光沢光沢有・(2mm以下) 黑色颗粒多・透視光沢光沢多・灰白色颗粒多・(微細)	複合縫	
128	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A2	A10G- H面	ナゲ	貴賤条文 のちナゲ	褐 10YR 5/6	7.5Y 6/4 10YR 3/1	にじる・黒 10YR 5/6	黑色颗粒多・透視光沢光沢多・(2mm以下) 黑色颗粒少・透視光沢光沢少・(1mm以下) 黑色颗粒少・(2mm以下)	複合口縫 30 cm 外面上にスカ付有
129	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A1	A11G- H面	直脚条文	直脚条文 のち無いナゲ	褐 10YR 6/6	にじる・黒 7.5Y 7/6	直脚条文 7.5Y 7/6	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下) 黑色颗粒少・角灰光沢少・(2mm以下) 灰光沢少・(微細)	複合口縫 30 cm 外面上に黒斑
130	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A1	A11G- H面	ナゲ	ナゲ	褐 10YR 6/4	にじる・黒 10YR 6/4	黑色光沢多・透視光沢光沢少・(2mm以下) 灰白色颗粒少・(2mm以下)	肯定口縫 4 cm	
131	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	C	B4G- H面	口縫部に貼付 直脚条文	ナゲ	褐 10YR 6/6	にじる・黒 10YR 6/4	透視光沢光沢有・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下) 黑色颗粒少・透視光沢光沢少・(1mm以下)	外面上にスカ付有 内面上に黒斑	
132	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	D4G- H面	口縫部に貼付 直脚条文	ナゲ	褐 10YR 6/6	にじる・黒 7.5Y 6/4	にじる・黒 2.5Y 6/4	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上にスカ付有 内面上に黒斑
133	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A2	B10G- H面	丁寧なナゲ	丁寧なナゲ	褐 2.5Y 6/4	にじる・黒 7.5Y 7/4	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上に黒斑 内面上に黒斑	
134	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	C5G- H面	口縫部に貼付 直脚条文	ナゲ	褐 2.5Y 6/4	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上に黒斑		
135	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	C5G- H面	口縫部に貼付 直脚条文	工具ナゲ	褐 5YR 6/6	2.5Y 7/3	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上にスカ付有 内面上に黒斑	
136	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	C	B4G- H面	口縫部に貼付 直脚条文	ナゲ	褐 2.5Y 7/4	透視光沢光沢少・(2mm以下)	外面上にスカ付有		
137	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	ナゲ	A9G- H面	口縫部に貼付 直脚条文	ナゲ	褐 10YR 4/1	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上に黒斑 外面上にスカ付有 肯定底面巻太径 30.6 cm		
138	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A2	A9G- H面	貴賤条文	貴賤条文	褐 10YR 6/2	にじる・黒 10YR 7/4	黑色颗粒少・黑色光沢有・(2mm以下) 黑色颗粒少・透視光沢少・(2mm以下)	外面上に黒斑 外面上にスカ付有 肯定底面巻太径 30.6 cm	
139	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A1	A11G- H面	貴賤条文のちナゲ	ナゲ	褐 10YR 6/6	7.5Y 6/6 10YR 5/6	にじる・黒 5YR 2/1	透視光沢光沢有・(4mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)・光沢少・(微細)	外面上にスカ付有 内面上全体に黒斑
140	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A2	A9G- H面	工具ナゲ	工具ナゲ	褐 10YR 6/6	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上にスカ付有 内面上に黒斑		
141	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	C4G- H面	工具ナゲ	工具ナゲ	褐 5YR 4/3	7.5Y 6/6 10YR 4/1	にじる・黒 7.5Y 7/4	透視光沢光沢少・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上にスカ付有 内面上に黒斑
142	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	A2	B9G- H面	貴賤条文	貴賤条文	褐 7.5Y 7/4	にじる・黒 10YR 7/6	透視光沢光沢有・(2mm以下) 黑色颗粒少・(1mm以下)	外面上にスカ付有	
143	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B1	C2G- H面	ナゲ	高化が著しい	褐 10YR 6/6	にじる・黒 10YR 6/4	黑色光沢多・透視光沢光沢少・(2mm以下)		
144	縄文土器	深鉢	口縁一 筋	B2	B4G- H面	貴賤条文	貴賤条文	褐 10YR 6/4	にじる・黒 10YR 6/4	透視光沢光沢有・(6mm以下)・淡黃褐色粒有・(5mm以下) 黑色颗粒少・(2mm以下)・黑色颗粒多・透視光沢光沢多・(2mm以下) 黑色颗粒有・(1mm以下)	内面上に黒斑	

第5表 土器觀察表 (5)

底敷 番号	種別	基盤	形状	区 分	出土位置		手法・調査・文書ほか		色調	土器の特徴	備考	
					外表面	内面	外表面	内面				
145	純文土器	深鉢	口縁部	B2	C46 口縁部	工具による痕いナ 字	工具による痕いナ 字	にない痕	にない痕	灰色地に、白色地に黒 色斑状模様 (4mm以下) 黒褐色地 (3mm以下)、白色地有、透視粒有 (2mm以下)	内外面に黒斑	
146	純文土器	深鉢	口縁部	A2	A106 口縁部	ナデ 直角多岐支	ナデ 直角多岐支	にない痕	10YR 7/2	白色地に黒斑、暗色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、白色地有、透視粒有 (2mm以下)	外表面に黒斑	
147	純文土器	深鉢	口縁部	B2	B5G 口縁部	ナデ 口縁部に粘付突起	ナデ	にない痕	10YR 5/2	黑色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、白色地有、透視粒多 (細緻) 黑色地有 (2mm以下)、白色地有 (細緻) 白色地有 (細緻)	外表面に黒斑	
148	純文土器	深鉢	口縁部	B2	N7 口縁部	ナデ 工具による痕いナ 字	ナデ 工具による痕いナ 字	にない痕	10YR 5/4	白色地有 (2mm以下) 黑色地有 (細緻)	内外面に黒斑	
149	純文土器	深鉢	底盤	B2	B5G 口縁部	ナデ アロコの底盤と直接 接合	ナデ	にない痕	10YR 5/4	黑色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、白色地有 (細緻) 白色地有 (細緻)	内外面に黒斑	
150	純文土器	深鉢	底盤	B2	B40 口縁部	ナデ アロコの底盤と直接 接合 (底盤)	ナデ 直角多岐支	にない痕	7.5YR 5/4	白色地有 (2mm以下) 7.5YR 5/2	白色地有 (2mm以下) 底定底径 17cm 底面に白色の付着物有	
151	純文土器	深鉢	底盤	B1	C1G 口縁部	ナデ	ナデ	にない痕	10YR 6/2	黑色地有 (2mm以下) 黑色地有 (細緻)、透視粒有 (1mm以下)、光沢粒有 (微細)	内外面に黒斑	
152	純文土器	深鉢	底盤	A2	N7 口縁部	ナデ	ナデ	多岐	5YR 4/3	白色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下)	外表面に黒斑 内外面に灰化物	
153	純文土器	深鉢	底盤	B1	B2G 口縁部	ナデ	ナデ	にない痕	10YR 6/4	白色地有 (2mm以下) 10YR 6/2	白色地有 (2mm以下) 底定口径 9.2cm 底定底径 9.2cm	
154	純文土器	深鉢	底盤	A1	B11G 口縁部	ナデ	ナデ	にない痕	5YR 6/4	白色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、黑色地有 (細緻)、透視粒有 (細緻)	外表面にスリット有 内外面に黒斑	
155	純文土器	深鉢	底盤	A1	A11G 口縁部	ナデ	ナデ	浅溝	5.5YR 5/2	白色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下)	底定径 10cm 外表面に黒斑	
156	純文土器	深鉢	底盤	B2	C4G 口縁部	ナデ	ナデ	横	7.5YR 7/6	白色地有 (2mm以下) 7.5YR 7/2	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、黑色地有 (細緻) 黑色地有 (2mm以下)、黑色地有 (細緻)	底定底径 12cm 上げ底状
157	純文土器	深鉢	底盤	B1	G10 口縁部	ナデ	ナデ	にない痕	10YR 5/1	白色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)	内外面に黒斑 白色地有 (細緻)	
158	純文土器	深鉢	底盤	B2	G10 口縁部	ナデ	ナデ	にない痕	10YR 6/4	白色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、透視粒有 (1mm以下)	外表面にスリット有 内外面に黒斑	
159	純文土器	深鉢	底盤	B1	B2G 口縁部	ナデ	ナデ	浅溝	5.5YR 5/2	白色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下)	底定径 10cm 上げ底状	
160	純文土器	深鉢	底盤	B2	B5G 口縁部	ナデ	ナデ	横	5YR 5/2	白色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下)	内外面に黒斑 内外面に灰化物	
161	純文土器	深鉢	底盤	A1	A12G 口縁部	ナデ	ナデ	横	7.5YR 6/6	白色地有 (2mm以下) 10YR 6/4	白色地有 (2mm以下) 底定底径 10cm	
162	純文土器	深鉢	口縁部	B2	C4G 口縁部	口唇部 : ミガキのち沈縫	ナデ	にない痕	10YR 5/2	白色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、透視粒有 (1mm以下)	外表面にスリット有	
163	純文土器	深鉢	口縁部	C	B6G 口縁部	丁寧ななまが 牛乳を含む	丁寧ななまが 牛乳を含む	横	10YR 7/1	白色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)	内外面に黒斑 上げ底状	
164	純文土器	深鉢	口縁部	B1	B7G 口縁部	ミガキ	ミガキ	横	2.5Y 3/1	白色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)	底定底径 10cm	
165	純文土器	深鉢	口縁部	B2	C5G 口縁部	ミガキ	ミガキ	横	2.5Y 3/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	
166	純文土器	深鉢	口縁部	C	B6G 口縁部	ミガキ	ナデ	横	2.5Y 3/2	白色地有 (2mm以下) 黑色地有 (2mm以下)、透視粒有 (1mm以下)	底定口径 31cm	
167	純文土器	深鉢	口縁部	C	B6G 口縁部	丁寧ななまが 牛乳を含む	透視粒 : 丁寧ななまが 牛乳を含む	横	10YR 7/4	白色地有 (2mm以下) 白色地有 (細緻)、黑色地有 (2mm以下)	外表面に赤色の付着物	
168	純文土器	深鉢	口縁部	A2	B10G 口縁部	ミガキ 沈透文 リボン状の突起	沈透文 ミガキ	横	2.5Y 7/4	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	
169	純文土器	深鉢	口縁部	C	B6G 口縁部	ミガキ リボン状の突起	ミガキ	横	10YR 5/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	口縁部に黏付突起	
170	純文土器	深鉢	口縁部	B1	C3G 口縁部	ミガキ	ミガキ	横	10YR 5/3	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	
171	純文土器	深鉢	口縁部	C	B6G 口縁部	ミガキ 沈透文 黒色地模様	ミガキ 沈透文 黒色地模様	横	2.5Y 3/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	
172	純文土器	深鉢	口縁部	B2	C3G 口縁部	ミガキ 沈透文	ミガキ 沈透文	横	10YR 3/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	
173	純文土器	深鉢	口縁部	B2	B5G 口縁部	丁寧ななまが 牛乳	丁寧ななまが 牛乳	横	10YR 4/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	
174	純文土器	深鉢	口縁部	C	D7G 口縁部	ミガキ 沈透文 黒色地模様	ミガキ 沈透文 黒色地模様	横	10YR 4/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	
175	純文土器	深鉢	口縁部	A2	C3G 口縁部	ミガキ	沈透文 ミガキ	横	2.5Y 3/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	底定口径 21.4cm 底定底径大径 32.3cm	
176	純文土器	深鉢	口縁部	B2	B5G 口縁部	丁寧ななまが 牛乳	丁寧ななまが 牛乳	横	2.5Y 3/2	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	底定底径大径 32.3cm	
177	純文土器	深鉢	口縁部	B1	B5G 口縁部	ミガキ 沈透文	ミガキ 沈透文	横	10YR 3/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	リボン状黏付突起	
178	純文土器	深鉢	口縁部	A2	N7 口縁部	ミガキ 沈透文	ミガキ 沈透文	横	2.5Y 3/1	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	リボン状黏付突起	
179	純文土器	深鉢	口縁部	B1	C3G 口縁部	ミガキ 沈透文	ミガキ 沈透文 黒色地模様が盛り	横	7.5YR 7/6	白色地有 (2mm以下) 透視粒有 (1mm以下)	リボン状黏付突起 底定口径 27.4cm 内外面に黒斑	

第6表 土器觀察表 (6)

底敷 番号	種別	基盤	形状	底 区 分 ・ 形 式 ・ 組 合	出土位置		手法・調査・文様ほか		色調	底土の特徴	備考	
					外面	内面	外面	内面				
180	縄文土器	追跡	單耳一 肩部	A2 D9G- W7層	三万年	三万年 高化が美しい	黄皮 2.5Y 4/1 に少し褐色 10YR 7/4	黄皮 2.5Y 4/1 10YR 5/1	黄褐色少々、灰白色少々 (2 mm以下) 透明光沢有 (1 mm以下) 底土有 (1 mm以下) 水沢灰少 (微細)		内面に黒斑	
181	縄文土器	追跡	單耳一 肩部	B2 C9G- W7層	丁寧な三万年	丁寧な三万年	黄皮 10YR 4/1	黄皮 10YR 4/1	黄褐色少少、灰白色少少、赤褐色少少 (1 mm以下) 透明光沢有 (微細)			
182	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A2 B 9G- W7層	三万年 風化気味	三万年 正規文 高化が美しい	に少し褐色 10YR 6/4 地表 10YR 5/1	に少し褐色 10YR 5/4 10YR 5/1	黄褐色少少、灰白色多 (微細)			
183	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A1 A11G- W7層	三万年	三万年	褐 5YR 6/6 10YR 6/6	褐 7.5YR 6/6 10YR 6/6	赤褐色少少 (2 mm以下) 灰白色多 (微細)			
184	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B2 D9G- W7層	リボン状の突起	三万年	褐皮 10YR 4/1	白褐色有 (有) 透明光沢有 (1 mm以下) 赤褐色多 (微細)	白褐色有 (有) 透明光沢有 (1 mm以下) 赤褐色多 (微細)			
185	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B1 C9G- W7層	三万年 側面部に ひれ状突起	三万年	黑 10YR 2/1	黑 10YR 2/1 10YR 4/2	灰白色少少、暗褐色少少 (2 mm以下) 透明光沢有 (1 mm以下)			
186	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B2 B9G- W7層	三万年	三万年	白皮 2.5Y 5/2	白皮 2.5Y 5/2	黄色光沢少、透明白光沢多灰白色粒多 (微細)		口輪部に黒斑 系統狀の2次線	
187	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A2 A9G- W7層	三万年	三万年 高化が美しい	褐皮 10YR 4/1 に少し褐色 10YR 5/1	褐皮 10YR 5/1	に少し褐色少 (2 mm以下) 透明光沢有 (微細)		内面に黒斑	
188	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A2 B9G- W7層	三万年 粘り性高	三万年	褐皮 2.5Y 6/2	褐皮 2.5Y 6/2	白褐色少少、透明光沢有 (2 mm以下) 底土有 (有) 赤褐色少少 (1 mm以下)		内面に黒斑 内面に大穴付	
189	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A1 A 11G- W7層	单耳復縫 側面文 高化が美しい	三万年	白皮復縫による ナデ	白皮復縫 10YR 7/4	黑色光沢少、灰白色少少 (2 mm以下) 10YR 6/5		外面上に黒斑 底土有	
190	縄文土器	追跡	肩部	B1 W7層	三万年	ナデの三万年 (微細)	黄皮 10YR 5/2	白皮 10YR 5/2 10YR 4/1	白褐色少少 (2 mm以下) 透明光沢有 (2 mm以下) 透明光沢有 (微細)		外面上にスカ付	
191	縄文土器	追跡	肩部	B1 W7層	三万年	三万年	褐 7.5YR 6/6	白皮 7.5YR 6/6	赤褐色少少 (2 mm以下) 透明光沢有 (2 mm以下) 透明光沢有 (微細)		外面上にスカ付 内面に黒斑	
192	縄文土器	追跡	肩部	B1 W7層	三万年	三万年	に少し褐色 10YR 5/2	に少し褐色 10YR 5/2	白褐色少少、透明光沢多 (2 mm以下) 底土有 (有) 灰白色少少 (1 mm以下) 透明光沢有 (2 mm以下)			
193	縄文土器	深鉢	單耳一 肩部	B1 C9G- W7層	三万年	三万年	白皮 7.5Y 6/6 10YR 6/6	白皮 7.5Y 6/6 10YR 4/1	黑色光沢少 (2 mm以下) 透明光沢有 (2 mm以下) 透明光沢有 (微細)			
194	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B1 C9G- W7層	三万年	ナデ	に少し褐色 10YR 7/4	に少し褐色 10YR 6/4	透明光沢少 (2 mm以下) 底土有 (有) 安田白多、黑色多 (1 mm以下) 透明光沢多 (2 mm以下)		外面上にスカ付	
195	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B2 B9G- W7層	ナデ	三万年	褐皮 10YR 4/1	に少し褐色 10YR 6/4	透明光沢少 (2 mm以下) 底土有 (有) 黑色光沢多 (微細)		外面上に黒斑	
196	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A2 B9G- W7層	工具ナデ	ナデ	に少し褐色 10YR 6/4 褐皮 10YR 4/1	に少し褐色 10YR 6/4 褐皮 10YR 4/1	黑色光沢多 (2 mm以下) 透明光沢多 (2 mm以下) 透明光沢多 (微細)		外面上にスカ付 内面に黒斑	
197	縄文土器	深鉢	口輪一 肩部	A2 B9G- W7層	ナデ	三万年	に少し褐色 10YR 5/2 10YR 5/1	に少し褐色 10YR 5/2 10YR 4/1	白色光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (微細)		外面上にスカ付 内面に黒斑	
198	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A2 A9G- W7層	ナデ	ナデ	に少し褐色 10YR 5/2	に少し褐色 10YR 5/2	白色光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (微細)		外面上にスカ付 内面に黒斑	
199	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B1 C9G- W7層	ナデ	ナデ 高化が美しい	に少し褐色 10YR 5/4	褐皮 7.5Y 6/6	赤褐色少少 (2 mm以下) 透明光沢有 (2 mm以下)		内面に黒斑	
200	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A2 B9G- W7層	貝殻文のナデ	ナデ	淡黃 10YR 5/2	に少し褐色 10YR 5/2	白色光沢多 (有) 有褐色少 (1 mm以下)		対開口 15.5 cm	
201	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B2 C9G- W7層	工具による形いナデ	ナデの三万年 高化が美しい	ナデの三万年 高化が美しい	地表 10YR 4/1	地表 2.5Y 6/2	透明光沢少 (2 mm以下) 底土有 (有) 黑色光沢少 (2 mm以下)		外面上にスカ付
202	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A2 B10G- W7層	工具ナデ	三万年工具ナデ	に少し褐色 10YR 6/4	地表 10YR 6/3	透明光沢少 (2 mm以下) 底土有 (有) 黑色光沢少 (2 mm以下)		口輪部に黒斑	
203	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B2 W7層	工具ナデ	三万年工具ナデ	黑皮 10Y 3/1	黑皮 10Y 3/1	黑色光沢多 (2 mm以下) 透明光沢多 (2 mm以下)		内面にスカ付 内面に黒斑 内面に大穴付	
204	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A1 B11G- W7層	ナデ	ナデ	に少し褐色 10YR 5/4 2.5Y 5/1	褐 2.5Y 5/1 10YR 5/1	白色光沢少、黑色少少 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下)		内面にスカ付 内面に黒斑	
205	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B1 C9G- W7層	粗目ナデ	三万年	黑 10YR 1.7/1	黑 10YR 2/1	白色光沢多 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下)		外面上にスカ付	
206	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B1 C1G- W7層	ナデ	ナデ 粗目	黄皮 2.5Y 5/2 4/1	黄皮 2.5Y 5/2 4/1	透明光沢少 (2 mm以下) 底土有 (有) 黑色光沢少 (2 mm以下)			
207	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A1 B11G- W7層	丁寧なナデ	ナデ	淡黄 2.5Y 7/2	黄皮 2.5Y 5/1	角閃石斑 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下)		内面にスカ付	
208	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	A1 B10G- W7層	貝殻文 粗目	ナデの貝殻文 粗目	に少し褐色 10YR 5/2	黄皮 2.5Y 5/2 10YR 5/1	白色光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下) 底土有 (有) 黑色光沢少 (1 mm以下)		内面にスカ付 内面に黒斑	
209	縄文土器	追跡	底敷	A2 C9G- W7層	貝殻粗目	ナデ	白 10YR 5/1	白 2.5Y 5/1	白色光沢少 (4 mm以下)		内面に黒斑	
210	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B1 C9G- W7層	貝殻粗目	ナデ	白 10YR 5/1	白 2.5Y 5/2	透明光沢少 (2 mm以下) 底土有 (有) 黑色光沢少 (2 mm以下)		内面にスカ付	
211	縄文土器	追跡	口輪一 肩部	B1 C1G- W7層	貝殻粗目	ナデ	褐皮 10YR 5/4	褐皮 10YR 5/1	白色光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下)		内面に黒斑	
212	縄文土器	追跡	底敷	B1 B1G- W7層	ナデのち割文 粗目	ナデ	白 2.5Y 6/3	白 2.5Y 4/1	白色光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下)		外面上にスカ付	
213	縄文土器	追跡	底敷	B2 C9G- W7層	ナデ	ナデ	白 2.5Y 5/2	白 2.5Y 6/6	白色光沢少 (2 mm以下) 透明光沢少 (2 mm以下)			

第7表 土器觀察表 (7)

底敷 番号	種別	器種	出土位置 Gr. - 層 - 遺構	手法・調査・文様ほか		色調 外面 内面	地土の特徴	備考			
				片面	内面						
255	土器群	甕	口縁一 縁部	B2	N層	僅ナデ	ナゲ 丁寧なへらり	にじい黄褐色 7.5Y 5/4 燒 STH 6/6	褐色色粉少 (1mm以下) 0.9Y 5/2 にじい黄褐色 10W 6/2	背景口径 22.1 cm 内面に刷毛 内面に異色	
256	漆器群	甕	縁部	B2	N層	横子引タキ 田代模ナキ	平行當て真直	暗褐色 2.5Y 5/2 燒 STH 6/6	褐色色粉少 (1mm以下) 4.5Y 5/2 漆	漆色色粉有・淡黃色色 (漆絆)	
257	漆器群	甕	縁部	B1	C4G	N層	平行引タキ	平行當て真直	暗褐色 5YR 6/6 燒 STH 6/6	灰白色色粉少 (1mm以下)	漆或不良
258	漆器群	甕	底盤 付近	G	C3G	N層	平行引タキ	平行當て真直	暗褐色 2.5Y 5/2 燒 STH 5/5	褐色色粉少 (1mm以下) 4.5Y 5/2 漆	漆色色粉少 (漆絆)
259	製陶土器	鉢	縁部	B2	B4G	N層	ナデ	希ナデ	明赤褐色 5YR 5/6	白黒斑一つ (4mm) 漆色有 (3mm以下) 漆黃褐色粉多 (7mm以下)・褐色粉有 (1mm以下)	内面にひび状の斑痕 大腹半島底

第8表 石器計測表

商載番号	器種	出土区	出土 Gr.	石材	造構・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
15	楔形石器	A1	B12	チャート	IX	21	21	7	3
16	楔形石器	A1	A12	墨岩石 (墨岳産)	IX	22	25	8	4.2
17	磨歯石	B1	D2	砂岩	IX	122	102.5	57	1027.6
18	磨歯石	A1	A11	砂岩	IX	106	94	43	722.8
19	石匙	A1	B11	石英	IX	39	57	10	13.5
28	硫石	A2	D9	砂岩	SC11	188	332	181	14550
35	磨石	A2	C8	砂岩	SC23	42	41	28	62.5
36	磨石	A2	C8	砂岩	SC23	120	90	63	850.1
43	スクレイバー	B1	B3	黒曜石 (墨岳産)	SC36	25	18	6	2.9
47	石鶲	B1	B3	ホルンフェルス	SC40	26	18	4	1.8
88	磨歯石	B1	C3	砂岩	SC66	115	96	31	540.2
214	石鶲	B2	B4	チャート	IV	17	14	3	0.7
215	石鶲	A2	B9	ガラス質安山岩	IV	16	14.5	2.5	0.6
216	石鶲	B2	B5	チャート	IV	23	14	3	1
217	石鶲	B2	不明	ガラス質安山岩	IV	22	15	3	1.1
218	石鶲	A2	B9	チャート	IV	25	15	4	0.9
219	石鶲	B1	D1	緑色頁岩	IV	31	16	3	1.4
220	石鶲	A2	不明	チャート	IV	34	20	6.5	4.3
221	石鶲	B2	B5	黒曜石 (墨岳産)	IV	26	16	3	0.7
222	スクレイバー	B1	D2	チャート	IV	16	33	9	5.3
223	スクレイバー	B2	C9	頁岩	IV	53.5	58	9	25.5
224	スクレイバー	B2	C4	チャート	IV	45	32	12	13.6
225	楔形石器	A2	B7	チャート	IV	28.5	34	14	12.9
226	打製石斧	A2	不明	ホルンフェルス	IV	221	85	17	487.2
227	打製石斧	A2	B9	ホルンフェルス	IV	84	40	9	45
228	打製石斧	B2	不明	ホルンフェルス	IV	87	51	9	54
229	打製石斧	C	D8	砂岩	IV	142	46	16	101.1
230	打製石斧	A2	B9	ホルンフェルス	IV	85	50	9	54.8
231	打製石斧	A2	B10	ホルンフェルス	IV	70	67	11	86.2
232	打製石斧	B1	D2	頁岩	IV	96	61	10	76.4
233	打製石斧	A2	B9	ホルンフェルス	IV	77	45	12	58.4
234	打製石斧	A2	D9	ホルンフェルス	IV	144	82	18	253.4
235	打製石斧	B1	C3	頁岩	IV	105	57	10	63.8
236	磨歯石斧	A2	不明	閃綠岩	IV	84	56	27	223.3
237	磨歯石斧	C	B6	ホルンフェルス	IV	57	69	29	182.5
238	磨歯石斧	A2	C8	ホルンフェルス	IV	101	32	17	76.7
239	磨歯石斧	A2	不明	ホルンフェルス	IV	83	32	14	58.8
240	敲石	B1	E1	砂岩	IV	50	48	32	95.4
241	敲石	A2	B9	砂岩	IV	45	40	27	67.3
242	敲石	A2	B10	砂岩	IV	45	41	20	55.9
243	磨歯石斧	B2	B5	砂岩	IV	79	77	27	226.2
244	磨歯石	B1	C2	砂岩	IV	98	76	38	436.8
245	磨歯石	A2	不明	溶結凝灰岩	IV	120	90	49	796
246	磨歯石	B1	B2	砂岩	IV	66	89	36	260.2
247	磨歯石	B1	C1	砂岩	IV	60	85	42	334.2
248	磨歯石	A2	不明	溶結凝灰岩	IV	78	114	61	814.3
249	磨歯石	A2	B8	砂岩	IV	99	70	37	409.4
250	磨歯石	C	B6	砂岩	IV	76	106	63	703.7
251	磨歯石	B1	D3	砂岩	IV	86	110	62	773.4
252	磨歯石	B1	D3	砂岩	IV	94	76	32	233.7
253	石皿	B2	B4	砂岩	IV	263	194	123	7800
254	礎石	B1	B5	砂岩	IV	226	261	211	16250

第IV章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

上高遺跡の各遺構 (SI10, SA2, SC68, SC41) から採取された炭化物 4 点について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定及び樹種同定である。

第2節 放射性炭素年代測定

1 試料と方法

測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を第9表に示す。

2 測定結果

加速器質量分析法 (AMS : Accelerator Mass Spectrometry) で得られた¹⁴C濃度の同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (¹⁴C) 年代および曆年代 (較正年代) を算出した。第10表・図59に結果を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 ¹⁴C / ¹²C 比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C / ¹²C) は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化して同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (¹⁴C) 年代測定値

試料の ¹⁴C / ¹²C 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。¹⁴C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2%確率) である。

(3) 曆年代 (Calendar Years)

曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ¹⁴C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン / トリウム) 年代と ¹⁴C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 13、較正プログラムは OxCal 4.3 である。

曆年代 (較正年代) は、¹⁴C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1σ (68.2%確率) シグマと 2σ (95.4%確率) で示した。○内の%表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ¹⁴C 年代の確率分布、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

3 所見

加速器質量分析法 (AMS) による年代測定の結果、No.1 は 8535 ± 30 年 BP (2 σ の曆年代で BC 7596 ~ 7540 年)、No.2 は 4440 ± 25 年 BP (BC 3328 ~ 3219, 3176 ~ 3159, 3122 ~ 3009, 2981 ~ 2938 年)、No.3 は 3505 ± 25 年 BP (BC 1892 ~ 1752 年)、No.4 は 2925 ± 25 年 BP (BC 1214 ~ 1030 年) の年代値が得られた。

なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

第3節 樹種同定

1 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- (1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- (2) 試料を割折して、木材の基本的三断面 (横断面: 木口, 放射断面: 柱目, 接線断面: 板目) を作成
- (3) 落射顕微鏡 (40 ~ 1000 倍) で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

2 結果

表5に同定結果、写真1に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となる木材構造の特徴を記す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やかな箇所があり、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では、放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは射錐形を呈する。以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が1～数列幅で、年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は單穿孔であり、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、照葉樹林を構成する主要高木で、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。

(3) カナメモチ属 *Photinia* バラ科

小型でやや角張った道管がほぼ単独で散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が晩材部で接線方向に連なる傾向を示す。道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織は異性である。放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。以上の特徴からカナメモチに同定される。カナメモチは、本州（東海以西）、四国、九州に分布する。常緑の小高木で、通常高さ5～10m、径15～30cmである。

(4) タール状物質 tar-like substance

木材の形質を呈しておらず、植物が高熱を受けたことによりタール状になったものと考えられる。タールは有機物の熱分解によって得られる粘り気のある油状の液体で、木タールは木炭を作るために木材を加熱することによって得られる抽出物のうち、水蒸気が冷えて液体状になった上澄み部分を除いた油状の部分をさす。いわゆる植物樹脂のヤニであり、マツやカバノキから得られるものが有名である。一方で、長野県大石遺跡（松谷1976）鳥取県鳥浜貝塚（笠原1981）やでは、タール状の炭化物を同定した結果、シソやエゴマの種実に由来することが確認されている。本試料は、肉眼および顕微鏡観察から種実由来であり、その形状からクルミなど油分の多い堅果類の樹脂に由来する可能性が高いと考えられる。

3 所見

SI10の炭化物はタール状物質（堅果類の樹脂由来？）、SA2の炭化物はコナラ属アカガシ亜属、SC68の炭化物はカナメモチ属、SC41の炭化物はマツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツ）と同定された。コナラ属アカガシ亜属は、堅硬な材であり建築材などに広く用いられる。カナメモチ属は、報告例は少ないが、極めて硬い材であることから、農具の柄、扇の要、櫛、牛の鼻環などの強い力が加わるものに用いられる。マツ属複維管束亜属は、木理がやや直立で、重硬で水湿によく耐え難いにくく、建築部材の中でも水湿の影響がある柱、礎板などに用いられる。また、縄文時代には建築部材に利用された例もある。いずれも、温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

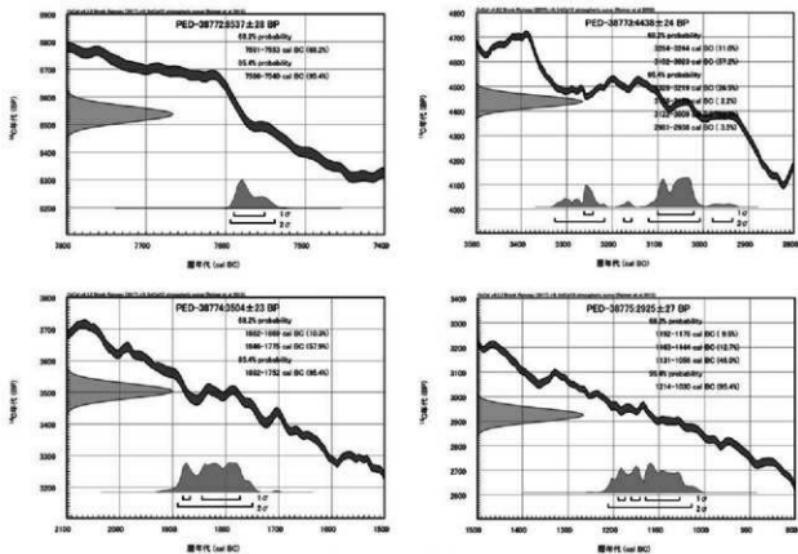
第9表 測定試料の詳細と方法

試料No.	構成	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	SI10	炭化物（タール状物質）	超音波洗浄、酸-7% - 酸処理	AMS
No. 2	SA2	炭化材（コナラ属アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-7% - 酸処理	AMS
No. 3	SC68	炭化材（カナメモチ属）	超音波洗浄、酸-7% - 酸処理	AMS
No. 4	SC41	炭化材（マツ属複葉管束亜属）	超音波洗浄、酸-7% - 酸処理	AMS

第10表 放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定No. (PED)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 : 年 BP (曆年較正用)	曆年代 (較正年代) : cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No. 1	38772	-26.61 ± 0.20	8535 ± 30 (8537 ± 28)	BC 7591-7553 (68.2%)	BC 7596-7540 (95.4%)
No. 2	38773	-28.59 ± 0.21	4440 ± 25 (4438 ± 24)	BC 3264-3244 (11.0%) BC 3102-3023 (57.2%)	BC 3328-3219 (26.5%) BC 3176-3159 (2.2%) BC 3122-3009 (63.2%) BC 2981-2938 (3.5%)
No. 3	38774	-28.45 ± 0.25	3505 ± 25 (3504 ± 23)	BC 1882-1869 (10.3%) BC 1846-1775 (57.9%)	BC 1892-1752 (95.4%)
No. 4	38775	-28.61 ± 0.23	2925 ± 25 (2925 ± 27)	BC 1192-1176 (9.5%) BC 1163-1144 (12.7%) BC 1131-1056 (46.0%)	BC 1214-1030 (95.4%)

BP : Before Physics (Present) AD1950 基点, cal : calibrated, BC : 紀元前



第59図 曆年較正結果

第11表 樹種同定結果

試料番号	遺構	結果(学名/和名)	備考
1	SI10	タール状物質(堅果類の樹脂由来?)	
2	SA2	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
3	SC68	<i>Photinia</i>	カナメモチ属
4	SC41	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複管束亜属

引用文献

笠原安夫(1981)鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実・タール状塊について、鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査2、福井県教育委員会、p.65~88。

松谷綾子(1976)長野県諏訪郡原村大石遺跡出土タール状炭化種子の同定について、長野県中央道理文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その1、富士見町その2—、長野県教育委員会、p.141-143、図版p.135-140。

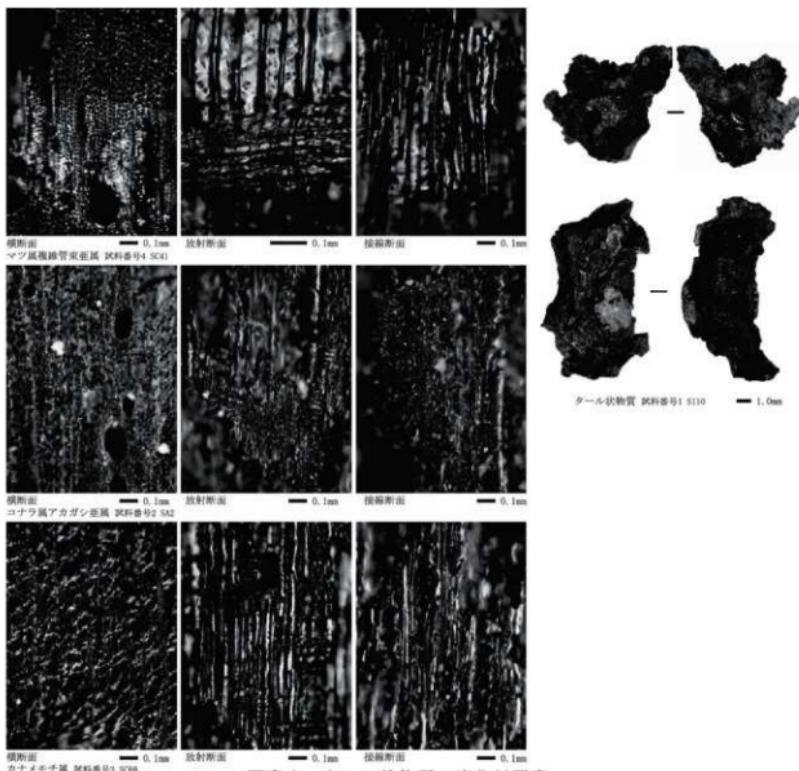


写真1 タール状物質・炭化材写真

第V章 総括

今回の発掘調査では、縄文時代早期から古代～中世にかけての遺構や遺物が数多く確認された。そこで、本章では、確認された各時代の遺構・遺物をもとに、それぞれの時代の様相について、若干の考察を加え、まとめとしたい。

第1節 縄文時代早期

上高遺跡の所在地である都城市梅北町を含む都城盆地南部の遺跡においては、桜島末吉テフラを含む黒褐色土中あるいはその下位層で縄文時代早期の遺構・遺物が検出される例が多い。本遺跡においても、集石遺構24基、土坑2基が検出された。

本遺跡の集石遺構は、調査区中央の谷を挟んで北側と南側に大きくわかれ、遺構の群集には粗密がみられたが、その検出レベルに高低差はない状況である。さらに、集石遺構(SI10)の炭化物について、放射性炭素年代測定を行ったところ、今から約9600年前頃という結果が得られたことから、各集石遺構間にはさほど大きな時期差はないと考えられる。

遺構に伴う遺物については、土坑(SC25)出土の塞ノ神式土器(第16図1)のみであるが、包含層中より加栗山式(2)、石坂式(3・4)、下割峯式土器(6・7)を始め、押型文土器のうち楕円形押型文(8・9)や手向山式土器(10~12)、さらには塞ノ神式土器(13・14)が出土している。全体的に小片かつ少量の出土であるなかで、塞ノ神式土器については、器形全体が判明する資料が比較的多い。

塞ノ神式土器のうち、1は横澤滋氏のいう塞ノ神Ⅲ式の中段階、14は塞ノ神Ⅱ式の中段階に対応するものと考えられる(横澤滋2018)。なお、13は口縁部が短く屈曲し、やや張りのある胴部をもつ器形に、外面に沈線文と網目状撲糸文が施文される資料である。網目状撲糸文の施文のあり方に着目すると、Ⅰ式とも考えられるが、器形を重視するならば、塞ノ神Ⅱ式の中段階にあたるものとしておきたい。

このように本遺跡では、縄文時代早期でも、前葉から後葉までの複数の土器型式が存在するが、集石遺構については、検出状況ならびに放射性炭素年代測定の結果から、前葉を中心とする時期が考えられる。加えて土坑は、後葉の時期となることから、早期前葉～後葉にかけて断続的な人間活動を認めることができる。

第2節 縄文時代前期～中期

縄文時代前期～中期の遺構として、堅穴建物跡2軒、土坑13基が検出された。

両遺構は、調査区を南北方向に延びる尾根筋上に主に分布しており、遺物は堅穴建物跡(SA1)から石匙が出土したのみであるため、遺物から遺構の所属時期を推定するのは困難である。ただし、堅穴建物跡については、堅穴埋土にアカホヤ火山灰を含んでいること、堅穴建物跡(SA2)の床面近くより出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果(今から約5100年前頃)などから縄文時代前期～中期の時期とする。他方、陥し穴状遺構を含む土坑に関しても検出状況(霧島御池軽石層で検出されなかった)、遺構埋土のサンプリング結果、土坑(SC75)と風削木痕との切り合い関係(図版8：土坑が霧島御池軽石を含む風削木痕に切られていること)などから堅穴建物跡と同じく縄文時代前期～中期と踏まえておきたい。

ただし、陥し穴状遺構の埋土(SC68)から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果は後期の年代(約3800年前後)であることや、陥し穴状遺構の平面形は前期～中期が長方形、後期～晩期が円形のタイプが多いことが指摘されている(松尾2004)ため、本遺跡の陥し穴状遺構は、後期に属する可能性も否定できない。

本遺跡周辺においては、田谷・尻枝遺跡（都城市教委 1997）で平面形が長方形の陥し穴状遺構（SC25）が霧島御池軽石直下より検出される一方、梅北佐土原遺跡（都城市教委 2007）では、円形プランの陥し穴状遺構（JSCL）が縄文時代前期～中期の所産と報告されている。この梅北佐土原遺跡は、本遺跡から北へ約1kmの場所に位置し、陥し穴状遺構の形態や埋土の状況は本遺跡例と極めて近似している。よって、本遺跡の陥し穴状遺構は、霧島御池軽石降下以前の縄文時代前期～中期の時期であると解釈され、SC68出土の炭化物は後世の混入と理解しておきたい。すなわち霧島御池軽石降下以前の陥し穴状遺構の平面形には長方形と円形のプランが併存する可能性が高く、平面形の差は狩猟対象動物の違いと対応するものと考えておきたい。

このように、前期～中期の時期幅において、堅穴建物と陥し穴状遺構・土坑が存在したことが読みとれるが、堅穴建物と陥し穴状遺構などの関係性については、陥し穴状遺構の性格を鑑みると集落（堅穴建物など）から狩猟の場（陥し穴状遺構）、もしくは狩猟の場から集落へという遺跡の変遷が想定される。

第3節 縄文時代後期の遺物

縄文時代後期の遺構は、確認されなかつたが、遺物包含層（IV層）からは、後期に属する縄文土器が少量かつ小片で出土した。そのうち型式的特徴から岩崎式（93～94）、指宿式（97～103）、松山式（104）、丸尾式（105）、中岳II式（106～111）などがある。調査区外に当該型式期の集落等が存在する可能性が考えられ、実際に本遺跡から谷を挟んで北に約300～600m離れた嫁坂遺跡A・B区（県埋文セ 2019）では、縄文時代後期の集落跡が検出されている。

第4節 縄文時代晚期の遺構と遺物

遺構とその内容

縄文時代晚期の遺構としては、土坑が31基検出され、調査区中央の谷を挟んで南北に分布している。検出された土坑のうち、27基から遺物が出土し、特に調査区北西部の土坑群に集中している。

土坑から出土した遺物は、黒川式土器（堂込 1997、宮地 2008、吉本 2012）を中心とするものがほとんどであるが、入佐式の新段階（堂込 1997、宮地 2008）に対応するもの（29-76）もある。土坑出土の黒川式土器は、口縁部外面に突帯をもつ深鉢（44-52-58-62）、頸部が短く、胴部が張り出す浅鉢（26-32-39-60）、玉縁状に肥厚した口縁部をもつ浅鉢（39-46-70）といった特徴をもつ。これらの特徴に着目すると、黒川式の中段階から新段階に相当する土器が多いが、24-34-64-82-92など古段階～中段階の特徴をもつものもある。細分型式の判別が可能な土器が出土した土坑については表12のように一覧表化した。

土坑内出土土器のうち、細分型式の新しいタイプを土坑の所属時期とするならば、入佐式の新段階（S061）、黒川式の中段階（SC11-23-59-65-71）、新段階（SC1-24-40-41-60-66）にわけられる。各段階とも調査区全体に広がっているが、SC59-61-65 や SC40-41-60-66 のように各段階の群集が認められる。

包含層出土の黒川式土器は中段階から新段階のものが多く、黒川式の古段階のものは、数少ない。土坑出土土器からは黒川式の古段階に属するものは現段階では見いだせず、存在したとしても全体の基數からすると少数と考えられる。

また、土坑の性格・機能については、不明な点が多いが41-43号土坑などは土坑堆積および遺物出土状況から考えると、廃棄などが想定される。なお、土坑とセットになるであろう堅穴建物跡は検出されなかつたが、調査区内のIV層削平範囲（第4図）もしくは、調査区周辺に存在した可能性が推測される。

第12表 各土坑における入佐式・黒川式土器の細分型式

遺構	土 器 型 式	型 式 的 特 徴	備 考
SC1	黒川式 中～新段階(20)	口縁部が直立する	
	黒川式 古～中段階(24)	波状口縁	
SC11	黒川式 中段階(25)	口径と胴部最大径が近似する	
	黒川式 中段階(26)	胴部最大径が口径を上回る	
SC23	入佐式 新段階(29)		
	黒川式 古～中段階(34)	口縁部が直線的にひらく	
SC24	黒川式 中～新段階(39)	口縁端部が玉縁状 胴部最大径が口径を上回る	
SC40	黒川式 新段階(44)	口縁部外面に断面三角形状の突帯	SC41と接合関係
	黒川式 中～新段階(48～50)	口縁部付け根の屈曲度合い	¹⁴ C年代測定値(炭化材)： 2925 ± 25年 ¹⁴ C BP
SC41	黒川式 新段階(52・53・58・62)	口縁部外面に断面三角形状の突帯	
	黒川式 古～中段階(64)	頭部が長く、大きく外方にひらく口縁部	SC40と接合関係(62・64)
SC59	黒川式 中段階(70)	口縁端部が玉縁状	
SC60	黒川式 新段階(72)	口縁部が立ち上がり気味	
SC61	入佐式 新段階(76)	頭部の蝶ネクタイ状貼付文	
SC65	入佐式新～黒川古段階(81)	長胴を呈する	
	黒川式 古～中段階(82)	口縁部が僅かに内湾	
SC66	黒川式 新段階(87)	口縁部が内湾気味	
SC71	黒川式 古～中段階(92)	口縁部が直線的にひらく	SC65と接合関係

隣接遺跡（嫁坂遺跡）との関連性

嫁坂遺跡の発掘調査では、A～C区において縄文時代後期～晩期までの集落跡が確認されており、特に今回の調査区と谷を挟んだC区（第3図）では、主に晩期初頭の堅穴建物跡が検出され、入佐式土器を中心とした縄文土器が遺構内より出土している（県埋文セ2019）。一方、今回の調査区では、入佐式に後続する黒川式期の土坑群が検出されている。嫁坂遺跡の調査報告者は、嫁坂遺跡B区を中心として居住区域がC区周辺へと広がっていったものと推測されるとしており（甲斐2019）、今回の調査成果は縄文時代後期～晩期の嫁坂遺跡～上高遺跡における居住区域の移り変わりの一端を示していると考えられる。

第5節 古代の遺物

今回の調査では、古代に属する遺構は検出されず、遺物に関しても土師器及び須恵器などが少量出土したのみである。これは、過去の造成等による旧地形の改変によるものが大きいと考えられる。土師器甕（255）は口縁部の屈曲具合と内面のヘラケズリ調整のあり方から、都城市肱穴遺跡（都城市教委1999）のA-SA03出土遺物と類似することから9世紀後半で位置づけられる。須恵器甕（256～258）の内面は平行当て具痕から8～9世紀に位置づけられる（今塙屋・秋成2006）。

第6節 中世の遺構

中世の遺構としては、道路状遺構が10条（SG1～SG10）検出された。ほとんどの道路状遺構は調査区南側の谷地形から丘陵尾根側に向かって同一方向（北北東）に延伸する。これらの掘削時期は不明であるが、桜島文明軽石（SZ-3, AD1471）の降下により埋没するため、15世紀後半以前には存在したものとみられる。

加藤徹氏によれば都城市内等における桜島文明軽石が堆積した道路状遺構は、13～15世紀頃と想定される

ものが多いが、掘削時期は不明なものが多いとしている。そのなかでも大年遺跡の事例は、8世紀から15世紀ごろまで、複数回の掘り直しを行いながら使用されたとしている（加藤徹2016）。本遺跡の場合は、互いに複数の道路状構造が隣接し、互いに重複するものであり、明確な掘り直し等は認められないことから、同一遺構の長期的な利用というより、付け替えや新設の繰り返しを示していると考えられる。今回の場合はも掘削時期は不明であるが、桜島文明軽石降下までのある期間においては、谷下と丘陵頂部（集落域など）をつなぐ生活道の役割を有していたものと考えられる。同様な事例は、嫁坂遺跡C区でも確認されている。

第7節 結語

今回の発掘調査は、都城盆地南縁に広がる丘陵上シラス台地上位面の丘陵頂部を対象とするものであった。縄文時代早期の集石遺構群から中世の道路状構造まで、南九州の火山活動を背景に遺跡の性格を変化させながら断続的に活動していく生活の痕跡を見いだすことができた。また、検討を深めることはできなかったが、縄文時代晩期における近隣遺跡との関連性を垣間見ることもできた。このように、上高遺跡をはじめとした都城志布志道路関連の発掘調査により、都城盆地南部地域の歴史的な地域相の一端を捉えることができたことは大きな成果であった。今回の発掘調査の成果が、今後の調査・研究の一助になることを期待したい。

引用・参考文献

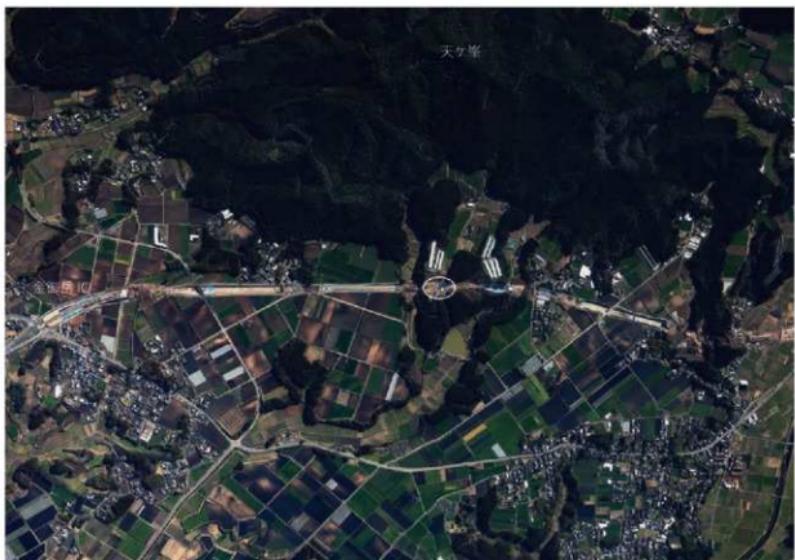
- 秋成雅博・今塙屋義行 2006「松ヶ迫窓跡の再検討」『宮崎考古』第20号 宮崎考古学会
- 甲斐尚和2019「第VI章 第3節 3集落の変遷」『嫁坂遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター 第249集
- 加藤徹 2016「第IV章 第4節 古代～中世の遺構について」『大年遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 第237集
- 桑畠光博 1989「中岳II式土器の再検討—東南部九州におけるある縄文土器の型式組列一」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会
- 堂込秀人 1997「南九州縄文晩期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分一」『鹿児島考古』第31号
- 日高広人・柳田裕三 2003「宮崎県の集石遺構とが穴」『九州縄文時代の集石遺構とが穴』第13回九州縄文研究会 宮崎大会
- 松尾有年 2004「宮崎県のおとし穴状遺構」『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』第14回 九州縄文研究会 鹿児島国分大会
- 宮地紹一郎 2005「黒色磨研土器、総覧 縄文土器」『同書刊行会』
- 横澤滋 2018「平格式・塞ノ神式土器一系統編年の現状」『九州の縄文時代早期後葉の文化』28回 九州縄文研究会 佐賀大会
- 吉本正典 2012「黒川式土器の歴史的位置」『九州考古学』第87号 九州考古学会
- 都城市史編さん委員会 2006『都城市史』資料編 考古 都城市
- 都城市教育委員会 1997『田谷・尻枝遺跡』『都城市文化財調査報告書』第38集
- 宮崎県都城市教育委員会 1999『肱穴遺跡』『都城市文化財調査報告書』第47集
- 宮崎県都城市教育委員会 2007『梅北佐土原遺跡』『都城市文化財調査報告書』第76集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『梅北針谷遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第204集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016『中床丸遺跡（第一次・二次）』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第239集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016『倭ヶ崎遺跡第一次～第三次調査』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第240集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2018『高橋遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第243集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2019『嫁坂遺跡II』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第249集

写 真 図 版

図版 1



上高遺跡から霧島山を望む



上高遺跡周辺地形（上空より）

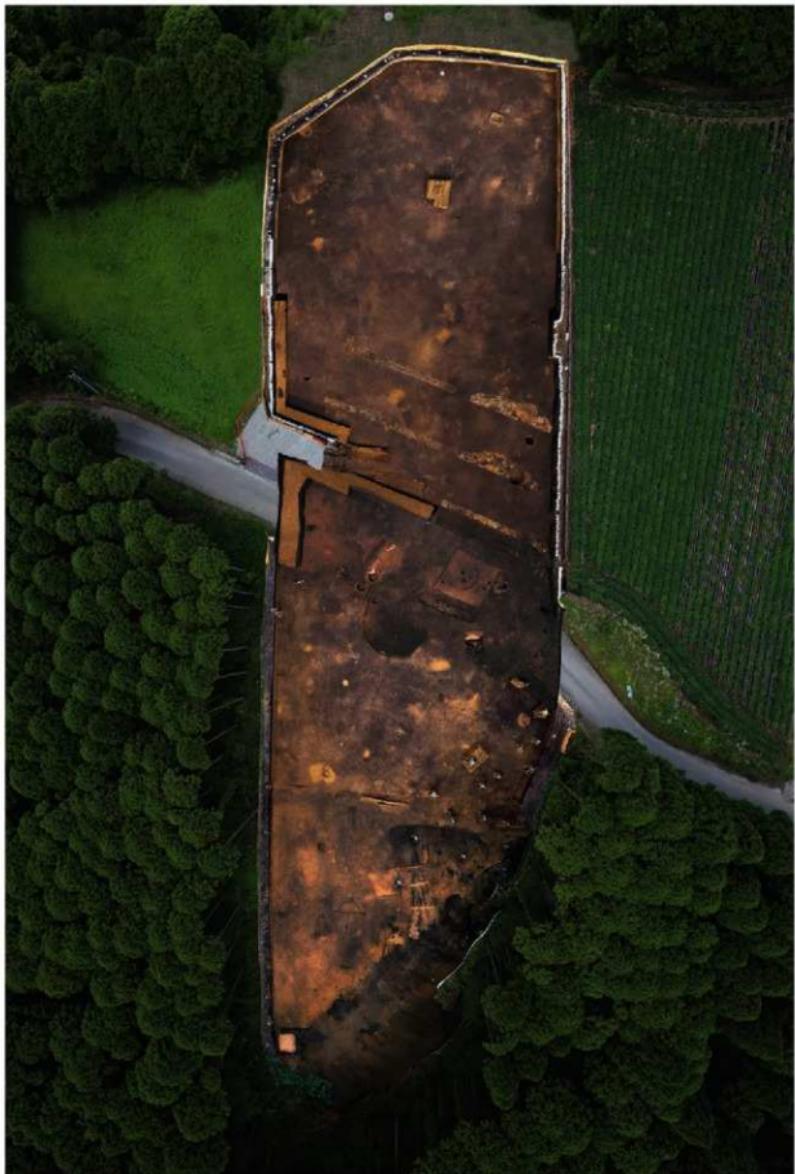
図版 2



調査区から都城中心市街地を望む



調査区から鹿児島県志布志市方面を望む



上高遺跡全景（縄文時代早期遺構）

図版 4



25号土坑遺物出土状況（北より）



10号集石遺構検出状況（東より）



12号集石遺構検出状況（北西より）



16号集石遺構検出状況（東より）



21号集石遺構検出状況（東より）



23号集石遺構検出状況（東より）



24号集石遺構検出状況（西より）



集石遺構検出作業の様子（2017. 冬）



縄文時代前期～中期の遺構群（調査区から南西に延びる谷を望む）

図版 6



1号竪穴建物跡検出状況（南西より）



1号竪穴建物跡完掘状況（北東より）



2号竪穴建物跡検出状況（北より）



2号竪穴建物跡土層断面（南東より）



2号竪穴建物跡全景（北東より）

図版 7



2号竪穴建物跡 柱穴（P2 西より）



2号竪穴建物跡 貼床除去（東より）



27号土坑土層断面（南より）



27号土坑完掘状況（南より）



68号土坑模出状況（東より）



68号土坑完掘状況（西より）



調査区基本層序（東から）



樹根除去作業の様子（2017. 夏）

図版 8



72号土坑土層断面（南より）



72号土坑完掘状況（南より）



72号土坑精査の様子



75号土坑と風倒木痕の検出状況（東より）



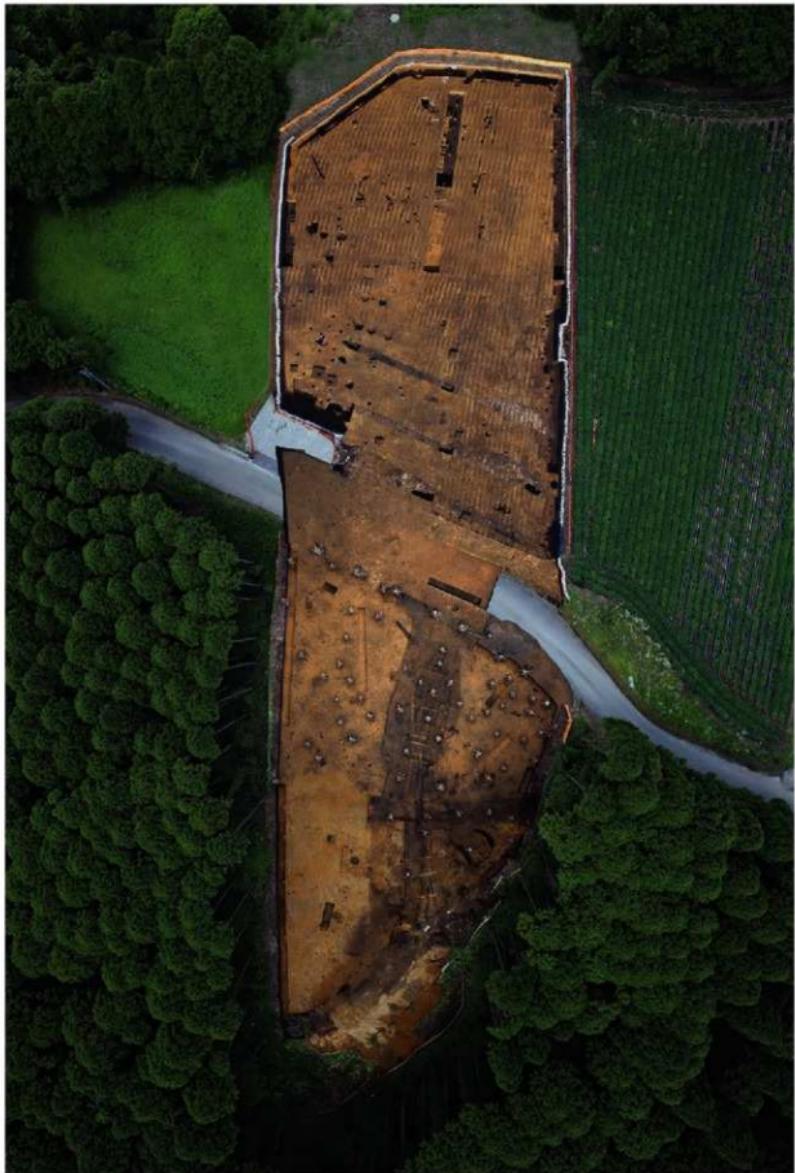
75号土坑土層断面（北より）



74・75・77号土坑完掘状況（北より）



発掘作業の様子（2018. 初夏）



上高遺跡全景（縄文時代晩期遺構）

図版 10



縄文時代晩期の土坑群（調査区中央付近）



1号土坑模出状況（北より）



1号土坑完掘状況（東より）



11号土坑遺物出土状況（南西より）



11号土坑土層断面（南西より）



23号土坑遺物出土状況（南より）



23号土坑完掘状況（南より）



40号土坑遺物出土状況（北東より）



40号土坑完掘状況（東より）



41号土坑遺物出土状況（東より）



41号土坑完掘状況（東より）



65号土坑遺物出土状況（北西より）

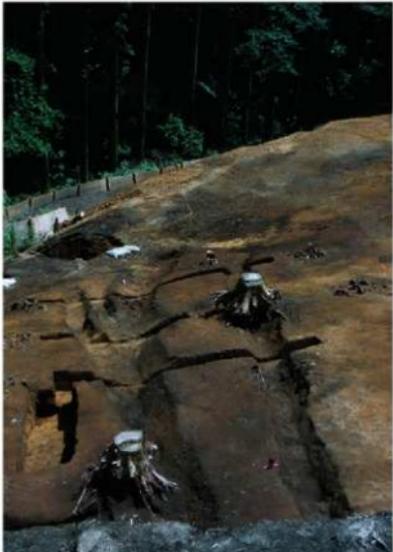


66号土坑遺物出土状況（北より）

図版 12



中世の道路状遺構全景（南より）



道路状遺構から調査区南方向を望む



道路状遺構検出状況（北より）



道路状遺構土層断面 1 (SG7・9・6)



道路状遺構土層断面 2 (SG7)



波板状凹凸面検出状況 (SG6)

図版 13 繩文時代早期・前期～中期の遺物



SC25 出土土器（縄文時代早期）



縄文時代早期 包含層出土土器（1）



縄文時代早期 包含層出土土器（2）

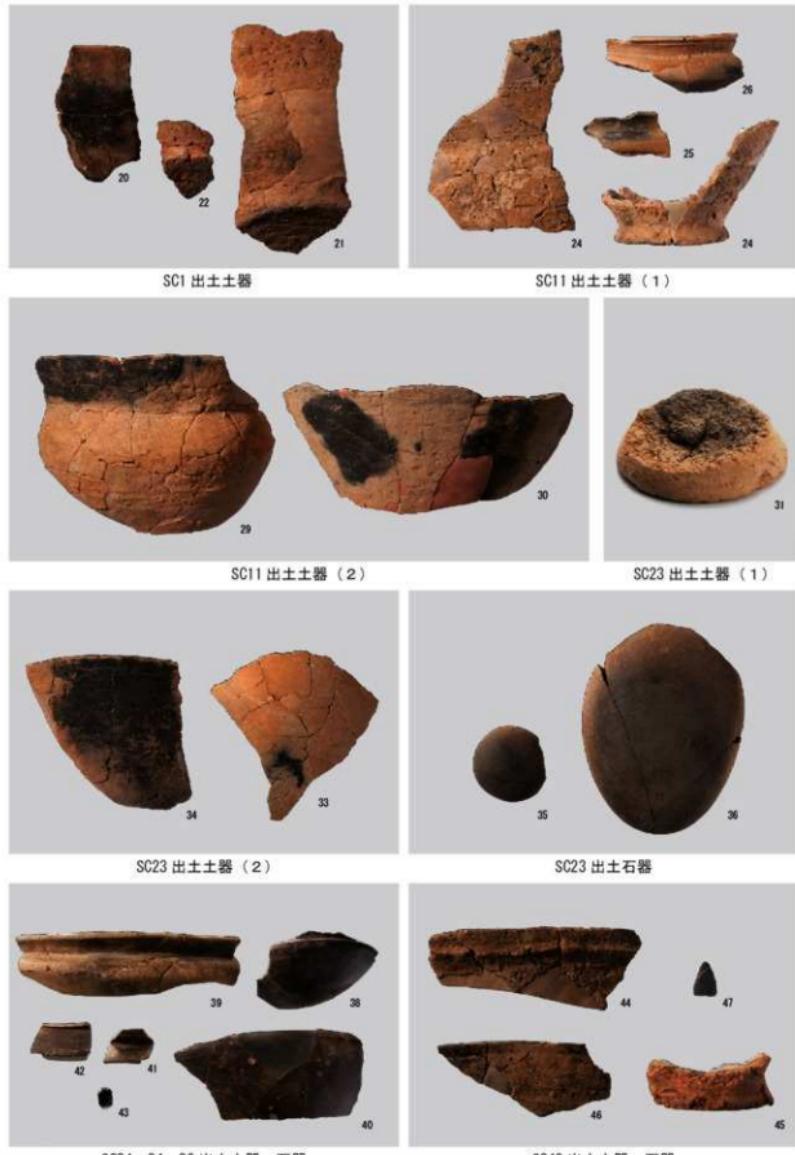


縄文時代早期 包含層出土土器（3）

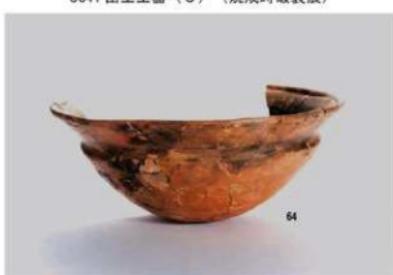
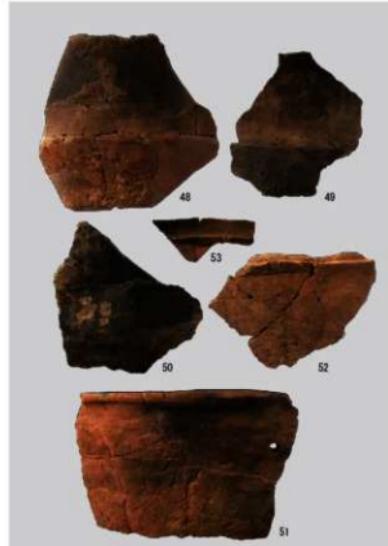


縄文時代早期・前期～中期の石器

図版 14 縄文時代晚期の遺構出土遺物



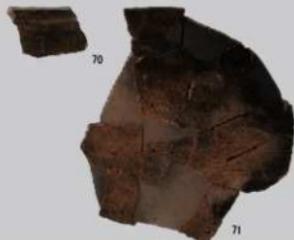
図版 15 繩文時代晩期の遺構出土土器



図版 16 繩文時代晚期の遺構出土土器



SC43 出土土器



SC55・57 出土土器

SC59 出土土器



SC61・65 出土土器 2



SC60 出土土器



SC66 出土土器・石器



SC65 出土土器



SC67・71 出土土器

図版 17 繩文時代後期～晩期の土器



縄文時代後期 包含層出土土器



縄文時代晩期 包含層出土土器（1）



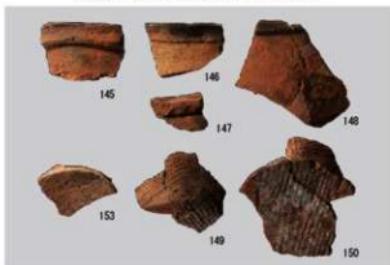
縄文時代晩期 包含層出土土器（2）



縄文時代晩期 包含層出土土器（3）



縄文時代晩期 包含層出土土器（4）



縄文時代晩期 包含層出土土器（5）

図版 18 縄文時代晚期の土器



縄文時代晚期 包含層出土土器 (6)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (7)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (8)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (9)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (10)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (11)

図版 19 縄文時代晚期の土器



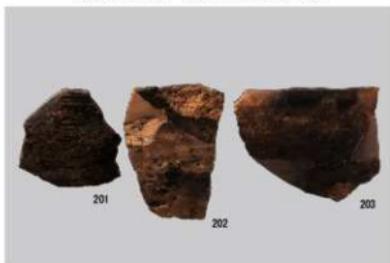
縄文時代晚期 包含層出土土器 (12)



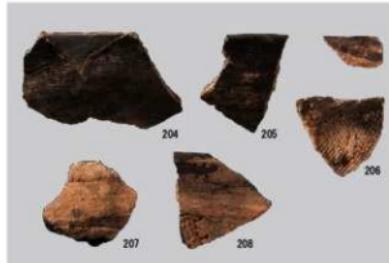
縄文時代晚期 包含層出土土器 (13)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (14)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (15)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (16)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (17)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (18)



縄文時代晚期 包含層出土土器 (19)

図版 20 縄文時代後期～晩期の石器・古代の遺物



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器（1）



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器（2）



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器（3）



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器（4）



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器（5）



古代の遺物

報 告 書 抄 錄

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第254集

上高遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

2020年3月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 宮崎紙工印刷株式会社

〒 880-0912 宮崎市大字赤江字飛江田 931 番地

TEL 0985(78)2324 FAX 0985(78)5162

Miyakonojo City

Kamitaka Site

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.254

2020

Miyazaki Prefectural Archaeological Center